



露國貴族一覽 全

72
3373



72
3373
明力邊
號 1101
卷



3373

魯國貴族 覽 第十八紀ノ初ヨリ一千八百六十一年

目次

第一編

貴族ノ創成

第一章

貴族創成ノ原由并ニ貴族ノ區分累代貴族及一
云キ 及其制定ノ

第二章

貴族創立ノ主意及貴族平民分等ノ起因

第三章

外國貴族ヲ魯國貴族ニ入籍セシ事

第二編

貴族ノ義務并ニ滿任ノ褒賜及滿任ノ免官

賞勳局

第一章

貴族ノ義務

第二章

滿任ノ褒賜及貴族采邑ヲ得ルノ原由

第三章

貴族緊要ノ修學

第四章

貴族ノ漸次義務ヲ免ルニ至ル事

第三編

貴族ノ特權及特權ノ原由

第一章

貴族仕官ノ特權

甲 武務

文務

第二章

貴族ノ處刑及肉刑ヲ貴族ニ除シ事

第三章

貴族ノ土地所有ノ權及其沿革

所有權理ノ要件

所有處分ノ權限

第四章

貴族商法職業ヲ營ムノ權ヲ得タル事

第五章

貴族人稅及徵兵ヲ

第六章

政權及司法ノ保護

此編五章ノ條目
第一章 貴族ノ義務
第二章 滿任ノ褒賜及貴族采邑ヲ得ルノ原由
第三章 貴族緊要ノ修學
第四章 貴族ノ漸次義務ヲ免ルニ至ル事
第五章 貴族ノ特權及特權ノ原由
第六章 貴族ノ土地所有ノ權及其沿革
第七章 貴族ノ處刑及肉刑ヲ貴族ニ除シ事
第八章 貴族ノ土地所有ノ權及其沿革
第九章 所有權理ノ要件
第十章 所有處分ノ權限
第十一章 貴族商法職業ヲ營ムノ權ヲ得タル事
第十二章 貴族人稅及徵兵ヲ
第十三章 政權及司法ノ保護

第一章

貴族ノ義務

第二章

滿任ノ褒賜及貴族采邑ヲ得ルノ原由

第三章

貴族緊要ノ修學

第四章

貴族ノ漸次義務ヲ免ルニ至ル事

第三編

貴族ノ特權及特權ノ原由

第一章

貴族仕官ノ特權

甲 武務

文務

第二章

貴族ノ處刑及肉刑ヲ貴族ニ除シ事

第三章

貴族ノ土地所有ノ權及其沿革

所有權理ノ要件

所有處分ノ權限

第四章

貴族商法職業ヲ營ムノ權ヲ得タル事

第五章

貴族人稅及徵兵ヲ免ル事

第六章

政權及司法ノ保護ヲ受ル貴族ノ特權

開ク即ハ
免ル、
一年即
ニ係ル
アリシ

次義務ヲ免ルニ至ル事

及特権ノ原由

ノ特権

刑及肉刑ヲ貴族ニ除シ事

地所有ノ權及其沿革

理ノ要件

分ノ權限

職業ヲ營ムノ權ヲ得タル事

及徴兵ヲ免ル事

法ノ保護ヲ受ル貴族ノ特権

賞勳局

九

聞ク即今魯ノ制貴族ト雖モ徴兵ヲ免ル能ハスト本書ハ千八百六十年即今ヨリ十四年前ノ刊行ニ係ル故ニ其ノ后ニ至ッテ改制アリシト見ユ

第四編

貴族ノ役奴法及其由縁

第一章

奴隷ヲ使役シ得ル者

第二章

地主奴隷處分ノ制限

甲 譴罰

乙 收税

丙 賣奴

第三章

地主奴隷處分ノ實跡

甲 譴罰

乙 收税

第四章

地主ノ擅權ニ抗抵セシ事

甲 政府ノ抗抵

乙 奴隷ノ抗抵

甲 自働ノ抗抵

一 逃亡

二 自殺

乙 他働ノ抗抵

一 擾乱

二 弑主

第五章

奴隷及廢奴ノ黨地主ニ抗セリヨリ漸ク奴隷自

由ヲ得タル事

第五編

貴族社會ノ設立及其地方ノ行政ト裁判トノ事務

ニ関與セシ沿革

第一章

一千七百六十二年貴族ノ義務ヲ廢スルニ至ル
マテ貴族地方社會ノ設ケナキ事

第二章

貴族義務ノ廢棄ハ地方社會設立ノ原由トナリ
シ事

第三章

貴族社會ノ創成及其社會ハ地方ノ行政ト裁判
ノ事務ニ関與スル事

甲 貴族社會及其創立

乙 地方ノ政權ハ貴族會議ニ関涉セシ事

丙 貴族社會ニ擔任スル縣邑ノ事務及貴族社
會ニ推舉セシ所ノ委員

第四章

小魯西亞及魯屬波蘭ニ行ハレシ貴族社會ノ權
理制立ノ衰廢

第五章

貴族社會自轄ノ真意及貴族社會ハ地方ノ行政
裁判ニ関涉スルノ權理

補解

附録

魯國貴族 覽

第一編

第一章

魯國ニ於テ十八紀ノ初メ彼得見大帝國政釐革ノ時ニ至ルヤテ夫ノ人民社會ヨリ分裂シテ一種特別ノ權利ヲ占有スル貴族社會ナル者未タ存スルアラズ然レハ則チ彼得見大帝以前ニ於テ人民社會ノ間ニ同權同等ナルモノ存スル乎曰其實跡ノ如キハ姑ク措テ茲ニ論セス此時ニ方リテ未タ所謂同權同等ナルモノモ特別社會ナルモノモ皆共ニアラズレテ唯廷臣ナレモノアルニ而メ此廷臣ハ四境ヨリ來着シタル諸侯ノ民兵共ニカ由立古侯ノ系統及堀地密諾弗侯ノ系統ナル獨立諸侯ノ子孫ヨリ成立セシ者ニメ十六十七兩紀ニ於

之ニ土地ヲ附與シ農民ヲ分賦シテ其地主トナレ之
 ニ在官奉職ノ義務ヲ負擔セシム然レ其尊爵ニ至ラ
 ハ自己ノ一社會ニ關セズ各自ノ系統ニ根由スルヲ以
 テ自ラ分階差等アリトス是故ニ廷臣ハ皆均ク在官奉
 職ノ義務及レ領地役民ノ權利ヲ有スト虫比敢テ真正
 ノ一社會ヲ成ヌニ至ラズシテ縉紳ハ侍臣ト侍臣ハ内
 閣貴族ト内閣貴族ハ侍童シコトウ縉紳子弟ト互ニ各々位階ヲ分
 テ官寺ヲ異ニシタリ
 彼得見大帝ニ至リ國內四散ノ都會居民ヲ收拾シテ之
 ヲ一社會トナス商賈職工是ナリ又廷臣ヲモ統一シテ
 之ヲ一社會トナス貴族是ナリ此都民社會ヲ創制スレ
 ニ當リ外國ノ制定ニ模擬シ外國ノ言辭ヲ借用シテ商
 賈ゲリ、ニヤヲ商級ツシ、フ分テ職ツシ、フ級ニ分テリ而シテ其廷臣社會

名稱スモホク猶高賈職工ニ於ケルカ如ク外國ノ
 言辭ヲ借用セリ是レ魯國ニ未タ曾テ其事實名稱皆共
 ニ在來セサルヲ以テナリ
 彼得見大帝廷臣ヲ統一シテ一社會ヲ創成ス而シテ之ニ
 名附スルニ波普兩國ノシリヤハトストウオ貴族ノ語ヲ
 以テセリ故ニ魯國ニ於テ上等社會ヲ概稱シテ貴族ト
 名稱セシメハ十八紀ノ上半ニ始マル然レ其大帝ノ詔
 令ニ由テ觀レハ其初メ唯並廷臣並官官及レ縉紳ノ子弟ヲ云ニノミ
 貴族シヤ、ト、ス、ト、カノ名稱ヲ附シテ内閣ド、イ、ツ議官タル内廷ツ、レ、ト、ツノ高官ハ其名
 稱ニ與カラザルカ如シ即チ是千七百十三年全國徵募
 ノ令ニ於テ高官ノ徵募ヲ貴族ト相分ツ又其前年ノ詔
 令ニ於テ高官ヲ他ノ官員ト相異ニスルヲ以テ見ルベ
 シ然レ氏布令全輯中ニ於テ千七百十二年ニ初テ見ハ

七百十三年ノ後ニ至テハ内廷ノ高官ヲ称スルニ彼是
 ヲ論セズ唯々貴族ヲ以テ之ヲ称セリ而メ其後諸廷臣
 ヲ名称スルニ魯語ノ貴族ヲ以テシタルハ十八紀ノ下
 半ニアリ即チ十七百六十二年ノ勅令及千七百六十七
 年ノ會議ノ後チニ此名称ヲ諸廷臣ニ附與シ特權證書
 ヲ以テ之ヲ確定ス此魯語ノ貴族ノ名称ハ外國語ノ貴
 族ノ名称ニ比スレハ尤モ因襲ノ久シキニ由ルモノナ
 リ西歐羅巴ノ上等社會ヲ名称スル *Nobility, Nobles, Ael*
 貴族ノ語ハ全ク魯語ノ貴族ト其原由ヲ異ニシテ即チ
 系族血統ヲ云フ義ナリ而メ魯語ノ上等社會ヲ名称ス
 レ *Stofuruncanto, Stofuruncans* 貴族ノ語ハ往昔帝宮或ハ侯家
 ニ仕官ス者ヲドウオレニヤト称セシヨリ来レリ又

領守ノ家臣ハ其使役奴隸ニ属スト其亦時トメ公之
 ヲモトワリヤント称セリ又小魯西亜ニ於テ十八紀ニ
 至レマテ紳士ノ家臣ヲモトワリヤント呼ハリ
 曾テ諸侯ノ左右ニ在リ又諸侯ノ深宮ニ侍坐スル少年
 輩ヲ宮童ト称レ其後之ヲ宮人或ハ宮臣ト称セリ此義
 ヨリメ貴族ノ語ハ千七百七十五年スバタリスク侯ノ
 記録中ニ初メテ現出シ終ニ諸廷臣ニ弘及セリ然レ氏
 模斯格ノ時世ニ於テドウリヤニンノ語ハ位階ノ義ニ
 メ又下位ヲモ示スカ故ニ縉紳及侍臣ヲドウリヤニシ
 ト称スル時ハ其尊榮ニ對シ却テ貶称ナリトス故ニ當
 時ノ事情ヲ察スルニ恐クハ彼得兒大帝此際ニ才テ高
 位貴官ノ舍入スル諸廷臣ヲ名称スルカ為ニ波普兩國
 ノ貴族ノ語ヲ假用シタルナレバシ然レ氏其後既ニ貴

族ノ語ハ一下位ノ義ナレヲ志遺スルニ至テ再々^{ドワリヤン}貴族
 ノ語ヲ以テ諸廷臣ヲ概稱スルニ至レリ然ルニ名実相
 結合シテ其名滅スト雖^ド其実存スルアリ夫ノ魯国上
 等社會ヲ稱スルニ假用セシ^{シヤハトストウオ}貴族ノ名ノ如キモ亦是ナ
 リ故ニ魯国上等社會ハ其本国ノ風習ト異ナル西政羅
 巴封建ノ地ニ行ハル、^{シヤハトストウオ}貴族ノ実ヲ得タリ即チ魯国廷
 臣ハ始メ純然タル魯人ノ性質ヲ以テ^{シヤハト}貴族トナレリト
 雖^ド其後其^{シヤハト}貴族ヨリ^{ドワリヤン}貴族ニ改稱スルニ至リテハ外国人
 ノ魯国ニ新来スルカ如クニ^{シヤハト}貴族ノ名ヲ脱セリト至
 氏猶其^{シヤハト}貴族タルノ実ヲ存セリ
 余輩既ニ陳述セシ如ク彼得兒大帝ノ一令ニ由テ廷臣
 ハ^{シヤハト}貴族ノ一社會ヲ成セリ史氏ミト^ド數賞シテ曰ク彼
 得兒大帝ノ一英断ヲ用セ更ニ嚴令ヲ下サスシテ全魯

國ニ此一^ド大變革ヲ起セリト而メ此大變革ハ大帝初遊歸
 國ノ時ニ成レルヲ知ルハキナリ
 余輩實ニ一千七百八十五年ノ第一貴族憲法ト名クハ
 キ^{ダラモト}詔書發行ニ至ルマテホタ曾テ此大變革良法ノ如キモ
 ノヲ見サレナリ夫レ魯國貴族ハ旧廷臣ヨリ成立シ遂
 ニ新帝臣モ亦官位等表ノ制定ニ由リ貴族ト一般ノ義
 務アルヲ以テ^オ自ラ之ニ加入スルニ至レリ而メ貴族ヲ
 メ其外見ヲ異ニシ以テ平民ト相分メシメンカ為ニ独
 己風ノ服ヲ服シ唇下ノ鬚ヲ剃リ漸々其慣習風儀ヲ修整ス
 ルニ至ラシメント^ド彼得兒帝ハ曾テ其貴族ニ^オ脱
 シテ衣上ニ寢スルヲ教ヘタリ
 此外貞修整ノ影響ニ由テ^オ自ラ貴族タルノ精神ヲ發起
 シ初メテ特權社會ノ人民社會ト異ナレヲ感知セリ是

等ノ事ハ漸々十八紀中特ニ一千七百六十二年貴族ノ
 義務免解ノ後ニ於テ熟成ス而メ一千七百六十七年貴
 族會議ニ於テ其代議人設立ノ命令ニ之ヲ明示セリ是
 ニ於テ旧廷臣職ノ位階ハ新制官等表ノ位階ニ混一シ
 テ其痕跡自ラ消滅スルニ至レリ
 彼得見大帝幼年ノ時ニ於テハ^{ボヤル}縉紳ノ人員五十一名ア
 リ其後千七百五年ニ至リテ猶二十三名ヲ存ス其員中
 ニ^{ガラフ}伯位^{ボヤル}縉紳ニメ旧新兩位階ノ間ニ貴顕ナル者アリ即
 チ^ツセレメテ^ゴコロウ^ムシ^フウ^シキ^シノ^三氏
 是ナリ此時ニ方リ初メテ^{ボヤル}縉紳又帝ノ^{ストリニク}司膳官^ヲ以テ縣
 令ニ任ス即チ^{ボヤル}縉紳ストレシ^フ氏ヲ^キイ^フ縣ノ令トシ^{縉紳}サ
 帝ノ^{司膳官}ゴロ^ツウ^シ候ヲ^キイ^フ縣ノ令トシ^{縉紳}サ
 ルテ^ゴフ^氏ヲ^スモ^レシ^スク^縣ノ令トシ^帝ノ^{司膳官}ハ

一ウ^エル^ゴリ^ツウ^シ候ヲ^アル^ハシ^ゲル^縣ノ令トシ^縉
 紳^アフ^ラシ^シ氏ヲ^カガ^ニ縣ノ令トナセリ千七百十
 八年二月三日ノ會議ニ列署セシ所ノ人員名簿ニ旧位
 階ノ^{ボヤル}縉紳^六名ヲ登録ス其^{縉紳}長^{タル}ト^ルバ^ツキ^イ候
 ハ千七百五十二年ニ於テ改シ其位記ト共ニ之ヲ埋葬
 セリ
 侍臣^{オトリニチ}ハ千六百九十一年ニ於テ六十一名アリ千七百五
 年ニ於テ十八名アリ而メ千七百十八年二月三日ノ會
 議ニ侍臣ハ唯四名ノミ列署スルニ至レリ十七紀ノ終
 リニ於テ彼得見大帝其臣民ヲ旧位階ニ任スルヲ廢止
 セシト^虫モ其後千七百十一年エベリ^ニグ^地ニ於テ帝
 ノ^{司膳官}ユ^シコ^フ氏ヲ^{オトリニチ}侍臣ニ轉任ス此侍臣ノ位官ハ
 其人ト共ニ滅絶セリ然レ^氏十八紀ノ上半ニ至テモ猶

驛遊官^{シチユル}ハ侍臣^{ニヤス}ノ官位ヲ存セリ内閣^{ドウムノイ}
 貴族^{ドウリヤン}ニ列スル小官ナリ^{ハ千七百五年ニ於テ十五名アリ}
 リ而シテ千七百十八年二月三日ノ會議ニ列署スヘキ
 布令ヲ以テ此貴族ヲモ亦召集セリ
 司膳官^{コトシイ、ストリニラ}帝族^テノ食事^ハハ千六百八十六年ニ於テイワンア
 レキセイウ井千帝ノ宮中ニ七十四名^{パートル、アレキセ}
 イウ井千帝ノ宮中ニ六十九名^{マリヤ、マトウユ}
 ウナ皇后ノ宮中ニ三百十七名一説ニ百五十四名^{エウ}
 ドーキセ、セヨードロウナ皇后ニ二十名アリ而シテイ
 ワシ及セ^{パートル}兩帝宮ニ在勤スル司膳官ノ外ニ此
 官位ニメ隊長ヲ奉職スル者二千七百二十四名又官長
 ヲ奉職スル者百三十三名アリ又スモレンス夕縣ノ波
 國貴族^{ニリヤト}ヨリ司膳官トナリシ者五十九名アリ又千七百

二年ニ於テ侍臣^{コトシイ}ノ官位ニメ大將^{シヤホフスキイ}侯所^{コニヤス}
 轄ノ隊中ニ司膳官^{ウヤゼムスキイ}ハ之カ裨將タリ
 千七百十二年ノ記録ニ^{コトトイ}宮室司膳官ト^{ストリニラ}司膳官トノ兩位
 階ヲ記載スルアリ然レモ既ニ前文ニ陳述セシ如ク最
 初ノ縣令中ニ帝ノ司膳官ニメ^{キイフ}及セ^{アル}ハンダ
 縣^カノ令トナル者アリ千七百二十五年ニ於テ女帝^悦
 加^カ埜利那^ナ一世ハ其司膳官^{モロダノフスキイ}ヲ新位
 階^テ内閣^テ正議官ニ遷任ス千七百二十六年將校ヲ二十一
 縣ニ派遣セシムヘキ元老院ヨリノ命令ニ由テ司膳官
 ニ其官職ヲ任セシム即チウクリツク縣ニ^{イワン}ノジ
 ン氏^{パレヤ}スラウスク縣ニ^{ボリス}子ロノフ氏カレシ
 スク縣ニ^{バスト}ゼーフ、ミリュン^氏等ナリ又宮室司膳官
 コゾロフスキイ侯モ亦其遣中ニアリ女帝^ア安那^オ沃^オ諾^オ

乎^ウ那^ナノ伯父^{ハク}サレテコフ氏ハ千七百三十年ニ至ルマテ
新位階ヲ望マスシテ猶司膳官ノ位階ニ居レリ又砲隊
士官ダエーロフ氏ハ千七百三十六年ニ於テ司膳官ノ
位階ニ在テ没セリ千七百四十年ニ至ルマテ司膳官ノ
位階ニ止マリシ^チチユリシ^チエフ氏ナル者アリ此人ヲ以テ
其位階ノ最終トナス然レ氏^ハスモレン^スク縣貴族中ニ
千七百五十六年ニ至ルマテ猶司膳官ノ位階ヲ有スル
者アリ

宮^{ミヤ}官^{クワン} 帝ノ衣服財器乘輿 御馬ノ^ミヲ^マ司^シル^ル ハ千六百八十六年ノ記録ニ同

レハ其員數千八百九十名ニメ其他ノ百六十三名ハ
軍發免解ノ者ナリ千七百三年ニ於テ^ママ^ロコ^フ及^セ
^クホ^イ西^ノ勤^ムル^所ノ司鑰官ヲ新位階ノ^カカ^イル^ル
^グイ^ル宮^官ト改称ス千七百二十七年諸縣ニ將校ヲ分

遣スル^ルノ命令ヲ以テ宮官ヲ^シ少^シ佐^ト改称シ之ニ其任ヲ

授ク即チ^ウオ^ロコ^ラーム^スク^ノ縣^ニゴ^スロ^フ氏^モザ^イ
ス^クノ^縣ニ^チア^プリ^シ氏^是ナリ千七百三十九年ニ於テモ
亦猶宮官ノ位階ヲ有スル者アリ即チ^イワ^ンド^ブロ^フ
スキイ氏是ナリ

内閣^{ドムノイシヤク}史官ハ千六百八十六年ノ記録ニ同レハ其員數九
名アリ而メ千七百五年ニ於テ六名ニメ其員中ニア
ウ^クラ^イシ^ツア^フ氏^ハ内閣^{ドムノイサウユトニク}議官ニ轉任セラレタリ

千六百八十六年ノ記録ニ同レハ摸斯格内廷ノ官員之
ヲ都府貴族ト云セ其人員千八百九十三名アリ又郡邑
ノ官員ヲ郡邑貴族ト云^リリ此都府貴族ヲ郡邑貴族ト
分位ス此分位ハ唯彼得兒帝ノ治世ニ於テスルノミナ
ラヌ其後女帝安那^{アンナ}沃安^{ヨアン}若乎^シ那^ナノ治世ニ至テモ亦猶遺

存セリ是即チ千七百三十年郡邑貴族ノ事ヲ記載セシ
 公令ニ明瞭ナリ
 侍童シツイ 縉紳及々貴族ノ子弟ニモ采地ヨリハ彼得兒帝治
 世ノ初メニ在リシ其人員ハ史氏ウストリーヤロフ著
 述ノ彼得兒史ニ詳カナリ此侍童ノ位階ハ速ニ廢棄セ
 ラレト雖其後ニ至テ猶三百名ヲ遺存セシ事千七
 百十一年ノ記録中ニ見ニ又其後年ニ至リテモ其位階
 ヲ有セシ者アリ即チ千七百三十年法制會議ニベロゴ
 ーロド縣ヨリ侍童位階ノセヨードル、ルトウ井ノ氏ヲ
 派遣ス而メ千七百三十一年ニ於テモ亦侍童位階ノア
 シンデレイ、アウデー、エフ氏ヲ、ホルホウ、エツ縣ノ大將ニ任
 セリ
 斯ノ如ク旧位階ハ唯彼得兒大帝ノ治世中ノミナラス

殆ント十八紀ノ下半ニ至ルヤテ猶遺存セリ故ニ旧官
 位等表ヲ廢棄スル能ハス且ツ旧位階ヲ新官位ニ改称
 セヌメ旧官位ノ存スル間其等表モ亦存セリ一日議官
 旧等表ノ存スルヲ見テ帝ニ上奏シテ曰ク若干ノ官員
 未タ旧官名ヲ有スルハ何ソヤ即チボヤク縉紳、クラウケイ酒饌官、オコリニケイ侍臣、ドムシ内
 閣、ドウリヤシ貴族、ドウリヤシ如キハ今尚存セリ陛下何ソ旧官ノ願望ヲ顧
 ミテ之ヲ新官位ニ改称セザルヤ目今帝國ニ於テ已ニ
 官等位階ヲ新定ス而メ及采又縣官及々持校ノ官位ヲ
 モ制定セントス若シ旧官位ヲ新官位ニ改称セザル時ハ
 ソレニ從屬スヘキ者恐ラクハ隨從セザルニ至ラント
 然レハ議官ノ上奏ハ終ニ行ハレザルナリ
 官位等表ハ僧位昇進ノ順序ニ擬シ其任ニ堪ユル者ハ
 高位ニ昇進スヘキヲ基礎トナシテ之ヲ編制セリ然レ

氏廷臣ノ昇進ハ門地廢止ノ後彼得兒帝ノ治世ニ至レ
 マテ多ク其系統ヲ以テス官位等表ノ制定ニ由リ曾テ
 魯国ニ行ハレシ所ノ弊習及セ旧法ヲ廢シ國勢ノ官位
 ニ由テ一世貴族トナスノ新法ヲ設ケリ
 彼得兒帝官位等表ヲ発行スル以前ニ於テモ猶其臣民
 旧官位ニ任スルヲ禁セリ即チ千六百九十五年ニ於
 テ司膳官、宮官等ニ任スバカラサルヲ命ス千七百一
 年及セ千七百三年ニ於テ從來ノ侍童ニ限リ以テ新任
 ヲ許サス其遺存侍童ノ事ハ十八紀ノ初メ親兵隊補備
 令中ニ見ユ千七百九年「パートレ」アプラクレン氏縉紳
 位階ヲ賜ヘシト千七百十一年「ユシユ」フ氏ノ侍臣ニ昇
 進セシトハ旧官位ニ任スルノ未例トナス彼得兒帝ハ
 許多ノ位階ヲ經リト雖ヒ縉紳ニアラズ侍臣ニアラズ

ノ下士官長ボハレ、カニ艦長トナレリ又帝ノ愛臣「メン」シコフ
 氏モ亦旧官位ニ登ラスメ政洲摸擬ノ新官位ヲ受ケリ
 此新官位ハ官位等表ノ未タ発行セサル前既ニ之ヲ施
 行セリ
 余輩今此ニ十八紀ノ初年ニ創成セシ所ノ將官、ナチラレ聯隊長
 上等士官アールノ如キ武官ノ事ヲ説カズメ官位等表ニ配列
 セシ所ノ文官ノ事ヲ論セン先ツ「ホル」タワ大戦ノ後「ド
 ル」ゴム「キイ」侯タイスヲ内閣正議官ニ等官ニ任シ縉紳ハウ
 シン、タールプ「シ」キン氏タールヲ内閣議官ニ等官ニ任セリ千七百
 十年「ラ」グズンスキイ氏タールハ宮議官ニ等官ニ昇進ス千七
 百十一年伯位「ア」プラク「シ」ン氏タールハ内閣議官兼鎮臺都督兼
 「ア」ゾ「フ」懸令ニ任ス千七百十八年二月三日ノ會議ノ列
 署名簿ニ目レハ内閣議官モ縉紳、ボヤレ侍臣、ケチラレ少將、ケチラレ聯隊長ト共

賞勳
 勳
 勳

其席ニ排列セリ此時ニオリ已ニ上等社會ハ新官位
 及セ外国尊極ニ眷戀追慕シ遂ニ新官位ヲ受ルノ歎羨
 ヲ生スルニ至ル故ニ能ク魯情ヲ洞察スルノ外国人之
 ヲ評シテ曰ク魯国ニ貴人ナル者アラズメ唯神將艦長
 軍裁判官書記官ノ官位ノミアリト此語實ニ的中セリ
 ト言フベシ千七百五年^{ゴヤル}縉紳ノ位階ニ叙セラレシ^ゴ一
 トルアプロクレン氏ハ千七百十五年ニ於テ^ゴ伯位ト内
 閣議官ノ官位トヲ賜フ^ゴ帝ニ請フ^ゴリ然レ^ゴ又高官
 中ニ旧習ニ拘泥シテ新官位ヲ好望セザル者アリ即チ
 サルテコフ氏ハ新官位ヲ望マスレテ千七百三十年ニ
 至レ^ゴマテ侍臣ニ止マレリ
 又茲ニ旧官位ノ事ヲ開陳セン夫レ旧官位ヲ廢棄スル
 ヤ何等ノ公令ヲモアラス蓋シ其有無ハ未タ明知スバ

カラスト雖^ゴ曾テ記録上ニ見サル所ナリ抑モ旧官位
 ハ新官位ノ現出スルニ從テ自ラ消滅スルニ至レリ其
 終末ノ消滅ハ旧官位順叙ノ廢止ト千七百十一年新官
 位ノ制定專任タル元老院ノ創設トニ關涉セリ而メ此
 新官位ハ如何ナルモノニメ旧官位ト相異ナル所ハ何
 ソヤ此疑問ヲ明解スルニ門地有無ノ數語ヲ以テス
 魯国ニ於テ彼得兒帝以前仕官奉職ハ家格系統ニ由テ
 之ヲ定ム故ニ其家格系統ノ貴賤ニ從テ各其官職ノ等
 級ヲ異ニス^ゴ是門地ニ貴賤アル所以ナリ曾テ門地ヲ以
 テ官職等級ヲ定ムルハ魯国ノ慣習ト成リテ高官卑官
 皆共ニ之ニ^ゴ扱レリ即チ高官ノ縉紳侍臣ノミナラス亦
 貴族侍童モ門地ノ權ヲ有セリ故ニ此門地ナルモノハ

魯國ニ同推タル系統貴族ノ一社會ヲ設立スルヲ能ハ
 サルノ影響ヲ生セシメタリ
 彼得見帝以前門地權權ノ時ニ於テモ時トメ微賤系統
 ノ者帝ノ寵愛ヲ得テ貴位高官ニ昇進セシテアリ即チ
 亞登設、容哈伊祿味帝ノ治世ニ於テルチシチエフ氏ナ
 シテヨーキン氏マトウエフ、シヤナイ氏等ハ縉紳ノ位
 階ニ登庸セラレタリ然レモ是レ一時ノ僥倖ニメ平常
 ノ珍奇トスル所ナリ何トナレハ從來制定ノ順叙ヲ紊
 リ且ツ貴顯ノ系族ヲ辱シムルヲ以テナリ故ニ内閣議
 官國ノ柱石イタルハ大抵世々貴顯ノ一族ヨリ出ツ即チ
 ウオロテンスキイ氏ムシチスラーフスキイ氏ガリ
 ツミシ氏等ナリ十七紀ノ終リ門地棄棄ノ後チ公然門
 地ヲ有スル能ハスト至ル其奉職在官ノ者自己ノ胸算

功計ニ因リ依然トメ私ニ其門地ヲ有セリ是ニ於テ
 チユルハトトフ候言テ曰門地既ニ棄セラレト至ル其
 順序定規ノ未タ立タサレテ以テ縉紳及ヒ侍臣ハ従前
 ノ如ク系統ノ貴顯ニ由テ其勤功ノ如何ヲ問ハス故ニ
 旧順叙ニ従ヒ侍臣ヨリ直ニ縉紳ニ任セラレ又許多ノ
 少年輩モ高官ヲ得タリ即チトモベツキイ侯ノ如キ未
 タニ二十年ニ滿ズシテ縉紳ノ位階ニ就キ國家ノ大事ニ
 與カレリト之ニ及シテ彼得見大帝其國家ノ為ニ人ヲ
 選ミ官ヲ授クルニ方リテ系統ノ貴族ヲ論セス又國習
 ノ變更ヲ顧ミス單ニ其人ノ任職ニ堪ユルヤ否ヲ洞察
 シテ之ヲ登庸ス往昔魯國ノ侯伯ハ諸族階別ノ強カ豪
 勇ナル者ヲ其民兵ニ召募セシテ彼得見大帝従采ノ強
 カ豪勇ナル民兵中ニ智力勇氣アル者ヲ補充ス乃チ今

此ニ「アレキサンドル」メンシコフ氏ノ元ト製鑊師ヨリ
 出テ遂ニ大帝股肱ノ臣トナレリ而メ其魯国一大豪華
 ノ事業ヲ翼賛セシ事ハ姑ク此ニ論セスシテ其他ヲ説
 クハシ大抵彼得見大帝ノ臣下ハ系統ノ人ニ非スシテ
 才智ノ人ナリ即チ「シーヤアセロフ」侯ハ元ト猶太人ナ
 リ又魯国初任ノ大判事ナル「ヤグジンスキイ」氏ハ新教
 寺僧ノ子ナリ又「大警視」テウキユル氏ハ「葡萄牙」人ニ元ト
 一高船ノ房豎ナリ其他ノ著名臣ノ事ハ此ニ詳載セス
 女帝悦^エ加^カ埜^ラ利^リ那^ナニ世モ常ニ好シテ貴族ヲメ左右ニ近
 侍セシメ其中ニ秀才賢能アル者ヲ明知シ之ヲ高官ニ
 擢ス即チ豎人ヨリ登庸セラレシ「シウユルス」氏ハ女帝
 ノ腹臣ニメ且賢令ナリ又「テプロフ」氏ハ元ト僧家炊夫
 ノ子ナレ^レ帝ノ賢臣ニシテ善ク政治ニ達セシ者ナリ

又小魯西亞ノ庶臣「バズボロジコ」氏「ザワドフスキイ」氏
 「トロシチユンスキイ」氏ノ如キハ其系統貴顯ナラスト雖
 氏女帝ノ治世ニ於テ第一ノ名臣タリ之レカ為ニ一時
 ノ僥倖ヲ以テ官位ヲ得シ事ハ十八紀ニ至テ漸ク罷メ
 リ十九紀ニ於テハ貴顯系統ヲ以テ高位貴官ニ任セズ
 シテ英才賢能ヲ以テ之ニ任セリ即チ「スパレンスキイ」
 氏「カンクリン」氏「ウロンチユンコフ」氏是ナリ曾テ彼得見
 帝奴隸中ヨリモ人才ヲ選セ間謀等ニ任ス特ニ多ク平^平
 氏ノ賢才アル者ヲ登庸セリ然レ^レ平民其官位ニ由テ
 貴族トナリ遂ニ其系統ニ誇リ各家譜ヲ索出シテ互ニ
 卑賤ノ出生ヲ誹謗スルニ至レリ是十七紀ノ終リニ於
 テルノミナラス其後ニ至テモ其例等許多ナリトス一
 日縉紳セレメテフ氏ノ家ニ會宴セシ時縉紳「セイ」氏

ト「ロモダノフスキイ侯」ト五ニ其出生ヲ証證シ遂ニ爭
論ニ至レリ即チ「モロダノフスキイ侯ハ摸斯格ノ侯族
タルヲ自負シ「セイシ氏ヲ呼ンテ叛臣ノ孫ト稱ス且其
汚名ヲ以テ彼ノ父母ヲ侮辱メリ是ニ於テ「セイシ氏大
ニ罵リ「ロモダノフスキイ侯ヲ卑劣ノ侯族ト稱シ杖ヲ
以テ毆撃セリ彼得見帝治世ノ終リニ至テモ亦家格殆
ント同等ナル縉紳セイシ氏ト「ロモダノフスキイ侯ト
ノ間ニ暴々爭論ヲ生セリ而シテ之ニ類似セシ大爭論ハ
千七百二十二年議官「シヤセロフ侯」ト「オレフコ
コフ、セサレフ氏トノ間ニ於テ其一例ヲ見ルハシ議官
「シヤセロフ侯ノ弟「ミハイル、シヤセロフ氏ノ退職ノ後
外國人賜給法ニ從テ猶之ニ六月間ノ俸金ヲ下賜スル
ノ議起ルニ當リ大判事「セサレフ氏進ンテ曰彼ノ「ミハ

イニシヤセロフナル者ハ外國人ニ非ス猶太教ヲ奉ス
ルノ種族ニメ一縉紳ノ奴僕ナリ故ニ人之ヲ目シテ「シ
ヤセロフ侯ト呼ハリト議官「シヤセロフ侯「ヤミハイル、シ
ヤセロフ侯ト呼ハリト議官「シヤセロフ侯ハ真正ノ耶
蘇教ヲ奉セシ者ニメ摸斯格貴族ニ位シ没セリ大判事
再々之ニ謂テ曰尔ノ言フ所非ナリ彼ハ實ハ猶太教ヲ
奉セシ者其親戚ハ目今現ニ猶太教ヲ奉シテ「オレシ府
ニ居住スト是ニ於テ「シヤセロフ侯之ニ激シ罵リテ曰
尔ハ元ト街上ノ筆耕且製革ヲ事トスル者ヨリ出テ即
チ尔ノ父ハ附屬ノ一農夫ヲモ有セズ自テ尔ニ耕耘ヲ
教ハタル者ナリト又千七百十九年ニ於テ會議官ノ位
地ニ就テ不平ヲ抱キ不和ヲ醸シ其事務ニ矛盾ヲ生ス
ルヲ以テ政府夙ニ之ヲ洞察シテ門地廢止ノ命ト議長

賞勳
勳章

賞勳
勳章

任選順番ノ令トヲ布告セシハ實ニ奇怪トスルニ足ラ
サル所ナリ即チ其命令ニ曰會議官ハ同心協力ヲ主ト
シテ各其長上ヲ貴セ其指揮ニ從セ敢テ罵詈侮慢ノ語
ヲ吐ク可カラズト是ニ由リ元老院ニ於テ集會議官ノ
順序ヲ制定セサルヲ得ス又議長ノ任選ハ定時ニ其議
員ヨリ登用スルキヲ定メリ
彼得兒大帝官務ノ選任ハ從來家格系統ヲ以テスルノ
旧習ヲ廢シ英才賢能ノ者ヲ以テスルノ新法ヲ設ケ其
系族ノ貴賤ニ由ラスシテ高位貴官ニ拔擢スルヲ確定
スルニ千七百二十二年一月二十四日ニ於テ發行ノ官
位等表ヲ以テセリ
現今此官位等表ハ時世ノ變遷ニ從テ無用ニ屬ストモ
此發行ノ初メ魯國政府ノ創立ニ盛大ノ効用ヲ現ハセ

リ此官位等表ノ制定ハ實ニ共和政^{テモカラ}ノ模型ニ成ルモノ
ニメ即チ官位ヲ十四等ニ分チ平民ヲ從來ノ高位貴官
ノ者ト別ツ而メ賢才藝能アル者ハ此官等ノ順序ヲ起
越シ直ニ高位貴官ニ昇進スルヲ得且ツ卑賤ノ者ト虫
氏其官位ニ由テ貴族ニ入レノ路ヲ開ケリ是ニ於テ新
任ノ官員陸續トシテ貴族ニ加入スルカ故ニ之ヲ特別
ノ一族トメ自ラ界限スルヲ能ハサルニ至レリ是ヲ以
テ後來官位制定ノ立法ハ下文ニ陳說スルカ如ク官位
等表始成ノ趣意ト相天スルニ至ル即チ官位等表ノ趣
意ニ由テ之ヲ視ルニ官位ハ職務ヲ標記スルモノニメ
若シ其職務ナケレバ但ニ外面ヲ表飾スル尊^ト標^トノ如キ
モノナリ故ニ官位ハ其職務ニ應シテ定マルモノトナ
レリ然レモ其後官位ハ表飾尊稱ノ如ク職務ニ関セス

却テ職務ヲ定ムルモノトナレリ加之官位ニ由テ貴族
トナルカ為ニ其等級昇進ノ定期ヲ短縮セシハ尤モ共
和^カ政^ク体^クノ性質ヲ損毀シタリ到底官位等表ハ魯國貴族
ノ運命ニ関シテ尤モ大ナル影響ヲ生セリ然リ而シテ余
輩ノ先ツ此影響ノ事ヲ評スルニ方リ^カパ^カル^カス^キ
イ氏著ハセシ魯國新法ノ史録ヲ引用シテ左章ニ數言ヲ
吐シトス
パ^カル^カカ^カル^カス^キイ氏ノ説ニ曰彼得兒帝ノ謀議官^{サウエトニク}レイ
ブニツ氏ハ帝ニ官位等表ヲ制定シ且ツ其會議院^{コレイギヤ}ヲ設
立ス^キヨ^クヲ勸奨セリト而シテ官位等表最後ノ編纂ニ
関共セシ者ハ議官^{ゼイトル}ゴ^ロフ^キン^氏ブリ^ユス^氏少將^{マチ}
シ^キン^氏及^ヒモ^ノフ^氏ナリ其草按ハ彼得兒帝ノ内
閣事務官^ヤパ^カル^カル^カス^キイ氏ノ手書ニメ其所有ノ譯

書ニ基キ歐洲大國ノ官名録ニ模擬セシモノナリ千七
百二十一年ニ於テ彼得兒大帝官位等表ノ編末ニ警戒
ノ語ヲ以テ大書シテ曰此表ハ九月ニ至ルマテ發行ス
ル勿レ錄列スル勿レ以テ更ニ檢覈ヲ加ヘヨト乃チ其
官位等表ト法國普國匈國ノ官名録トヲ併セテ之ヲ元
老院ニ下附セリ是ニ於テ元老院及シテ海陸兩省ノ會議^{コレイギヤ}
ニ於テ官位等表ヲ檢覈シ外國官名録ニ基キテ高官諸
職ノ位地變革ノ事ヲ建言ス即チ元老院議官ハ首相^{カシッレル}
階ノ事ヲ論シテ曰法國匈國英國及瑞國ノ位階定規ニ
於テモ議長^{ゼイトル}ニメ且王佐タル者ハ第一等ノ位階ニ在リ
故ニ魯國ニ於テモ亦首相^{カシッレル}ハ第一等ニ位セサルベカラ
スト又官位等表ニ於テ寺中ニ其順序ノ位地ヲ乱ス者
ニ罰金ヲ命スルヲアルヲ駁論セリ

官位等表ハ魯國官務ノ礎石トナリ後世貴族ノ運命ニ
影響ヲ生スル少カラストス即チ官位等表ヲ制定スル
ヤ魯國旧貴族Hereditary Noblesハ永ク特別一社會ノ範圍ニ在ラント欲
スルモ平民ト相別タント欲スルモ法國ノ華言ヲ自得
セント欲スルモ如何ヤン官位等表ノ始成ニ由テ上等
社會ニ屬スヘキ系統ノ始成ハ自ラ破壊セリ即チ官位
等表ノ制定ヨリシテ系統ヲ貴ハス独リ官位ヲ重ニス
之ヲ以テ外面ノ尊榮ヲ定ムルニ至レリ彼得見帝
ノ立法ニ由テ貴顯系統ノ者漸々其外面ノ尊重ヲ損ス
ルニ至ル然リ而メ千七百十二年官位等表制定ノ以前
ニ於テモ彼得見帝令シテ曰無官ノ貴族ハ上等士官ニ
敬礼ヲ致シ之ニ第一ノ位地ヲ讓リ官職ヲ尊シテ其人
ヲ官員ト稱ス而メ貴族ハ何ノ処ニ在ルモ唯貴族トノ

ミ呼フハシ若シ之ニ違スレテ士官ヲ尊敬セサル時ハ
罰金ヲ課シ給料ヲ没スヘシト是ヲ以テ官位等表ハ終
ニ人民社會ヲメ系統ヨリ官位ヲ貴重ヤシメリ故ニ神
事及メ官中ノ儀式ニ當リ官位等級ヲ以テ坐席ノ順列
ヲ定メ而メ其定席ヲ犯シ或ハ下官ニ之ヲ讓ル時ハ二
月間ノ罰俸ヲ扱メシム又夫婿ノ位階ハ其婦妻ニ及フ
而メ女子其父高位ナレハ下位ノ者ノ婦妻ヨリ貴シト
ス又位階ニ從テ服飾乘輿及ヒ僕隸ノ多少ヲ定ム即チ
パートトムゴフ紀事ニ目レハ五等官ノ者ハ唯一僕ニ過
キズ此等級ニ下ル者ハ一僕ヲモ有セス
前件ニ類似セシ官位等表ノ定規ハ彼得見帝ノ後代ニ
至テモ亦実行セリ即チ千七百四十年女帝安那列屋Anna Mariaハ
利ドトク那ノ時ニ當テ三等官ノ外ハ金欄銀編ル一尺シアル

ハ我ニ尺三寸ニ付キ四圓付ル以上ニ値セ
四カ一厘強ニ付キ四圓付ル以上ニ値セ
スル美服ヲ以テ裝飾スルヲ禁制ス然レ氏無官ノ者ハ
彼ノ位階ニ應シタル服飾定規ニ係ワラズシテ金裝銀
飾ノ衣服ヲ自ラ服シ又其蕃族ニ着セシメ且ツ其僕隸
ニ美衣ヲ被ラシメ已レ高價ノ乘輿ニ駕シテ往來セリ
其後千七百四十二年カ帝悦ユヅリ利撒サウツ味多マ彼得ト兒ニ予ナ那ノ時
ニ當テ服飾ニ関シタル一奇令アリ曰五等官ニハ外國
製ノ絹繡ヲ服用スルヲ允ルスヘシ然レ氏其値ニ一尺付
ニ付キ四圓付ルニ上ルモノヲ以テスバカラス又其僕隸ノ
美衣ヲ許スヘシ然レ氏絹布ノ莖縁ヲ用テテ金銀ノ莖
縁ヲ用ユバカラス又六等七等八等ノ三官ニハ外國製
ノ絹繡ヲ服用スルヲ允ルスヘシ然レ氏其値一尺ニ付
キ三圓付ルニ上ルモノヲ以テスバカラス而シテ其以下ノ

官等及ニ無官ハ絹繡ノ値ニ圓付ルニ上ラサルモノヲ服用
ス可シ又無官ノ者ハ其服裏ニ絹布ヲ附用スバカラス
而シテ其身及ニ其妻共ニ天鵞絨ヲ着用ス可カラズ又
五等官ノ外ハ四指ヨリ廣キ縁飾ヲ附装スヘカラスト
又カ帝悦ユヅリ加カ埋リ那ナニ世ハ貴族ノ大礼服ヲ制定ス之ヲ
服用スル者ヲシテ騎兵警衛ノ容殿ニ昇リ又招キテ待
ズシテ帝官ノ祝宴ニ共カレヲ得セシム且此大礼服ヲ
以テ官位ヲ明別セリ然レ氏之ヲ以テ社會ヲ分定スル
ニ非ス千七百七十五年詔令ヲ下シテ諸官ノ乘輿及ニ
僕隸ノ裝服ヲ定ム即チ其乘輿ニ関シテハ一等二等ノ
兩官ノミ前騎ニ名牽馬六匹ノ乘車ニ駕シテ府内ヲ通
行ス三等四等五等ノ三官ハ前騎ナキ六馬ノ乘車ニ駕
シ六等七等八等ノ三官ハ前騎ナキ四馬ノ乘車ニ駕シ

上等士官ハ前騎ナキニ馬ノ乗車ニ駕ス而メ上等士官
ノ位階ヲ有セサル貴族ハ夏日ニ一鞍馬或ハ一馬車冬
月ニ一馬ノ雪車ニ駕上シテ唯從者一人ヲ携フベシ然
ラサレハ府内ニ通行スルヲ許サズ又僕隸ニ聞シテ一
等ニ等官ノ僕隸ノミ其服中ノ縫目ニ繡落ヲ施シ三等
四等五等官ノ僕隸ハ其服縁ニ繡落ヲ附シ六等官ノ僕
隸ハ其服ノ襟領及ヒ袖口ニ繡落ヲ用ユルヲ允ルス而
メ上等士官ノ僕隸ハ何等ノ繡落ヲモ其服ニ加フルヲ
許サズ又其格外ニ於テ無官貴族ノ五十年ニ齒スル者
及ヒ貴族ノ婦人女子ハニ馬ノ乗車ニ駕シ府内ニ往來
スルヲ許ス此定規ハ後ノ新法ニ於テモ採用スル所
トナレリ

官位等表ハ位階ヲ以テ外標ノ區分ヲ定メ且ツ官位

光榮ヲ顯ハス故ニ官員ニ汚辱ヲ與フルハ人身ニアラ
ズ又社會ニアラズシテ其官位ヲ辱ムルニ當レリ即チ
前章ニ述レ如ク千七百九十二年「ロモダ」ノ「スキ」侯
「セイ」氏ノ已レテ卑賤ノ侯族ト誹稱セシヲ以テ帝ニ
訴ハリ又千七百二十二年ニ於テ伯位ノ「ドル」ゴル「キ
イ」氏ハ「ロモダ」ノ「スキ」侯ノ已レカ内閣正議官タル
ヲ誹謗セシヲ以テ帝ニ訴ハリ而メ外務官「ステ」パーノ
「フ」氏ハ副相「シヤ」セロフ氏ノ事ヲ帝ニ訴テ曰我カ身上
ニ於テ論セスト且「ヒ」祖々我カ官位ニ對シテ毆打ハ勿
論誹謗ニ於テモ亦堪ユル能ハスト

官位等表ノ始成ハ魯國貴族ニ發生セシ系統貴族ノ本
性ヲ瘞壞ス而メ官位ハ系統ニ勝越セシ「ア」茲ニ彼論
ヤン何トナレハ外國人此事ニ注意シテ皆疑念ヲ起セ

ハナリ即チ魯國在留ノ外國人「シリョー」ツル氏謂ヘラ
ク魯國ニ於テ「フランドロ」ノ系統貴族ハ官職ヲ奉セザレハ何等ノ光
榮名譽ヲ有セズ且ツ頭族貴官ノ長男ハ英國法國ノ貴
族及セ牙國ノ貴族ノ如ク其出生ノ権力ニ由テ占有ス
ル所ノ権利ヲ保有セズ且又系統貴族ハ其家父ノ没ス
ルニ從テ自ラ其名分モ亦消スルニ至リ而メ其所有物
ハ諸子之ヲ瓜有シ其尊稱「テイトレ」侯伯子男「ミヤエガラフバロン」ハ及嗣之ヲ襲フト
雖此文武ノ兩發ニ興ラサレバ何等ノ光榮トナラサル
ヲ以テ甚々奇怪ナリトス是「レウ」トク氏ノ史乘ニ於テ
見ルベシ
然レ此官位等表ノ始成ヲ以テ「アリストクラシー」ト
害シ官位ヲ「系統」ニ勝越セシムルハ唯其主意タレニ
過キズ即チ其主意ニ回レハ本帝悦「エ」利「リ」撒味多「サキタ」彼得「ペテ」兒「エ」乎「ウ」

那「ハ」バ「レ」カ「カ」奄「厨」人「フ」ー「ク」ス「氏」ヲ「聯」隊「長」ニ「登」庸「ス」又「悦」
加「埜」利「那」一「世」ハ「官」僮「ル」カ「チ」ヌ「テ」セ「シ」氏「ヲ」裨「官」ニ「任」
ス「又」サ「ハ」ル「ガ」ー「ト」フ「氏」初「メ」ホ「チ」ヨ「ウ」キ「シ」侯「ノ」侍「臣」タ「リ」
ト「虫」氏「及」チ「官」兵「ノ」隊「長」ト「ナ」ル「此」三「氏」皆「悦」加「埜」利「那」ニ
世「ノ」時「ニ」當「テ」ガ「リ」ー「ツ」ユ「シ」侯「及」セ「ク」ラ「キ」ン「侯」ノ「曾」テ「在」
官「中」ニ「占」得「セ」シ「高」位「ノ」尊「榮」ヲ「得」ル「ニ」至「リ」然「レ」此「其」
實「跡」ニ「回」テ「觀」ル「ニ」系「統」貴「族」ハ「多」ク「高」位「重」職「ヲ」占「領」ス
ル「ヲ」カ「メ」漸「ク」之「ヲ」得「或」ハ「稀」ニ「自」己「ノ」家「格」系「統」ヲ「以」テ
以「前」ノ「如」ク「高」官「ヲ」得「タ」リ「是」ニ「於」テ「シ」チ「エ」ル「バ」ー「ト」フ「侯」
貴「族」ノ「官」位「除」去「セ」ラル「ハ」ヲ「憤」歎「シ」詠「テ」曰「門」地「類」歎「シ」
テ「貴」頭「ノ」家「格」系「統」ニ「何」等「ノ」権「利」ナ「ク」遂「ニ」貴「族」ヲ「メ」其
貴「族」タル「自」尊「ノ」意「氣」ヲ「失」ハ「シ」ム「何」ト「ナ」レ「ハ」系「統」ヲ「重」
シ「セ」ス「シ」テ「唯」官「位」勤「功」及「セ」年「功」ヲ「貴」フ「ヲ」以「テ」各「自」苟

モ官位ヲ得シコトヲ欲シテ其直ニ勤功ヲ現ハスヲ得サ
ルヤ百方手ヲ尽シ帝王及セ貴人ニ面諛諂笑到ラサレ
所ナキニ至ルト貴族ハ人民社會ノ貴重スル官位職務
ヲ固執シテ自己ノ位地ヲ永存センコトヲ務メリ然レ
貴族ノ位地自ラ去リ平民ノ大官ヲ得ルニ至ルヤ貴族
却テ平民ニ對シ平伏スルニ至レリ是レ系統貴族ト平
民ヨリ出テ大官ヲ得タルメシコト氏ラゾモノ氏
トノ間ニ於テ之ヲ證據スルニ足ル即チ又系統貴族ニ
眷忠シ其光榮ヲ主張スル所ノレナルバトフ侯爵敷
シテ曰貴族ハ微賤ヨリ昇進セシ人物メンシコト氏
壓倒セラレテ固有自尊ノ意氣全ク地ニ墜チ元ト之ヨ
リ尊敬ヲ受クヘキヲ今チ却テ之ニ平伏スルニ至レリ
ト又古來ノ口碑ニ曰女帝悅利徹味身彼得兒予那ニ寵

クエゴロフナシワロワアリ曾テ其夫シワロフ
侯ノ身体疲レ節ヲ伏キ遊獵ヨリ家ニ帰ルヤ婦巴レカ
官寵ヲ恃ミ之ヲ迎ハス依然トシテ誦經スルヲ止メス
ト
官位等表ハ貴族ヲメ其範圍ヲ鎖界セシメズ却テ人民
社會ヲシテ貴族ノ範圍ニ進入スルノ道ヲ洞開セシテ
以テ系統貴族ノ主意ヲ癸壞スルニ至リ故ニ官位等表
ノ制定ハ官位ニ由テ貴族トナルノ方法トナレリ即チ
文武ノ職務ヲ比例シテ其位階官等ヲ分テ之ヲ十四等
トナス而メ貴族ノ系統ニアラスメ唯武務ニ由リ上等
士官ニ昇進セシ者ハ貴族トナルヲ得テ其昇進後ニ在
出セシ子モ亦父ト同シク貴族トナルヲ得ヘシ若其人
ヲメ昇進後ノ子ナク昇進前ノ子アラシメハ其父諸子

ノ一人ヲ貴族トナサンコトヲ政府ニ請フヲ允ルセリ又
千八百十七年ニ於テ昇進前ノ諸子ノ一人ヲ貴族トナ
サシコトヲ請フノ權利ヲ擴充シテ其母ニ及ホス其後千
八百十七年ニ至テハ其父母貴族トナラザリシ時ハ其
權利ヲ父方ノ祖父ニ及ホス然レモ父上等士官ニ昇進
セシ前ノ子何等ノ教育ヲ得サル者少ナカラサルカ故
ニ千八百四十五年ニ於テ新法ヲ定ム即チ貴族ノ少年
ヲ軍務ニ就カシメンカ爲ニ千八百四十四年五月六日
制定ノ試験ヲ受ケ且ツ父ノ選擇ヲ得タル子ニ非レハ
貴族トナレヲ得ス其後又貴族トナル權利ハ奴隸或ハ
下賤ヨリ生出セシ者ヲ除クノ外昇進前ノ諸子ニ汎及
スルニ至レリ

文官及セ官官ニ関シテハ官位等表ニ於テ左ノ規則ヲ

定ム即チ文官官官ノ職務ニ由リハ等ニ昇進セシ者ハ
貴族トナリ其正統ノ子モ亦父ト同シク貴族トナルヲ
得ハシ而シテ其昇進セシ者ハ下賤系統ヨリ出ルト雖モ
亦特權ヲ專有シタル貴頭旧貴族ト同様ニ永ク尊榮ヲ
占得セリ是ニ由テ世襲ノ貴頭旧貴族ナルヲ得ルノ法
定マレリ是即チ立法上ニ於テ世襲貴族ト名クル所ナ
リ武務上等士官ニ昇進セシ者ト文務ノコレジュスキイ
アセソルハ等官ノ官位ニ昇進セシ者トニ世襲貴族ノ
權利ヲ與ヘリ其他ノ官位ニ関シテハ官位等表ニ於テ
又左ノ規則ヲ定ム即チ貴族ニ非スシテ文官及セ官官
ハ等以下ノ官位ニ在ル者ハ其子貴族トナレヲ得ス然
レモ此規則ノ文意判然タラサルカ故ニ悅加埜利那ニ
世ハ貴族詔令ニ照準シ前文ノ官位等表ノ一項ヲ明解

シテ八等以下ノ官位ニ在ル者ヲ世襲貴族トナサス一
世貴族トナセリ是ニ於テ政法及ヒ民情ニ關係セス世
襲貴族ト出稅社會ポットノイトノ中間ニ介
立シテハニ離隔シ甲ニ世襲貴族ハ稅地租ヲ收納スハ
ニ至ル是即チ一種社會トナレリ而シテ此一種社會
一世貴族ハ世襲貴族ノ專有スル權利ノ若干權利ヲ有
ス即チ一世貴族ハ施体刑人稅及ヒ徵兵ヲ免ル然レモ
采地シホ稅使役ノ權利及ヒ特別社會ノ專權ヲ有セス故
ニ真ノ貴族ニ非スレテ世襲貴族ト異ナリ是ヲ以テ魯
國ニ於テ若干ノ記者此一世貴族ヲ稱シテ中間貴族ト
ス一世貴族ハ貴族ノ權利ニ熱中シ貴族ノ尊榮ニ渴望
シテ平民ト接近混交セシムルヲ恐ルハ世襲貴族ヨリ
モ猶甚タシトス而シテ世襲貴族ハ商賈賤民ト交接ス

ルヨリモ猶一世貴族ト親狎スルヲ以テ已レカ耻辱ト
ナス一世貴族ハ形外ノ方畧ニ乏シク只心中ノ欲望ニ
富シテ曖昧無定ノ經營ヲ事トシ賤業ヲ為スヲ以テ已
レカ高品ノ手ヲ汚ストナセリ又一世貴族ハ平民ノ上
ニ位セルヲ以テ之レニ遇スルニ甚タ傲慢ナリト云
其世襲貴族ニ對スルヤ陽ハニ平伏面従シテ陰カニ之
レカ祉福光榮ヲ害セントテ圖ル此一世貴族ハ政法及
ヒ民情ニ關シテ其位地公定セサルカ故ニ社會一體ノ
性質ヲ成スニ不適當ナリトス且ツ此一社會ハ農族商
族僧族加ク何寺ノ分別アリテ何様ノ全備確定ノ原質
ヲ有スルヤ一世貴族ハ時トシテ世襲貴族ノ占有スル
所ノ尤モ下官ナル地方警察ノ職務ニ已レテ元々セリ
故ニ左格コ來帝ライノ時ニ當テ政府ハ一世貴族ニ關スル正

賞勳局

当ノ^{ボリ}分^{チカ}ヲ為セリ乃チ其處分ハ一世貴族ヲ都會居民ノ階級ニ合供スルノ旨趣ナリ即チ一世貴族ノ諸子ハ貴頭都民ニ加属ス而シテ千七百五十四年ニ於テ一世貴族ハ貴頭都民ト同權ナルヲ布令シテ一世貴族ヲ都民名簿ノ第五編ニ記載ス然レモ一世貴族ニ賜ハル所ノ詔各ニ於テ猶官位等表ニ基キ之レヲ一種社會ト稱シテ一時之ニ世襲貴族ノ權利ヲ有スルヲ許ス其詔各第一條ニ曰若シ祖父父及ヒ子一世貴族トナルヲ得ハキ官位ニ昇進セシ者ハ其子孫真正ノ貴族トナルヲ得フハシ又第二條ニ曰若シ父及ヒ子一世貴族トナルヲ得ハキ官位ニ昇進シ且ツ瑕瑾ナク其職務ヲ終ル者ハ其孫真正ノ貴族トナルヲ請フヲ允ス其後實際上ニ於テ此兩條ヲ明解スルニ當テ疑問起シリ即チ千八

百十五年元老院ノ會議ニ於テ幼年ナル「リウオフ」氏世襲貴族請願ノ事ヲ檢閲スルニガリ相議シテ曰祖父及ヒ父ノ奉職各共ニ二十年間ナルヲ要スル乎或ハ祖父及ヒ父兩人ノ勤務ヲ合算シテ二十年間ナルヲ要スル乎而シテ其二十年間ハ下等書記官ノ在職ヲ算當セシモノナル乎或ハ唯上等士官ノ在勤年間ノミヲ算當セシ者ハ祖父及ヒ父各奉職二十年間ヨリ少ナカラシテ其身成年且ツ在職ナルヲシト司法卿此決議ヲ國相^{ニシテ}相^{ニシテ}檢査ニ供ス是ニ於テ國相ハ法制局ニ於テ貴族詔書ノ第二十一章ノ意義ヲ明解シテ曰祖父及ヒ父唯上等士官在職ノミ兩人合計シテ二十年ニ滿ル時ハ其子孫幼年ト云ハ世襲貴族ヲ願フノ權利アレハレト大會議ニ

於テ國相八名ハ法制官ノ決議ヲ主張ス然レモ元老院ノ議官八名ハ特ニ自己ノ論議ヲ主張シテ以テ貴族入籍ノ困難ナルニ從ヒ國益モ亦從テ大ナルレハレトナス是ニ於テ帝乃チ議官八名ノ論旨ヲ採用ス
千八百五十四年ニ於テ終ニ一世貴族ノ子世襲貴族トナルヲ願フノ權利ヲ制定ス即チ千八百十五年ノ法ニ滿十七年ノ文字ヲ追加ス又千八百五十七年出版ノ第四編第三十三章ニ貴族請願ノ者ハ滿十七年在職ヤレハキノ文字ヲ追加セリ
斯ノ如ク官位等表ハ一般社會ニ貴族トナルノ門戸ヲ開キシヲ以テ皆其官位ノ紹介ニ由リ貴族ノ門裡ニ入ルヲ得タリ是ニ於テ陸軍少尉ハ海軍少尉及ヒ其他ノ上等士官ニ又文官コレジュスキイ、アセソルノ官位ニ昇

進ヤレ者ハ世襲貴族トナリ而シテ文官九等以下ノ者ハ一世貴族トナレカ故ニ貴族ト稱スレハ殆シト猶ハ上等士官及ヒ八等以上ノ文官ト稱スレカ如クナリ而シテ恒ニ兵數ノ倍養スレニ從ヒ上等士官モ亦從テ多キヲ加ヘリ陸軍省録ニ因レハ近年陸軍上等士官ノ員數一才二千六百六十二人ニ及ヘリ國政ノ盛シナルニ從ヒ八等以上ノ文官モ亦從テ愈々倍セリ近年八等以上ノ行政官ノ員數三万五千人ニ及ヘリ是ニ因テ貴族ノ増殖特ニ甚シクメ其結局貴族ヲ讓共遺物ノ如ク見做レテ貴族ノ品價ヲ減却スレ是ニ至テ極マレリトス即チ貴族ニ血統ノカ由立古侯ニ出ル者アリ分限ノ富優ナル者アリ柱石大臣ノ子孫アリ大君輔相ノ子孫アリ此數者ハ血統ノ微賤ナル者分限ノ貧窶ナル者及ヒ縣官參事

ノ子孫歩兵士官ノ子孫騎兵士官ノ子孫ト皆相比肩シ
テ權利同等ノ一社會ヲ成セリアリストクラト系統貴族ノ純粹ナル血
統ハ益、農族及ヒ僧族ノ血系ト混和スルニ從ヒ全社會
ノ原祖正統貴族ノ利益モ亦從テ益、減少スルニ至レリ
若シ夫レ獨兒ドコ元耳ルイ吉侯ギキ編製スル所ノ魯國族譜ニ由テ
觀レハ貴族中ニ純粹系統ノ者甚々少ナキヲ美ス即チ
カリユ利古侯血統ノ者三十九人堀地密諾弗侯血統ノ者
八人カ由利古侯ノ血統ニ出ルト虫氏クニヤス侯ノ尊稱ヲ有セ
サル血統ノ者二十一人天鷲織系譜ニ記載セシ血統ノ
者七十二人千六百年前ニ於テ甚々多數ナル血統ノ者
既ニ減消セラレ僅ニ七百三十八人ヲ遺存セリ千八百五
十八年ニ於テ男女合計六十万零三千九百七十三人ヨ
リ成リシ所ノ世襲貴族ノ全員中ニ八百八十二族アリ

テ其過半減却セシハ如何ナル理由ニ出ルヤ是其諸族
ハ貧困流落シテ其所有ノ不動産ヲ失ヒ只僅ニ記録上
ニ系統貴族ノ名稱ヲ存スルニ由ルナリ而シテ又其間ニ
所有ノ不動産ト貴族ノ名稱トヲ供セテ失セシ者アリ
ガク스가ーゼン氏ハ魯國ニ系統貴族ノ世襲采邑ヲ保
有スル者甚々少クシテ其保有スル者ト虫氏漸ク三世
ニ傳フルヲ注目レタリ其他一族支分レテ其一分ハ衰
弱貧困ヲ窮メ他ノ一分ハ妻少累世ノ富有ト光榮トヲ
保存セリ故ニ今此ニ人アリガリツユン氏及ヒナレツユン
シキン氏等ノ門ヲ問フアラハ之ニ答フルニ其ガリツユン
ツユン氏ハ何様ノガリツユン氏ナル乎又其ナレツユンシキ
ン氏ハ何様ノナレツユンシキン氏ナル乎其氏貧賤ナル乎
將タ富貴ナル乎ト復問スバシ又此際ニ貴頭バロドナハミリーヤ世族ノ分

賞
勳
局

賞
勳
局

限ハ子孫ノ間ニ分敷シ且ツ魯國縉紳ノ寛慢遊蕩ニ由
テ徒費セシカ故ニ貴族ノ列ニ加ハリタル平民ハ永ク
貴顯社會ト並行センカ為ニ屢々富豪ノ分限ヲ成セリ
今此ニ貴族平民ノ分限盛衰ヲ較徴セン即チ八万ノ農
夫ヲ有シテ其數千ヲ貧窶貴族ニ與ハ大度富豪ヲ以テ
當世ニ有名ナル司膳官ワシイリイサレテコフ氏ノ後
裔サレテコフ度千八百五年ニ於テ其子ニ一万六千人
ヲ遺讓シ其員中ニ千二百ノ家僕アリテ其負債二百八
十萬圓ニ至レリリヤガンスク郡ノ町人ノ子ニメ貴族
トナリシリエミン氏ハ其古買請員ヲ以テ富豪ノ分限ヲ
得其子ニ一万二千ノ農夫ヲ分遺ス又真ノ田夫ヨリ出
テ又僅ニ囊裡五圓ノ資金ヲ以テ事業ヲ企テ終ニ各其
輕ニ一万六千ノ農夫ヲ遺讓セシ者アリ即チ其遺物ヲ

得タル者ハドラソワパシコワパクトワ及セコリツカ
ノ四名ナリ
官位等表ハ魯國貴族後來ノ運命ニ影響ヲ生セシ如何
ニテ又茲ニ再論セン夫レ官位等表ハ官位ニ由テ貴族
トナルヘキヲ定メシカ故ニ貴顯血統ノ者富豪分限ノ
者及ニ微賤貧窶ヨリ出テ文武兩官ヲ奉職セシ者ノ子
孫ヲメ皆共ニ團結集合シテ遂ニ一社會ヲ成スニ至ラ
シム是ニ曰リ魯國貴族ノ後來沿革ニ於テ微賤貧窶ノ
下等貴族ハ其系統ノ光榮ヲ存シ人民ノ上ニ立テ其自
尊ノ意氣ヲ失ハスト夫レ其風儀言行ニ至テハ平民ト
殆シト相同シキヲ如シ之ニ又シテ上等貴族ハ其風儀
生計言語ニ至ルマテ下等貴族及ニ平民ト相異ニシテ
自ラ一範圍ヲ成スニ至レリ中等貴族ハ其利益ニ於テ

ハ平民ニ制セラレ其尊威ニ於テハ上等貴族ニ壓セラ
ル是ニ於テ中等貴族ハ実利ヲ村邑ニ求メテ耕墾ニ就
キ或ハ之ヲ都府ニ求メテ職工等ヲ事トシ又或ハ外國
ニ行テ光陰ヲ消セシ者アリ是ヲ以テ魯國中等貴族ノ
「ゼントレ」ノ貴人トナレテ得サルハ猶系統貴族ノ「ノ
「ノ貴族」ト成ルヲ得サルカ如シ而メ中等貴族ハ其世襲
ノ田地森林及ヒ累代ノ農夫ヲ失フニ至リ又已レカ農
夫ヲ他人ノ骨肉ト看做シテ之ニ手ヲ出シ援フヲ以テ
愧辱トナシ却テ系統貴族ノ已レニ指ヲ觸レ助フル
ヲ以テ其榮誉トナス斯ノ如ク貴族中分シテ各其方
ヲ異ニセシハ大帝安那沃安諾乎那ノ時既ニ萌芽ヲ生
ス是ヨリシテ其中分兩岐日ニ月ニ弥々離隔シテ十七
百六十七年貴族代議人會議ノ時ニ至リ其状形斑然現

出セリ即チ敏才ナル代議人「シテ」ル「ハ」ト「フ」侯等建議
シテ曰官位貴族ヲシテ系統貴族ト同等ナラシムル時
ハ系統貴族ノ特権光榮自ラ晦蝕ス「レ」ト是ヨリ遂ニ
貴族ノ権カヲシテ往昔ノ如ク高點ニ達セシメシカ為
ニ官位ニ由テ貴族トナルノ定規ヲ廢止セントスルヲ
要セリ然レハ貴族代議人ノ建議粗々採用セラレテ唯
系統貴族ノミ六寺ニ區分シテ貴族系譜ニ載録セラレ
タリ然レハ其系譜ノ成ルヤ官位等表トテ格牴牾ヲ生
セリ即チ政務ニ由テ官位ヲ得ルノ權利ヲハ特ニ貴族
及ヒ一般社會ニ配定シテ貴族ヨリ出ル所ノ官員ニ官
位昇進ノ年數ヲ減少シ而シテ平民ヨリ出ル所ノ官員
ニ之ヲ増加ス終ニ十八紀ノ末年ニ於テ既ニ系統貴族
ヲ士官及ヒ文官ト分界シ且ツ凋落ノ貴族社會ヲ維持

賞
勳
爵

賞
勳
爵

センカ為ノ容易ニ貴族ノ権利ヲ興ハス從來其権利ヲ
興ハ來ル所ノ官位ニ一層ノ高上ヲ要セリ是ニ於テ千
八百四十五年六月十一日詔シテ文武兩官ノ世襲貴族
トナルベキ官位ヲ高進ス即チ甲上等士官ノ官位ニ由
テ一世貴族ノ権利ヲ有スルヲ得レ而レテ上長士官
ノ官位ニ由テ世襲貴族ノ権利ヲ有スルヲ得ベシ^ル文
官十四等ノ官位ニ由テ一世貴族ノ権利ヲ有スル
ヲ得レシ九等ノ官位ニ由テ一世貴族ノ権利ヲ有スル
ヲ得レシ而レテ五等ノ官位ニ由テ世襲貴族ノ権利ヲ
有スルヲ得レシ但レ其文武ノ諸官位ハ非職ノ者ニ興
フルニ非スシテ本務ノ時ニ賜ヒシモノナリ終ニ千八
百五十六年十二月九日元光院ノ令ヲ以テ官位ニ由
リ貴族トナルノ規則ヲ定ム即チ陸軍ノ隊長海軍ノ一

等艦長文官ノ四等^ナト^スト^キト^イト^クニシテ
唯本務ニ在ル者ノミ世襲貴族トナルノ権利ヲ有スル
ヲ得ハシ
官位等表ハ既ニ官位ニ由テ貴族トナルノ規則ヲ定メ
又帝意ニ由テ貴族トナスヘキノ方法ヲモ定メリ彼得
見帝ニ至ルマテ未ダ曾テ職務ニ由ラスメ貴族權利ヲ
賜フノ事アラズ故ニ^トニ^シ氏ハ職務ニ由ラスメ國家
ニ偉功アルヲ以テ内閣貴族ノ官位ニ登庸セラレシハ
彼得見帝以前ノ特例ナリトス是理ノ當ニ然ルヘキ所
ナリ何トナレハ曾テ貴族ハ一社會ナルモノニ非スレ
テ一官位ナルヲ以テナリ千七百二十六年悅加埜利那
一世ノ^テミ^ドフ氏鐵路創造ノ功績ニ由テ之ニ世襲
貴族ノ免許證ヲ賜ハリシヲ以テ官位等表第十六章ノ

的例初メテ現出ス此免許證ニ由レハ彼得見帝モ曾テ
「^レミートフ氏祖先」ニキート「^レミートドフ氏」ノ一族ヲ貴
族トナサント欲スルノ志アリト虽氏同氏其族農民ヨ
リ起リタルヲ以テ此賜ヲ固辞セリト見ヘリ此「^レミ
ドフ氏」ニ貴族ヲ賜ヒシヨリ以後「^レコストムスク縣」ノ輜
重^ミ査官^ヤヲ貴族トナスニ至ルマテノ間ニ於テ職務ニ由
ラスイ貴族ニ入ルノ例少ナカラス時ニ十八紀ノ女帝
悦利撒味^ミ、彼得見子那及ヒ悦利加垵利那二世ノ時ニ於
テ甚々多シトス即チ千七百四十一年悦利撒味^ミ、彼得
見子那ノ時ニオテ「^レブレラブレセンスキイ砲兵小隊」ノ
下士官及ヒ兵卒ヲ貴族名譜ニ加録シ之ヲ^レ近衛^レ兵^ト改
称ス又千七百四十二年ニ於テ「^レノワゴードスセルテ
コフ氏河浚堤防ノ功勞アルヲ以テ之ヲ貴族トナス又

賞勳局

悦利撒味^ミ、彼得見子那其寺僧「^レドセヤンスキイ及ヒ其
寵臣「^レウオズジンスキイ氏」ヲモ世襲貴族トナセリ悦利
垵利那二世モ亦臣民ヲ貴族ニ編入セシ^レ少カラス、一
日女帝親シク「^レハラポウ^レツキイ氏」ニ向テ貴族ニ進陟セ
シ者ト其點點セシ者ト何レカ多キヤヲ問ヘリ又女帝
ノ貴族ヲ賜フニ方リテ一奇事アリ曾テ七年ノ幼童「^レア
レキサンドル、マレコフ」ヲ貴族トナシ之ニ患痘者ト云
ハル名ヲ與ヘリ是侍醫「^レテイムスダリ氏」ハ女帝種痘ノ
時ニ此幼童ヨリ痘液ヲ取リシヲ以テナリ千七百八十
五年貴族編入ノ詔書ヲ下賜シテ新貴族ヲ真正貴族ト
称シ之ヲ旧貴族ト共ニ貴族系譜ノ第一編中ニ載録ス
ルヲ定ム其後千八百四十五年ノ詔令ニ於テモ亦貴族
トナルヘキ官位ヲ高進シテ以テ新貴族ノ權利ヲ堅定

賞勳局

ス
貴族編入ノ詔書ニ於テ此貴族トナルハキ確乎不拔ノ
方法ニ定證タルハキ騎兵^{カワレルスキイ、オレゲン}勲牌ヲ下賜シ以テ貴族ヲ表
飾ス然レ氏此詔書ニ於テハ世襲貴族ノ權利ヲ勲牌下
賜前ニ出生セシ子ニ及ホスヤ否ヲ分定セス故ニ實際
上ニ於テ疑惑ヲ生レ千八百十六年ニ至リ安那第一等
勲牌ヲ賜リタル高僧^{レフレン}氏ノ子世襲貴族ニ入り
且紋章及ヒ免許證ヲ賜ハラシ^{レフレン}氏ノ子世襲貴族ニ入り
疑團氷釋スルニ至レリ即チ千八百十六年ニ於テ帝其
國相ノ定論ニ從テ^{レフレン}氏ノ子ノ請求ヲ聽用ス是
世襲貴族ノ權利ハ勲牌奉賜前ニ出生セシ子ニ及ホサ
ガレヲ得サルニ由テナリ千八百三十年ニ於テ此論^彌
確定シテ遂ニ國法ト成レリ然レ氏其定論ニ就テハ未

ク全ク明瞭ナラス即チ勲牌奉賜ノ僧侶ハ皆全ク貴族
ノ權利ヲ有スルヲ得ハキヤ否ヤ未タ知ルベカラス故
ニ實際上ニ於テ神重安那第一等勲牌奉賜ノ僧侶ハ家
僕及ヒ奴隸住地ノ證券ヲ買求シテ其持主ノ名目ヲ改
メ自己ノ所有證券トナサンカ為ニサラトフスク縣ノ
民事裁判所ニ出シ^テアリ此時民事裁判官其證券買求
ノ憂カニ困却シ元老院ノ決議ヲ請ヘリ是ニ於テ元老
院此議ヲ判決シテ勲牌奉賜ノ僧侶ニ貴族所屬ノ土地
ヲ買求シ自己ノ所有證券トナスハキノ命令ヲ下セリ
又高族ニ関シテハ千八百二十六年十月三十日ノ法令
公布ニ至ルマテ高族ハ勲牌奉賜ニ由テ世襲貴族ノ權
利ヲ有スルヲ得但シ勲牌下賜ノ詔書ニ於テ其權利ヲ
有スルヲ拒止セサレ時ハ然レ^レ千八百二十六年ニ

於テ商族奉賜ノ位階及ヒ勲牌ニ由テ之ヲ一世貴族ト
ナス又其後之ニ貴頭都民ノ權利ヲ得セシム
何等ノ勲牌ニ依ラス之ヲ賜ハル者ハ皆世襲貴族トナ
リシヤ此勲牌ノ事ニ関シテハ其下賜スル所ノ下等勲
牌ト其勲牌ハ何等ナルモ其奉賜スル所ノ族類トニ由
テ若干ノ制限ヲ定ム千八百四十五年七月二十二日神
聖安那勲牌ニ就キ新法發行ヲ以テ此勲牌ノ二等三等
或ハ四等ヲ奉賜セシ者ニ一世貴族ノ權利ヲ與ヘ而シ
其子ニハ累世貴頭都民ノ權利ヲ與フヘシ又千八百十
五年ヨリ千八百三十一年十一月十七日ニ至ルマテ「ス
」ニスラフ勲牌ノ二等三等ヲ奉賜セシ者ニ一世貴族
ノ權利ヲ與ヘリ而シテ千八百三十一年十一月十七日ヨ
リス「ス」ニスラフ勲牌ノ二等三等ヲ奉賜セシ者ニ世襲

賞勲局

貴族ノ權利ヲ與フルヲ定ム其後千八百五十五年六月
二十八日ニ至リ再々旧法ヲ恢復シテ「ス」ニスラフ勲
牌二等三等ヲ奉賜セシニ一世貴族ノ權利ヲ與ヘ其子
ニハ累世貴頭都民ノ權利ヲ與ヘリ又族類ニ関シテハ
商族ヲ除ク外千八百三十九年ノ法則ニ由テ羅馬^{オトリ}旧
教ノ僧族及ビ「バ」レキ^ル位階ノ軍兵ハ何等ノ勲牌ヲ
賜ハルトモ一世貴族ニメ世襲貴族ノ權利ヲ有スルヲ
得ス
又貴族編入ノ詔書ニ於テ名譽都民ノ孫貴族トナルハ
キ一ノ方法ヲ設ケリ即チ父及ヒ當人共ニ祖父ノ名譽
ヲ墜サズシテ其身ノ言行ニ瑕瑾ナク三十年以上ナル
嫡孫ニ貴族トナルヲ請フヲ許ス此方法ハ千八百七年
一月一日名譽都民ヲ廢止スルノ詔令ニ至ルマテ施行

賞勲局

セラレシト雖此千八百二十年ニ於テ西伯里¹キルキ
ズ人酋長其名譽都民ヲ以テ祖父、父、孫各三年間ノ在勤
ニ由テ其孫世襲貴族トナレテ請フヲ許ス
外國人ヲ魯國貴族ニ編入スル事件ニ関シテハ官位等
表ニ於テ外國人ノ魯國ニ奉職スル者ハ官位等表ノ性
質ニ從フヲ能ハス然レモ外國人ヲ魯國貴族ニ編入ス
ルノ問按ハ終ニ千八百十七年ニ至リ初メテ決定セリ
銀行社主¹ラウ¹オ氏¹ハワリヤ王ヨリ賜ハリレ所ノ免奇
證ニ準シテ魯國貴族ノ位格ヲ得ン¹ヲ請ヘリ是ニ於
テ國相帝ニ奏シテ曰魯國臣民其勤功有レニ非サレハ
貴族ノ位格ヲ得ルハス故ニ魯國臣民入籍ノ誓約ヲ
ナレ或ハ其自國ノ免許證ニ準シテ魯國ノ位格ヲ願フ
所ノ外國人モ亦魯國臣民ノ如ク魯帝或ハ魯國ニ勤功

アルニ非ザレハ貴族トナル能ハス
官位等表ニ於テ更ニ貴族トナルハキ方法ヲ設立シ
章ヲ以テ其成法トナス余輩今此ニ其成法ノ由来
スル所以ヲ陳述セン抑モ魯國上等社會ノ成法使用ノ
事ハ巴ニ十七紀前ニ始マリレトモ何等ノ定則アル
ヲ見ス此成法公行ノ初メニ於テ之レカ影響ヲナセシ
ハ外國ノ模倣ニメ殊ニオストセイスク¹ノ忠義連士¹及
小魯西亜ノ貴族ハ波蘭ノ時好ニ倣ヒ成法ヲ用ユル
ヲ以テ魯國ノ前例トナレリ原采魯國ニ於テ貴族成法
ナルモノアラズ何トナレハ魯國ニハ西政羅巴ノ忠義
連士ニ類似セル者アラサルヲ以テナリ此時ニ方リ魯
國貴族ハ唯外國ノ系統貴族ニ模倣スルノミナルカ故
ニ政府之ヲメ外國模倣ニ從ハシメント欲シ成法ヲ制

賞
力
局

定シテ之ヲ貴族ニ分其セリ彼得兒大帝以前ニハ魯國
上等社會ニ紋章使用ノ風習アラサリシ事ハ「コトシヒ
シ」氏ノ言ニ於テ證スハ「即チ其言ニ曰魯帝ハ在官ノ
貴族及ヒ縉紳ニ詔書ト紋帝ト下賜セシ「ア」ラズ何
トナレハ紋章ノ何物タルヲ知レ者アラザルニ由テナ
リ加之此時ニ方リテ新旧ノ公侯縉紳ニ於テモ未タ姓
氏ノ印章ヲ有セス而メ公侯縉紳及ヒ摸斯格時世ノ官
員等ハ亦紋章ヲモ有セス其書柬等ニ印章ヲ捺付スル
ノ事アルヤ苟且ノ印判ヲ用ヒテ姓氏ノ実印ヲ用ユル
者アラズ又東部魯西亞ニ於テモ上等社會ハ紋章ヲ了
解セサレヲ以テ亦姓氏ノ印章ヲ有セス初メテ小魯西
亞ノ貴族ハ波蘭王ヨリ貴族タルノ表章及ヒ紋章ヲ受
領セシ事ハ十六紀ノ詔書ニ見ヘリ十七紀ニ至リ小魯

西亞ノ貴族ハ東部魯西亞ノ上等社會ニ腦力上ノ影響
ヲ發生セリ即チ十七紀ノ末年ニ「メ」オ「ン」ボ「ロ」キ「イ」氏
波蘭貴族ノ説ニ浸潤シテ乃チ「セ」ヨ「ド」ル「ア」レ「キ」セ「イ」
ウ「井」子ニ之ヲ教示シ而メ小魯西亞人ノ波蘭貴族ニ模擬
セシ者ハ魯國縉紳ノ子弟ニ之ヲ傳翰ス然レハ魯國ノ
廷臣ト小魯西亞及ヒ波蘭ノ貴族トハ其名称ヲ異ニス
ト虫氏其実意ハ一同ニ更ニ珍奇トナス「ハ」キ「モ」ノ「ナ
シ」十八紀ノ初ニ方リ貴族ハ紋章ヲ使用スルヲ好シテ
或ハ隨意ニ自己ノ紋章ヲ製シ或ハ帝冕袞衣及ヒ系統
貴族ノ紋章ヲ以テ自己ノ紋章トナスニ至レリ十八紀
ノ間ニ於テ紋章使用ノ流行ハ弥盛シニメ魯國貴族ニ
深ク根結スルヲ以テ新聞紙上ノ嘲笑ヲ招クニ至レリ
故ニ立法上ニ於テ貴族ノ紋章嗜好ニ注意シ之レカ使

賞
勳
局

賞
勳
局

用ヲ改正スルヲ以テ緊要ナリトセリ
是ニ於テ政府紋章使用ノ事ニ注意シタチ紋章事務長
ヲノ貴族平民ノ出生ヲ問ハス上等士官ニ昇進セシ者
及ヒ一生奉職スヘキ実證アレ文官ノ者ニ貴族ノ免許
證ト紋章トヲ下賜スル事ヲ擔任セシム千七百二十六
年ニ於テ紋章下賜ノ時ニ其彩色料トメニ圓ヲ收ム而
メ千七百二十七年ニ於テ尊称、紋章及ヒ官位ノ免許證
ニ税金ヲ課ス其税額ノ割合ハ歐洲各國ノ税則ニ倣
リ斯ノ如クニメ紋章ハ成法トナリ爾來貴族トナスニ
ハ免許證ト各姓紋章トヲ一時ニ下賜ス又貴族ニ昇進
セシ近衛^{トコノエ}兵^{ヘイ}ノ者モ亦女帝ノ賞賛ニ由リ丹誠ノ二字ヲ
表記シタル紋章ヲ賜タリ千七百六十七年ノ會議ニ列
署セシ貴族代議人ニ其議事決了ノ後紋章ニ代議人タ

リシ榮譽ヲ表記スルヲ允ス以テ其子孫ニ父祖ノ大業
偉績アルヲ知ラシム千七百六十年ニ紋章下賜ハ會議
ニ於テ新法制定ニ至レマテ暫時中止セラレシト由ヒ
千七百七十三年ニ至テ再ヒ下賜ノ事ヲ決定ス其後千
七百九十七年一月二十日巴^バ子^コ沃^ク兒^ニ帝^{テイ}元老院ニ貴族紋
章全譜編制ノ命令ヲ下シ以テ紋章使用ノ權利ヲ確定
ス此命令ニ由テ紋章全譜ヲ三編ニ部分ス即チ其第一
編ニハ諸族系統ノ旧新ニ從ヒ順次ヲ以テ列載スルカ
故ニ先ツ侯^{コウ}伯^{ハク}ヲ主トシ次ニ子^コ男^ニ貴族^{キウ}及ヒ世襲^{セウ}地^チ主^シヲ
以テス然レハ羅馬國ノ侯伯ニメ魯國侯伯ノ尊榮ヲ有
セサル者ハ此編中ニ入録セスレテ出生ノ貴頭ニ屬ス
ル所ノ貴族社會ニ遺留セシム而メ韃靼ノ諸侯モ亦魯
國侯族ノ列ニ加フベカラサルヲ命セリ第二編ニハ帝

ノ恩恵ニ由テ貴族トナリシ者ヲ登載ス第三編ニハ官位ニ由テ貴族トナリシ者ヲ記載ス然レ此故章全譜ノ制立ハ貴族ヲ第一第二第四第五及七第九ノ數條ニ區分シテ尊稱系統ヲ他ノ條中ニ排列ス而メ餘ノ貴族ヲ其條間ニ介置ス千七百九十八年一月一日ニ於テ貴族故章全譜第一條確立ノ詔令ヲ公布ス此詔令ヲ以テ魯國從來ノ說ニ異ナル所ノ西歐羅巴ニ現在スル忠義連士及ヒ系統貴族ノ模型ヲ魯國貴族ニ移用スルヲ要ス發トナスカ如キハ當時ノ甚々奇トスル所ナリ即チ千七百九十八年ノ詔令ニ於テ封建貴族ノ為ニ忠義連士故章ノ理由ヲ明定セシカ故ニ魯國貴族ノ若干系統ハ西歐羅巴忠義連士ノ魯國ニ移リ來地ヲ有セシ者ヨリ出ツ又魯國侯族ハ大君乎刺細密兒ノ諸子ヨリ出ツ而

ノ他ノ許多ノ貴族系統ハ其侯族ヨリ出ツルヲ以テ其往古ニ溯リ論スル時ハ魯國ノ貴族系統ハ敢テ外國ノ貴族系統ニ一歩ヲモ讓ラス又魯國貴族ハ其國家ニ致ス所ノ勲功國帝ヨリ貴族ニ賜フ所ノ尊榮特權及ヒ千七百六十二年二月十八日貴族義務解免ノ詔令ナル此三件ニ關係スル明解ノ詔令ニ曰魯國貴族ノ祖先ニ追跡シ其名譽尊榮ニ注目シテ今將ニ各貴族系統ノ尊榮表記タル貴族故章ヲ編輯セント欲ス何トナレハ未タ曾テ魯國ニ其編輯ナルモノアラザルヲ以テ許多ノ故章自ラ紛滅シ或ハ歲月ノ久キニ從テ變替スルニ至ル故ニ各貴族系統故章ノ形象ト其故章ノ由來トヲ以テ一般貴族系統ノ為ニ故譜ヲ編製スルヲ命スト即チ其命ニ曰

第一、紋譜ニ載スル所ノ紋章ハ皆萬古不易ニメ帝命アルニ非サレハ之ヲ譜中ニ加入或ハ除去スル能ハサルヲシ

第二、紋譜ニ載スル所ノ紋章ニ相當スル系統ノ各貴族ニ其系統ノ実證トシテ牘草上ニ撰寫シタル紋章ヲ附英スヘシ

第三、此紋譜ヲ元老院ニ於テ維持シ以テ貴族ノ尤真正ナル證徴トナスヘシ

既ニメ乃チ貴族紋譜ノ寫冊ニ三圓ヲ課スルヲ定メ而メ紋譜第一條ヲ公行ス其後千八百十六年ニ至ルマテ尊稱貴族百零三箇ノ紋章及ヒ無尊稱貴族千二百八十五箇ノ紋數輯載ノ紋譜第九條ヲ無根無數ニ公行セリ千八百十六年ヨリ紋章公行ノ事ヲ廢止セシト垂氏其

公行全ク絶跡ニ至ラズレテ千八百三十六年ニ至リ臣格采帝紋譜第十條ヲ新定ス現今紋章局ニ於テ貴族系統ノ紋譜編製ヲ管理スル第三回ノ高議ヲ起セリ而メ千八百五十二年貴族ニ附英スル模寫ノ紋章料トイテ五圓ヲ課スルヲ定ム

紋譜中ニ於テ見レ所ノ尊稱貴族ハ何ニ由テ來起セレヤヲ討尋スルニ彼得見大帝ニ至ルヤテハ唯侯ノ一尊稱アルノミニメ古昔此尊稱ヲ大君トリユリクノ子孫トトラスク地ノ大君ガナミノ子孫及ヒ亞細亞地方ノ「グルーヴン」韃靼「ゴールムスク」諸王ノ子孫ニ冠冕セリ然レ此許多ノ諸侯ハ彼得見帝以前ニ滅絶セシト已ニ既ニ久遠ナリ千五百五十年「イワン」グローヴノイ帝其緬紳子弟ニ土地ヲ分與シ摸斯格込傍ニト居セシ時

ノ模斯格旧誌ニ因レハ縉紳子弟ナル者千五百人アリ
テ其員中ニ^{クニナ}侯族ノ者モ亦甚々居マナリトス斯ノ如ク
ナルヲ以テ此時ニオリ若干侯ノ位階低落シテ^{ボヤル}縉紳ト
ナリ無尊称貴族ナル者出ルニ至レリ
巴ニ前文ニ陳説セシ如ク彼得見帝ニ至ルヤテ何等ノ
尊称モ存スレアラス若シ共存スルアラハ家格系統ノ
尊称ニシテ僧侶官等位階ノ尊称ノ如キモノニ非ス而
イ帝ヨリ下賜セシ所ノ尊称ハ未タ曾テアラサルナリ
千七百十三年ニ於テ彼得見帝「ギイスセン氏ニ命シテ
伯位^{ダラフ}子男^{ハロシ}及セ^{トワリヤシ}貴族ノ尊荣下賜ノ方法ト之ニ関涉スル
證書体裁ノ草按ヲ造ラレムル然レハ此起案ノ前既ニ
外國尊称ヲ受シ者アリ而シテ帝ノ後嗣モ亦此例ニ從ハ
リ

ウストリヤ^ハロラ氏著ハス所ノ彼得見大帝記中ニ於テ
ム^シー^シン[、]グ^ー、^シキン^氏伯位^{ダラフ}トナリシ事千六百九十四
年ノ表ニ見ヘナリ又他ノ證ニ因レハ「セヨトドム、ゴロ
^イウ^キン^氏千七百零一年ニ日耳曼羅馬帝「オポトリド
一世ヨリ伯位ノ尊荣ヲ受テ初メテ魯國ノ伯位トナリ
外國會議ノ首長トナルニ至ル又「ガウリル、ゴロフキン
氏千七百二年ニ羅馬帝國ノ伯位ヲ得タリ是ニ於テ魯
國貴族ハ初メテ外國帝王ヨリ尊称ヲ受ルニ至レリ然
レハ彼得見帝速ニ伯位ノ尊称ヲ下賜スルヲ創始セリ
即チ千七百六年ニ顯名ナル縉紳「セレメテフ氏ニ初メ
テ伯位^{ダラフ}ノ尊称ヲ下賜ス其後羅馬帝ヨリ伯位尊称ヲ受
ケタル所ノ「ゴロフウキン」「ゴロフキン」兩氏ヲ魯國ノ伯位
トナセリ又千七百十年「ゾートフ氏」千七百二十二年

「アプラクシ」氏ニ千七百二十四年「トルストイ」氏ニ伯位尊称ヲ下賜セリ遂ニ帝代ノ変易毎ニ新規ノ伯位モ亦從テ生セリ特ニ「パウエル」帝暫時間ノ治世ニ於テ新ニ伯位ヲ増殖シ十七名トナス當今ニ至リ又「エウドキ」モ「ムラウ」井「ヨフト」ル「ストイ」三氏ニ伯位尊称ヲ下賜シ其総員六十三名トナルニ至レリ此伯位ノ尊称ハ必スシモ常ニ系統名族ノ人ノミ受ルモノニ非ス時トシテハ出生卑賤ノ人モ亦之ヲ得タリ而メ十八紀ノ間ニ於テ魯國旧采ノ侯位尊称ヨリモ却テ外国ヨリ新采シタル伯位尊称ヲ貴重セリ是レ侯族既ニ甚々衰微シテ或ハ田畝ニ就ク者アルヲ以テナリ十八紀ニ於テ許多ノ者初メ羅馬日耳曼帝ヨリ伯位尊称ヲ得後チ魯帝ヨリモ亦之ヲ得タリ然レ氏又羅馬神聖ノ伯位ヲ得ルモノニ

シテ魯國ノ伯位ト承認セラレサル者アリ其後「バー」ウ「エル」帝ニ至リテ外国帝王ノ魯國臣民ニ伯位ノ尊称ヲ下賜スルノ舉殆ント止絶スルニ至ル又時トメハ「亞歷山」垣見帝一世ハ千八百二十二年ニ「邦國」ノ大侯「スウ」ハラ「シ」ラ又「尼格来」帝ハ千八百三十年ニ「邦國」大侯「サク」レ「ト」フ「スキ」イ氏ヲ伯位ニ叙セリ
侯位尊称ハ魯國貴族ノ系統尊称ニシテ國帝ヨリ侯位ノ尊榮ヲ得タル者ハ綿細格弗侯ヲ以テ始トナス即チ此侯ハ千七百五年ニ羅馬帝國ヨリ侯位ヲ受ケ千七百七年ニ彼得兒帝ヨリ最耀侯位ヲ得タリ其後降テ「バー」ウ「エル」帝ニ至ルマテ魯帝ヨリ侯位ヲ下賜スルノ例アラズ唯時トシテ羅馬日耳曼帝ヨリ之ヲ奉賜セシ者アリ而「バー」ウ「エル」帝ハ五蕃族ヲ侯位ニ叙シ「亞歷山」垣見

帝一世ハ三眷族ヲ侯位ニ叙シ臣格來帝ハ七眷族ヲ侯位ニ叙ス是ニ於テ侯位ノ尊榮ヲ奉賜セシ者合計十六眷族魯國ニ於テ既ニ斯ノ如ク外國尊稱ヲ假用セシカ故ニ其冠稱ヲモ亦假用スルニ至ル即チ *Our charlact, bal, wcht, Altzer, Excellence* ニシテ閣下殿下等ノ如キモノナリ故ニ彼得兒大帝以降侯位伯位ノ尊稱ヲ得タル者ニ *Seiner Majestät, Chymelands* ノ冠稱ヲ附ス即チ赫耀ノ義ナリ又系統侯位ノ者ニモ此冠稱ヲ附ス而シテ *Chymelands* ノ冠稱ハ *Seiner Majestät* ノ冠稱ニ此スレハ稍高貴ニメ又帝ヨリ若干ノ侯族ニ附與スルニ猶一層高貴ノ冠稱ヲ以テス即チ *Chymelands* ニメ最耀ノ義ナリ

彼得兒大帝ヨリ初メテ叙賜セシ所ノ子男尊稱ニ他ノ

冠稱ヲ附セズ千七百十年シヤヒロフ氏ヲ以テ魯國子男ノ始トナス其後歷世陸續トシテ子男トナル者多シ而メ魯國系統貴族此子男尊稱ヲ以テ甚々貴重トナサス其外外國人ノ魯國會計勸工上ニ功勞アル者之ヲ奉賜ス然レモ時トシテハ文功武勲アル者モ亦之ヲ奉賜セリ

魯帝ヨリ尊稱ヲ奉賜セシ諸眷族ノ外ニ又外國人ノ其固有尊稱ヲ脱セズレテ魯國ノ屬臣トナリシ眷族及ヒ魯國人ノ外國帝王ヨリ尊稱ヲ得シ眷族モ亦之甚々多シ

魯國ニ於テ若干ノ侯族ヨリ出シ貴族眷屬ハ侯位尊稱ヲ有セスト虫氏尊稱眷屬ニ略比述ス而シテ此眷屬ヲ他ノ眷屬ヨリハタシカ為ニ千七百九十七年ノ成法ニ

賞
勳
局

賞
勳
局

従て帝冕袞衣ヲ以テ其故章トナスヘキヲ定ム
魯國上等社會ハ外國尊称ニ眷意セシ如ク又官位等表
ニ関情セリ故ニ千七百十五年ニ於テ「アブラクレン氏
伯位尊称ヲ得ン」ト彼得兒帝ニ懇請セリ然レハ又魯
國ノ一貴族「ナレ」シキン氏ハ彼得兒帝ト同族ナルヲ
以テ巴レカ尊榮ノ極トナシ更ニ其受クヘキ外國尊称
ヲ一トシ望ムトナク皆之ヲ固辞セリ是格外珍奇ノ一
例ナリ

尊称ニ眷意スルハ時ニ「オストセイ」ク地方ノ貴族ニ於
テ最モ甚シク遂ニ或ハ系統及ヒ賜称ノ權利ヲ有セサ
ル者ト虽モ其尊称ヲ濫用スルニ至ル是ニ於テ千八百
三十三年魯國政府此ニ注意スル所アリテ曾テ敕章使
用ヲ改正セシ如ク今又尊称使用ヲ改正スルヲ以テ緊

要トナス是レ尊称ヲ以テ私物ノ如ク濫用スルヲ未然
ニ防止センカ為メナリ千八百四十六年成法ヲ以テ終
ニ貴重ナル尊称ヲ得ヘキ權利ヲ定ム即チ其一ニ曰魯
國旧侯ノ子孫ニレテ此權利ヲ得ヘレ其二ニ曰曾テ魯
帝ヨリ世襲ノ貴重ナル尊称ヲ奉賜セシ者ノ子孫及ヒ
外國帝王ヨリ尊称ヲ受ケ魯帝ヨリ其世襲ヲ允サレレ
者ノ子孫ニレテ此權利ヲ得ヘレ

此成法中ニ於テ「オストセイ」ク地方ノ子男ニ関涉ス
ル左ノ規則ヲ定ム即チ魯國ニ「バル」ク沿海ノ諸縣ヲ
兼供セシ時ニ方リ唯其地方ノ貴族名簿ニ載入シテ遂
ニ魯國公書ニ子男ノ称ヲ得タム「オストセイ」ク地方
ノ貴族ノミ子男尊称ヲ有スルノ權利ヲ得ヘレ其他子
男尊称ヲ私物ノ如ク濫用スルヲ嚴禁ス然レモ自ラ子

男ト称スル者猶或ハ止絶スルニ至ラス故ニ千八百五十二年ニ於テ千八百四十六年ノ成法ニ一款ノ規則ヲ追加ス千八百五十年ニ於テクルトズヤ「イメレー」ナヤ「グーリヤ」地方ノ若干貴族ニ侯位尊称上ノ權利ヲ定ム而シテ千八百五十年ニ於テ紋章局ヨリ施行スル侯位^{クニヤス}伯位^{ガラフ}尊称ノ詔書^{ガラム}ニ課スル所ノ税金ヲ增高シテ乃チ一書ニ就キ千六百圓十五錢^{コウカ}ヲ課スルヲ定ム然レ氏十八百六十八年ニ於テ紋章局ヨリ下賜スル^{アクト}公書及^{ドクメント}證書ニ課スル所ノ税則ヲ變革ス又紋章局其出入ノ經費ヲ比較シ其宜キヲ量リ司法卿ニ免許證^{ライセンス}ノ税額ヲ改革セシ^シト^シヲ上申セリ是ニ於テ司法卿三年ノ實驗ヲ經テ其適宜ヲ察シ尊称及^{ドクメント}紋章ノ税額ヲ新定ス其税額ノ度表ハ次文ニ於テ見ルヘシ即チ最耀^{クニヤス}侯位ノ免許證ニ千

零八十五圓十五錢^{ニヤカ}ヲ赫耀侯位ノ免許證ニ七百八十圓十五錢^{トワリヤ}ヲ貴族尊称ノ免許證ニ百十三圓ヲ課ス而シテ最耀侯位ノ紋章免許證ニ百二十圓ヲ赫耀侯位ノ紋章免許證ニ百十五圓ヲ赫耀伯位^{ガラフ}ノ紋章免許證ニ百十圓ヲ^{ハロシ}子男ノ紋章免許證ニ百五圓ヲ^{トワリヤ}貴族ノ紋章免許證ニ百十圓ヲ課ス而シテ又最耀侯位ノ系譜及^{ドクメント}紋章ノ寫冊ニ六十八圓ヲ赫耀侯位ノ系譜及^{ドクメント}紋章ノ寫冊ニ五十七圓ヲ赫耀伯位ノ系譜及^{ドクメント}紋章ノ寫冊ニ五十二圓ヲ子男ノ系譜及^{ドクメント}紋章ノ寫冊ニ四十八圓ヲ^{トワリヤ}貴族ノ系譜及^{ドクメント}紋章ノ寫冊ニ二十五圓ヲ課セリ
余輩既ニ貴族ニ編入スヘキ種々ノ方法ヲ推究シ此種々ノ方法ヨリメ社會ノ品段ヲ分ツ所ノ實際ノ階級區分ヲ定メリ然レ氏此階級區分ノ間ニ於テ法政上ニ何

等ノ公異ヲ存セサルノミナラス却テ成法上ニ於テハ
一社會及ヒ其各級各族ニ同一ノ權利義務ヲ普及セリ
故ニ貴族ハ實際上ニ於テ階級族類ヲ異ニスト垂成
法上ニ於テハ之ヲ別ニスルノ制定アラズ
摸斯格帝ノ臣僕不羈自由ニメ去就極リナキ者ヲ土著
地主トナシ各々ニ出遊徘徊スル權利ヲ廢止スルノ時
ニ方リ貴族系譜ノ編製モ亦緒ニ就ケリ即チ其第一貴
族系譜ハ沃安三世ノ命令ニ由テ成リ天鷲織系譜ノ基
トナリシモノナリ蓋シ此系譜ハ職臣自稱ノ時代ニ才
リテ滅絶ス十六百八十二年一月十二日飛汰獨兒亞
設味帝門地棄絶ノ時ニ於テ從來ノ官員任命録ヲ悉皆
焚滅シ之ニ代フルニ一系譜ヲ編製シ以テ永ク系族ヲ
不朽ニ傳ヘントヲ命ス此系譜ニ系族ヲ編入スルニ才

リテ之ヲ五級ニカツ其第一級ニハ貴顯系族即チ侯族及
シ紳侍臣内閣貴族ノ官位ニ昇進セシ所ノ顯族第二
級ニハ沃安尾細利伊味帝ノ時ニ使臣及ヒ軍將トナリ
シモノノ系統第三級ニハ寧哈伊兒飛汰獨兒味帝ノ時
使臣及ヒ軍將トナリシ者ノ系族第四級ニハ中等官位
ニアリシ者ノ系族第五級ニハ下等官位ノ者其ノ父ノ勤
功ニ由テ摸斯格官位ニ昇進セラレシ者ノ系族ナリ千
六百八十六年ト十六百八十七年トノ公令ヲ以テ系譜
ヲ改正シ之ニ新系族ヲ加入スルヲ命ス斯ノ如ク天鷲
織系譜已ニ成リテ千七百八十七年摸斯格帝ニ於テミ
レレ氏之ヲ刊行シ之ヲ二冊トナシ魯國及ヒ外來ノ
侯族貴族系譜ト標題ス十七世紀ノ終リニ系譜ニ編入セ
ラレシ許多ノ系族或ハ消滅シ或ハ衰微セシト雖モ又

其間ニ褒賜ヲ得テ貴族トナリ及ヒ官位ニ由テ貴族ト
ナリシ新貴族甚々多ク現出スルアリ千七百六十一年
女帝悅利撒味多彼得兒乎那^{ナドウオレノイサウユトニク}
官ノプリシロンスキイ氏ニ命シテ貴族系譜ヲ編製セ
シム此系譜ハ順序階級ヲ以テ貴族ヲ別々スト虽氏其
編目ヲ數個ニ分ツ千七百六十七年ノ會議ニ於テ貴族
代議人ノ説ニ官位ニ由テセズレテ唯出生及ヒ帝ノ褒
賜ニ由テノミ貴族トナス^{ハキヲ}論述ス又其一二代議
人ノ論ニ系統貴族及ヒ尊称貴族ヲメ官位貴族及ヒ褒
賜貴族ト相分テ各々其範圍ヲ異ニセシメンカ為ニ貴
族ヲ六級ニ分界セン^ヲ陳記セリ此貴族代議人開陳
セシ官位ニ由テ貴族トナス^{ハカラ}サルノ説ハ官位等
表ノ主意ト齟齬スルヲ以テ之ヲ採用セズメ貴族ノ階

級ヲ分界セリ
貴族詔書ヲ以テ其實證ヲ確定レ貴族代議人ノ會議ヲ
開キ以テ諸縣ノ貴族系譜ノ編製ヲ各般一般ノ貴族ニ
示ス是ニ於テ一般貴族ハ何人ニメ貴族社會ニ入り得
ハキヤ又幾何ク其階級アルヤノ疑問ヲ皆自ラ氷解ス
ルニ至ル即チ其貴族系譜ヲ區分メ六編トナス
第一編ニハ褒賜貴族ト百年以來ノ貴族トヲ
第二編ニハ軍務官位ニ由テ得タル貴族ヲ
第三編ニハ文務官位ニ由テ得タル貴族ヲ
第四編ニハ外國貴族系族ヲ
第五編ニハ系統或ハ褒賜ノ尊称貴族ヲ^{侯伯及子男}
第六編ニハ百年以前ノ系統貴族ニメ頭名既ニ失却シ
タル旧貴族ノ系族ヲ記載セリ

ラビシキユフ氏ノ旅行紀事ニ一ノ曰貴族其第六編ニ記
載セラレテ他ノ貴族ノ下風ニ立ツヲ以テ憤怒ヲ起セ
シトテ嘲笑レタルアリ亦一奇談ト謂フヘレ
千七百八十五年ノ詔書ヲ以テ貴族ヲ六編ニ區分セシ
ト虽其順序ハ法政ニ於テ何等ノ分異ヲナサスレテ
第一編ニ記載セラレタル貴族ハ第六編ノ貴族ト同シ
ク領地役奴ノ權利ヲ有レ且ツ各縣貴族會議ノ選縣長任ノ首長ヲ云フ
トナレテ得タリ然レハ貴族及セ衆人皆其六編ノ順序
アルヲ見テ分界ナキニ非スト考慮ス故ニ第六編ノ旧
貴族ハ常ニ自ラ以テ特別貴族ニメ國家ノ柱石ナリト
自負シ第一編第二編第三編ノ貴族ヲ以テ新參貴族ニ
イ平民ノ血統ナリト蔑視ス而メ第四編ノ貴族ニ遇ス
ルモ亦少シク輕蔑ノ意アリ然レハ其第五編ノ尊稱貴

族ニ對スルヤ之レカ系統貴族タルヲ以テ常ニ甚々尊
敬ヲ加ヘリ是ニ於テ第六編ノ旧貴族ハ文武ノ兩貴族
ヨリ分離セントスルノ方向ニ由テ第五編ノ尊稱貴族
ニ合一セリ文武ノ兩貴族ハ又其轍跡ヲ追慕シテ依然
其名ハ第二編第三編ニ在リト虽モ其実ハ分離スルノ
方向ニ至レリ此分離ノ方向ヨリメ系統貴族學校ヲ創
設シ唯第四編第五編ノ貴族子弟ノミ之ニ入ルヲ得セ
シム
彼瑪兒大帝以前ニ廷臣ノ階級ハ其職務ノ順序ニ由テ
之ヲ定メリ此階級ハ貴族創成ニ從ヒ榮絶セシ故ニ元
老院中ニ一ノ官等局ヲ設ク是ニ於テ官位等表發行前
ニ元老院最終ノ改革ヲ以テ官等局ニ改訂改訂事務長ヲ置
キコレヲオフ氏ヲ以テ其職ニ任ス同氏ハ曾テ貴族及

賞勳局

七官職ノ事ヲ司トリニ者ナリ紋章事務長ヲ置クニ方
リ更ニ紋章局ヲ開設シ摸斯格有ニ於テモ亦其一分局
ヲ設置セリ而メ幾ハクナラスメ「プレヒチユフ」氏ヲメ
「コレチオフ」氏ニ代ラシム此紋章事務長ハ貴族ノ為ニ
曾テ廷臣ノ階級アリレカ如キ同一ノ趣意ヲ要求ス而
メ政府已ニ此紋章局ヲ創設セシメテ以テ爾來弥々之ニ
注意シテ其創立ヲ釐正セサルヲ得サルニ至レリ千七
百二十六年彼得見大帝ノ勅語ニ由テ紋章事務副長「伯
位」サシチイ氏ニ外國人「ヒ」ノ氏ノ給料ト比較シ紋章
局中ノ官宅及ヒ千六百圓ノ俸給ヲ下附シ且ツ新制紋
章ヲ受ル者ヨリ其彩色料トメニ圓ヲ收領ス「キ」ヲ命
ス
元老院ノ数局ニ分ル、ヤ紋章ノ事務ト重大ノ國事ト

ノ委任ハ第一局ニ屬ス而メ紋章局ヲメ魯國貴族各族
ノ事ヲ悉皆熟知セシメシカ為ニ各族ノ記録納室ヲ之
ニ委託ス千八百年ニ於テ紋章局ノ設立ヲ改良セシカ
為ニ紋譜制定ノ時奉職セシ官員ヲ以テ從來ノ局務委
員ニ加入ス而メ議長「コザダレ」氏ニ紋章局ノ全權ヲ
委任ス其局制恰モ議院ノ如シ千八百三十年ニ於テ元
老院會議ニ紋章局ノ事務ヲ上申ス「キ」ノ命令アリシ
時紋章局ノ設立初メテ確定セリ而メ紋章事務長ノ下
ニ副長三名ヲ置クヲ定ム千八百十九年摸斯格有ニ紋
章分局ノ事務ヲ制定ス千八百四十八年五月十二日紋
章局制ヲ改革シテ元老院第一會議ノ局ニ屬セシメ乃
チ紋章事務長ニ大判事ノ權利義務ヲ擔任シ副長三名
ニ大史ノ權利義務ヲ擔任セシム而メ紋章局事務ヲ三課

ニ分ツ即チ第一第二課ニ於テ一般貴族ノ事貴頭尊極ノ事及ヒ姓氏袁改ノ事ヲ掌ル第三課ニ於テ貴族ノ級譜編製詔書^{カラマタ}免許證^{デグロム}級章系譜ノ寫冊準備及ヒ貴族除籍ノ令書準備ノ事其他貴頭都民ノ事及ヒ都民管理監察ノ事ヲ司トル而シテ此都民管理ノ監察事務ハ其後魯帝親臨官廳^{カンフエリヤ}ノ第一監察局ニ屬ス然レモ現今ニ至リ此監察局ヲ廢止シ又都民管理ノ監察事務ヲ以前ノ如ク其本來ノ級章局ニ帰儀ス

是ニ於テ貴族ノ管理ハ專ラ級章局ニ歸ス然レモ此管理ノ幾分ハ貴族ノ權利ヲ維持スル所ノ元老院第一局ニ於テモ亦之ヲ領有ス此兩局ニ於テ貴族ノ事務ヲ管理スル間ニ何等ノ公異アルヤ級章局ニ於テ管理スル所ハ貴族各自ノ權利ニ関スル事件貴族ノ身位ヲ預定

スハキ實證及ヒ貴族證書^{トムメント}ノ事務ナリ而シテ元老院第一局ニ於テ管理スル所ハ撰任就官等ノ如キ貴族特權ノ事務ナリ
千七百二十二年ノ教令ニ因リハ級章局長ノ一要務ハ貴族ノ現員ヲ明知シ貴族各自ノ尊榮ノ紛疑ヲ明解ニシ貴族ノ職務ヲ配置スルノ三條ニ在リ余輩今其末條貴族義務ノ那邊ニ在ルヤヲ推究メ先ツ次章ニ之ヲ説カントス而シテ他ノ二條ノ如キハ暫ク措テ茲ニ論セ
級章局長ハ其教令ニ從テ三條ノ貴族名簿ヲ編製セサ
ルヲ得ス即チ第一ニハ貴族一般ノ姓名ヲ記シ官位ヲ以テ之ヲ分列ス第二ニハ貴族中ノ職務ニ任スル者及ヒ其職務ニ在ル者ヲ記ス第三ニハ貴族ニ帶名幾年

貴族
勳
章

一規則ヲ定メ祖父以來貴族タル高僧ノ子弟ヲシテ貴族ニ列シ之ヲ民籍ニ記入セサヲシム官位等表ニハ更ニ旧官位ノ事ヲ説カサレヲ以テ敎章局長ハ軍務ニ與ラサル旧貴族ニ敎章賦與ノ事ヲ明定スル能ハス故ニ十八紀ニ於テ往時下官ニ在リシ者ノ子孫ヲ貴族ト許認スヘキヤ否ヤノ疑問屢々起リ而シテ千七百五十四年即チ女帝悅利撒味多、彼為見乎那ノ末世ニ至リ往時ノ貴族ドワリヤン及セ縉紳子弟ニシテ平才ニ千四百間サレセンノ土地受領ノ者ヲ貴族ニ算入スヘキノ命令公布有リシニ由リ初メテ其疑問氷釋セリ千七百六十一年敎章局ニ命令ヲ下シホメイスクエ一世采地及セウオツナ世襲采地ヲ奉賜セシ者ノ子孫ニシテ其系族ノ実證アル者ヲ貴族トナサシム又其同年ニ於テ何等ノ人ニシテ貴族ニ屬スヘキヤノ問按テ決

定センカ為ニ貴族系譜ヲ編纂スルヲ命入千七百六十四年女帝悅如、埜利那二世此貴族系譜ノ編入不正アラシトテ恐レ之ヲ豫防センカ為ニ貴族系譜ニ編入ヲ請フ者アレハ元老院ヨリ直ニ之ヲ上奏スヘキヲ制定ス此制定ハ千七百六十八年ニ廢止セラレテ千七百七十三年ニ再復セリ是ニ於テ貴族名簿ニ編入ヲ請セ或ハ貴族ヲ確定スヘキ新定ノ免許證ヲ請フ者アレハ其當人ノ系統縁族ヲ尋子又其祖先在勤ノ都會及セ所有ノ村邑ヲ紀スヘキ公令ハ既ニ發行セリト雖比其結局何等ノ実効アルヲ見ス而シテ一ノ敎章局ヨリ貴族タルノ調査ヲ納書局ニ問ハス却テ他ノ官省ヨリ之ヲ求ムニ至レリ故ニ之ヲ防止センカ為ニ千七百七十一年公令ヲ下シテ曰官省ヨリ貴族タル調査ヲ要願セント欲

貴族
力
局

スル時ハ彼得兄弟紋章局及モ模斯格府ノ紋章分局ニ
請フヘシ直書局ニ請フヘカラスト然レモ此公令ヲ以
テモ亦貴族ノ事ニ関セシ紛疑ノ氷解シ難キモノヲ防
避スル能ハス
從來貴族実證ノ不正濫用アルヲ以テ千七百六十七年
ノ會議ニシテエルバードフ侯爵論シテ曰ク各郡ニ貴
族集會ヲ設ケ之ニ會長ヲ立テ以テ各郡貴族名簿ヲ編
製スヘシト又「ヤロスラフス」ノ縣貴族代議人之レニ應
ジテ曰ク其規則ヲ以テ紋章局ハ魯國貴族ノ実證ヲ得
ヘシト是ニ於テ貴族詔書ニ照校シテ論難ナキ十五條ノ
貴族実証ヲ撰寫シ且ツ之レヲ各縣貴族集會ニ出シテ
其証書ノ誰ニ屬スルヤヲ檢査セシム而シテ貴族代

議人集會ニ於テ編纂セシ所ノ各縣貴族系譜ヲ以テ其
所屬ヲ確定セリ然レモ貴族代議人集會ニ於テ貴族系
譜編纂ノ不正ハ甚タ屢々ニシテ特ニ小魯西亞ニ於テ
多シトス
斯ノ如ク不正ノ編纂アルカ故ニ政府初メテ各縣貴族
系譜編纂ヲ檢査スルニ至レリ千七百九十六年（巴）乎（ウ）次
見帝書シテ曰貴族集會ノ不注意ニ由リ猥リニ貴族ヲ
編入スルニ至ル故ニ此弊ヲ避クルニハ後來魯國政府
ニ於テ貴族ヲ編入セス且ツ貴族尊榮ノ詔ヲ下賜スヘ
カラサレヲ命スヘシ又千八百一年勅令ヲ下シテ曰貴
族尊榮ノ詔書ヲ下賜スルニ朕ノ命令アルニ非サレバ
行フヘカラスト其後亞歷山廷見帝一世ニ至リ更ニ貴
族代議人集會ヲ設ケ以前ノ貴族系譜編纂ノ方法ヲ再

獲ス然レ氏千八百三年教縣ノ貴族代議人集會ニ於テ
貴族ノ權利ヲ有セサル者ヲモ多ク貴族ニ編入スルノ
不正アルヲ以テ嚴令ヲ下レテ曰ク貴族ヲ其系譜ニ編
入スルニハ貴族詔書ノ第九十二條ノ定規ヲ確守スハ
ニ即チ貴族編入ヲ請フ者ノ祖父及ビ父曾ヲ貴族ナリ
シコトヲ證徴スル貴族十二名アル時ハ之レヲ以テ其貴
族タルノ實證トシテ疑ハサルハレト然レ氏其後立法
上ニ於テ貴族十二名ノ證徴ニ信憑セス且ツ國憲ニ於
テモ亦貴族詔書ニ十二名ノ實証ヲ要スハキ主意ヲ變
改レテ必スシモ之ヲ要セス千七百九十七年前ニ詔令
ヲ以テ各縣ヨリ改革局ニ貴族系譜ノ寫冊ヲ送致スハ
キコトヲ要求シ且ツ千七百九十七年及ビ千八百十年ニ称
々之ヲ強求セシト虽モ千八百十三年ニ至ルマテ其寫

冊ノ改革局ニ送致セシ員數ハ甚々些少ニシテ即チ
エフ縣ヨリ唯ニ今年分ノミナスコト縣ヨリ唯ニ今年
分ノミ送致セシカ如キナリ千八百十三年ニ於テ更ニ
寫冊ヲ送致スハキ嚴命ヲ下セリ千八百二十一年司法
卿口バノフ、ロストフスキイ氏元老院ニ告陳シテ曰貴
族集會ハ千八百三年ノ命令アリシニモ聞セスレテ生
表ノ貴族タル確證ナキ者及ビ其證徴殆ントナキカ如
キ者ヲモ貴族ニ編入セリト是ニ於テ元老院乃チ千八
百三十年ノ命令ヲ更ニ実行セリ千八百二十八年ニ於
テ元老院ニ一ノ檢査會議局ヲ設ケ貴族集會ノ処置ヲ
監査シテ貴族ノ真偽ヲ明定スルノ規則ヲ立テシム千
八百三十四年ニ於テ此規則初メテ成ルヲ以テ正院ノ
檢閱ヲ請ハリ是ニ於テ正院之ヲ可トシタチ千八百二

貴族
勅令
正院

十九年ニ設立セシ貴族代議人集會ノ処置ヲ監察セシ
カ為メニ各縣ニ於テ裁判長官ノ下ニ特別委員ヲ設置
スルヲ定ム即チ其委員ハ裁判長官ノ職ヲ襲クハキ者
ニ名代議員中ヨリ二名及ヒ地方判事員中ヨリ二名ナ
リ此委員ハ其処置ヲ毎月敎章局ニ報告セサルハカラ
ス若シ其報告遲延ノ時ハ敎章局ヨリ之ヲ元老院ニ上
申セサルハカラス而シテ委員ハ年末毎ニ定法ニ從ヒ
貴族系譜ニ編入セシ貴族ノ名簿ト貴族ノ權利ヲ有セ
スレテ其系譜ニ編入セシ貴族ノ名簿トヲ調査レテ之
ヲ敎章局ニ送致セサルハカラス此監察委員ノ目的ヲ
達スルハ尤モ易カラストナ故ニ千八百四十六年ニ
至レリト虽モ猶正院ニ於テ貴族偽證ヲナスノ多少如
何ヲ探求ス而シテ此偽證ハ異種貴族ノ間ニ於テ殊ニ

屢々行ハレリトス此異種貴族ノ地方ニ於テ其尊榮免
許證ヲ製為スル甚タ居多ナルヲ以テナリ余輩已ニ前
章ニ於テ見シ如クオストセイスク地方ノ忠義連士ハ
伯位尊稱ノ免許證ヲ擬造スグルーゴヤ地方ニ於テモ
亦斯ノ如キ擬造アリ特ニ魯国西方ノ諸縣ニ於テハ其
弊風久シク行ハレテ其何レノ時ニ始マレムヤヲ知ラ
ス
一千八百三十年議官^{メナニ}コフ氏司法卿ニ告知シテ
曰クフリリ縣ニ於テ貴族及ヒ侯族ノ尊榮免許證ヲ擬
造スル者アリテ其黨中ニ貴族代議人集會員中ノ一人
及ヒ其書記官モ加ハレリト是ニ由テフリリス縣ニ貴
族及ヒ侯族ノ尊榮免許證ヲ檢査センカ為ニ監察會^ニ議
ヲ設ケリ其後千八百四十六年ノ余令ヲ以テフリリス

貴族
力
局

縣ノ上州名
ニシモアラシカ

及セクタイスク西縣ニ監察會議ヲ置キ聖彼得兒堡ノ
監察會議所ニ於テ之ヲ總管ス而シテ千八百五十年ニ
於テ此兩縣ノ監察會議ノ措置ヨリシテ「グレートズヤ」イ
メレ「チヤ」及セ「ダ」リヤ地方ノ若干侯族及セ貴族ノ
權利ヲ確定スヘキノ成法ヲ立レニ至レリ
貴族ノ權利ヲ檢査センカ為ニ西方諸縣ニ監察會議ヲ
設立セシハ千八百三十四年ノ成法ヲ以テ他ノ諸縣ニ
監察會議ヲ設置セシ以前ニアリ即チ千八百三十三年
ニ於テ西方ノ「ウ」井「レ」ン「ス」ク「ク」ロ「ト」子「ン」ス「ク」バ「ロ」ス「ト」
ク「ス」ク「縣」キ「エ」フ「ス」ク「ウ」オ「リ」ン「ス」ク「ポ」ト「リ」ス「ク」縣「及」セ
「ウ」井「テ」イ「ブ」ス「ク」モ「キ」リ「ヨ」フ「ス」ク「ヒ」ン「ス」ク「縣」ノ「三」所ニ
監察會議ヲ設立スルヲ命セリ此監察會議ノ委員ハ内
務司法兩省ノ官員警察兵及セ地方警察官ヨリ成レリ

而シテ其委員ハ諸縣各地ニ在來セシ所ノ貴族系譜ヲ
調査シ其餘白ニ汚點シテ之ヲ封鎖スルヲ要シ千八百
三十五年ニ於テ此調査ノ事務ヲ終リ其系譜擬造ノ事
ヲ紋章局ニ通知ス然レモ此監察會議ハ莫大ノ功益ヲ
立ル「ナ」クシテ唯「ヤ」ル「ジ」チ「ユ」フ「及」セ「リ」ウ「オ」フ「地」方ニ
若干ノ真正免許證アルノミナリ「ビ」ー「ビ」コ「フ」氏ノ建議
ニ由テ千八百四十年西南三縣ノ為ニ「キ」エ「フ」都會ニ監
察會議ヲ設ケリ此委員ハ裁判長一名及セ其副長一名
議員一名ト其各縣貴族人選ノ代議人三名トニ由テ成
リ千八百四十四年一月一日ヲ以テ其事務ヲ終ラサル
ヲ得ヌ而シテ此監察會議ニ於テ其長官ノ奮勵注意到
ラサルナキヲ以テ六万四千ノ下等貴族ヲ貴族社會ヨ
リ除去シテ准貴族及セ都民ノ籍ニ加入セリ千八百五

貴族
力
局

十一年五月八日ニ於テ「ビービ」コフ氏「キエ」フ縣ノ地主
ヲ集メ之ニ千八百四十年同縣ニ監察會議ヲ設立セシ
所以ヲ説話レテ曰余嘗テ此地ニ来リシヤ車僕トナク
馭者トナク前驅トナク門守トナク或ハ庖厨ニ割烹ヲ
ナス者モ或ハ家主ノ靴沓ヲ取ル者モ悉皆貴族ナルヲ
以テ一日家主其僕ノ過失ヲ怒リ之ニ責罰ヲ加フント
スルヤ僕答フルニ尔余ヲ責罰スルノ權ヲ有セス余モ
亦貴族ニシテ尔ト同權ナリト云テ之ニ抗シタルトア
リ夫レ車僕或ハ割烹者ニシテ貴族タラハ魯國貴族ノ
元首タル皇帝ハ之ニ握手ノ禮ヲ施ス「キヤ」余ハ決シ
テ其礼ヲ施ス「カ」ラサルヲ知ル又「キエ」フ縣中ノ「バ」
シチ「エ」フニ貴族免許證製造所ヲ設一圓ノ定價ヲ以テ
其證書ヲ公賣シ且ツ諸所ニ貴族代議人集會ノ處置ヲ

検査スルノ監察會議ノ設立アリト虽凡更ニ寸効ヲ現
ハサ「リ」シ「ラ」以テ余其諸所ノ監察會議ヲ合併シテ一
ニ歸シ之ヲ中央監察會議ト名ツテ其撰擇淘汰ヲ以テ
貴族ニ依然トシテ居ル「キ」權利ナキ六万四千氏族ヲ
貴族社會ヨリ除去セリ故ニ今一步ヲ進メ敍章局ニ於
テ貴族監察ノ事務ヲ全終スルニ至ラハ余輩諸君ト相
共ニ握手對遇ス「キ」ヲ得ルハ余ノ豫メ信スル所ナリ
ト千八百四十年ノ中央監察會議ヲ以テ不正ノ貴族ヲ
淘汰セシト虽モ全ク其遺類ヲ剷鋤スルニ至ラス千八
百四十二年ニ鎮^ゲ臺^ク都^ク督^ク兼^ク縣^ク令^ク「ミ」ルコウ井ナ氏内務卿
ニ通知シテ曰「グ」ロド子^クン縣中裁判所ニ於テ貴^ク
族系譜ノ擬物ヲ索出スルニ今猶執筆セリト是ニ於テ
貴族系譜ヲ検査センカ為ニ各郡監察會議ヲ建設ス千

八百四十四年ニ至テモ亦前々縣令ノ通知ニ類似シタ
ル系譜擬物探求ノ事ヲ「ウオレンス」ノ縣ヨリモ上申セ
リ千八百五十二年ニ於テ波蘭貴族ノ權利ニ関レテ疑
問アレバ明解センカ為ニ波蘭王國及ヒリトフ侯地ニ
在リシ貴族ノ子孫モ亦貴族タルノ性質理由アルヲ定
ム然レバ貴族ヲ擬スル者古未登世習フテ以テ常トナ
リシ故ニ其弊風容易ニ過マス迄未ニ至リ初メテ「キ
エ」ノ中央監察會議ノ納書室ニ貴族系譜ノ實物アル
ヲ突頭セリ

第二章

余輩既ニ前章ノ首冠ニ於テ彼得兒大帝以前ニ魯國廷
臣ハ人民ト分畫シテ同族結合ノ一社會ヲナシタル者
ニ非ズヲ開論シタリ

彼得兒大帝廷臣ヲ一社會トナスヤ其国内四散ノ商賈
職エヲ都會ニ收集シ之ヲ商職^{ゲラジヤ、ブシント}級ニ分ツテ各一社會
トナスカ如シ耶ナ^{ボヤレ、オコリニヤ、ドムノイ}紳侍臣内閣貴族及ヒ侍童^{族、紳、貴}
第ノ曰官ヲ變改シテ新制ノ海陸兩官及ヒコレ^{族、紳、貴}トシス
キイ、アヤソル^{官ハ等}以上ノ文官トナセシ後悉ク之ヲ集
合シテ一社會トナセリ耶ナ^{ニリヤ、ストウ}貴族ニメ文武ノ兩務及ヒ
修學ノ義務ヲ擔任スルモノナリ彼得兒大章風ニ西歐
羅巴風ヲ欽慕シテ武官^{プラ}ポ^ルルシナク及ヒ文官^ナ
トクオレノイ、サウエ^トニクノ位階ニ在リシ者ノ子
孫ヲノ其家格ヲ墜サズ又他ノ名族ニ超ハス永ク其地
仕ヲ有セシメシカ為メニ既ニ之ヲ采邑ヲ世襲トナス
以テ新制ノ貴族社會ヲ封建^{ハオ、リ}系統貴族トサン^テテ務メ
リ然レバ此封建貴族ノ制定ハ魯國貴族ト歐洲系統貴

族ト元来其性質ヲ異ニスルヲ以テ魯国貴族ノ間ニ成
ラヌ又之ヲ成スヲ能ハス唯其形状ノミ魯国貴族ノ間
ニ發生スルニ至レリ
貴族ハ国家ニ義務ヲ尽スルキ重任アレヲ以テ平民ト
分畫ヲナス即チ平民ハ力役ニ労働ヲ以テ自ラ任レ貴
族ハ文武兩務ト修学ヲ以テ其任トナス故ニ平民ハ人
税及チ徴兵ヲ出スルキ民籍ニ入ル而メ貴族ニ於テモ
亦之ニ類レタル名籍アリ然レ凡人税ヲ拂ハス之カ為
ニ文武ノ兩務ニ從事シ且ツ學校ニ修學スルノ義務ア
リ貴族ハ其兩務ニ由テ貴人トナリ修學ニ由テ以テ成
人トナル是故ニ貴族ニ重任アリ免稅アリ免兵アリ貴
人アリ成人アルヲ以テ之ヲ平民ト分界スルノミナラ
ス又其外見ヲ以テ分テ遂ニ其言語ヲ以テ別ツニ至レ

リ即チ貴族ハ独ニ服ヲ服シ唇下ノ鬚ヲ剃ス又独
ノ言ヲ誦シ持ニ法國ノ語ヲ遣用セリ
斯ノ如クニシテ新制ノ貴族社會ニ漸々人民社會ニ異
リタル尊榮アルヲ知ルニ至ル千七百三十年摸斯塔改
革ノ時ニ際シサレテコフ氏ゴリガレデル聯隊長コズロフ氏ニ関セ
シ種々ノ風聞アリシ事ヲウオレンスキイ氏ニ上訴セ
シ「アテ請フヤ同氏之ニ答テ之ヲ上訴センニハ彼我ノ
尊榮ニ對シテ正理ニ適スルヤ否ヤヲ先ツ子カ心ニ於テ
自ラ三思スルヲ望ムト帝安那沃安諾子那ノ治世ニ
至リ一子相續ノ詔令ウカズニ由テ諸第ノ軍學校ニ在ル生徒
ハ後嗣ニ加ハルノ權ヲ失ヒ且ツ軍務ノ下官ニ入ル
キヲ以テ其貴族ノ尊榮品行ヲ墜失センコトヲ悲歎スル
ニ至ル而シテ「シチユルバートフ侯ハガリートン侯

賞勳局

賞勳局

「ウオルクンスキ侯及ヒ」アプラクレン侯其身系統貴族
ニレテ女帝安那次安諾乎那ニ迎合追従シタル滑稽者
ノ大名中ニアルヲ嘲笑ス若シ夫ノ系統^{アリストクラット}貴族ハ彼瑪兒
大帝ノ時實際ニ於テ魯國貴族ノ間ニ成ラヌレテ唯其
名稱ノミアリト為サハ或ハ其時ノ系統貴族ニレテ大
帝ニ從媚スルヲ耻辱トナサハル者アルヘレ而レテ並
貴族ニ於テハ其耻辱ヲ顧カレ又之ヨリ甚キアリ即チ
千七百八年ニ於テ「メシセコフ氏曾テ其妻ニ並貴族ノ
ニ女ヲ送リ之ニ言テ曰此一少女ハ舐舐鸚鵡ニ勝レレ
ヲ以テ之ヲ玩弄物トナスヘシト又「アストラハン縣ニ
於テウオレンスキイ氏縣令ノ時ニ^{ゲキアレレトナント}中將マナユシキン
氏一家ノ娛樂ニ供センカ為ニ水夫長^{ミナト}メシテユルスキ
イ氏ヲ自家ニ居住セシメ皆之ヲ玩弄シ狂愚ヲ以テ之

ニ遇セリ又茲ニ貴族社會ノ尊榮ハ初メテ十八紀ニ於
テ魯國貴族ニ發生セシ「ア」後論セシ夫レ廷臣ノ系統
尊榮ハ官位考表制定ノ後一變シテ官位尊榮トナリ官
位尊榮一變シテ社會尊榮トナリ社會尊榮一變シテ遂
ニ人身尊榮トナルニ至ル即チ十七紀ノ終リニ^シ紳^セ
イン氏ハ「ロモタノフスキ侯ノ已レカ」父母ヲ侮辱セシ
ヲ以テ之ヲ上訴ス是其系統尊榮ニ関スルヲ以テナリ
又千七百二十二年ニ於テ「ドルゴルーキイ侯其失敬ヲ
受クルヲ以テ已レカ内閣正議官ノ尊位ヲ辱メリト為
ス而シテ大書記官「ストラバ」ノフ氏ハ少書記官「シヤヒ
ロフ氏ノ殴打罵詈ヲ受クルヲ以テ」人身尊榮ヲ辱ムル
ト為サスシテ但ニ已レカ大書記官ノ尊榮ヲ辱ムルト
為セリ是其官位尊榮ニ関スルヲ以テナリ又千七百六

賞勳局

十七年ノ會議ニ於テ「シナエルバートフ侯ノ發論セシ
所ヲ以テ前文ニ参照スヘレ即チ同氏ノ言ニ曰貴族ハ
其身ノ尊榮ヨリ成來シ又其尊榮ヲ以テ其身ヲ保存ス
ヘキ者ナルカ故ニ法律上ニ於テ猥リニ貴族ヲ罵詈侮
辱スルヲ嚴禁セサルヘカラスト是其人身尊榮ニ関ス
ルヲ以テナリ
斯ノ如ク尊榮ハ貴族ノ間ニ發生ス而メ貴族社會実益
ノ高點ニ由テ其尊榮ヲ定ム此実益ハ弥々確立盛大ニ
至リ千七百三十年ニ於テ既ニ之ヲ徴スヘレ即チ貴族
ハ上等官省ノ委員選舉ニ與カルヘキヲ要求ス又内閣
議院ハ貴族ヲ以テ尊重貴頭ノ者トナス事猶歐洲各國
ノ如クセリ加之千七百六十七年ノ貴族代議人會議設
立ニ由テ貴族社會ノ一團結ヲ生スルニ至レリ即チ其

代議人論述シテ曰ク貴族ハ一社會ヲナシテ其社中ニ
特權及ヒ安全ヲ含有スヘレト乃チ貴族社會ニ特權ヲ
下賜スヘキヲ要求ス又代議人全貴族ノ需用供給ノ
事ヲ論述シ且ツ悲歎レテ曰貧困貴族ハ適宜ニ其子弟
ヲ教育スル能ハス是ニ由テ野鄙遲鈍ニ成長シ其生活
言行ニ於テ聊カ貴族ノ風態アルヲ見スト
千七百六十七年ノ會議ニ於テ貴族代議人發論シテ曰
貴族尊榮ニハ國家ノ為ニ高重ナル意義アリト故ニヤ
ロスラフ縣ノ命令ニ於テハ貴族ヲ帝國ノ重官ト名ツ
ケリ是代議人「シチエルバートフ侯ノ説ニ由レハ貴族
ハ尤モ其尊榮及ヒ功績ヲ國家ニ顯ハスヲ以テナリ又「シ
ハイロフ縣貴族代議人ナレ「シキン氏ノ臆説ニ曰魯
國ニ於テハ貴族尊榮ヲ以テ神聖ノ如ク一種特別ノモ

賞勳局

ノニメ人民ノ安寧祉福ヲ守ルモノト為セリト又「
ルスク縣ノ代議人」ストロミロフ氏論述シテ曰貴族
ハ國民ノ一種特別ナルモノニメ國家ニ勤勞スルヲ以
テ其義務トナス又國民ハ貴族ニ服役スルヲ以テ其義
務トナスカ故ニ貴族ハ國家ト國民トノ中間ノ權利ヲ
有セサルベカラスト而メ千七百六十七年ノ會議ニ於
テ「^{シテ}エルバート」フ侯ハ尤モ没ヤトメ貴族ノ特權ヲ維
持シ且ツ系統貴族ノ成立ヲ主張セシ人ナリ即チ其主
張スル意見ニ曰古昔魯國ノ貴族ハ其熱血ヲ注キ性命
ヲ致シ自國ヲメ外國ノ羈軛ニ免レ且ツ國教ヲメ外教
ノ愧辱ヲ免レシメタリト又曰貴族ノ存在スル地方ニ
ハ開化^オ自ラ進捗セリ何トナレハ貴族ノ在ル所ニ必ス
其隸屬アリ隸屬在ル所ニ必ラス農事産業アリテ以テ

其富足ヲ成シ且ツ學術技藝從テ其地ニ勃興スルヲ以
テナリト是ニ於テ「^{シテ}エルバート」フ侯ハ其持論ニ執リ
西伯里ヲ開盛センカ為ニ貴族社會ヲ其地方ニ創設セ
シ「^フ」上言ス然レ共時運未タ到ラスシテ其地方ニ貴
族社會遂ニ開立セス之ニ由テ其地方ニ貴族ノ隸屬及
セ其領地役奴法アラサルカ故ニ西伯里地方ニ於テ唯
善良純粹ナラサル所ノ魯民ノミ漸クニメ開墾スルニ
至レリ又「^{シテ}エルバート」フ侯ノ結論ニ曰魯國貴族ハ其
出生ノ旧陳ナルト其貴顯ナルトニ由テ西政羅巴ノ封
建系統貴族ニ甚タ劣レリトセズト「^テ」子ブル郡セキ子
「^ル」隊ノ代議人「^コ」セリスキイ氏論シテ曰系族微賤ナ
リト雖モ官位ニ由テ貴族トナル者アリ故ニ貴族ハ士
官ノ位階ヲ蔑視ス可カラス又上等士官ヲ貴族トナス

ハキ成法ノ廢止ヲ要求ス可カラスト「シナユルバト」フ
侯之ニ抗答シテ曰子ノ古昔魯國貴族ヲ微賤ノ系統ト
蔑視スルハ余ニ於テ甚々奇怪ナリトスル所ナリ若シ
子ノ言フ所ノ如クナラハ余モ亦魯國人民ノミナラス
外采各國人民ニ證徴シテ之ニ答ルヲ得「レ即テ魯國
歷世ノ事蹟ニ就テ之ヲ指示サシ夫レ魯國貴族ノ一系
ハ其源ヲ大侯「リユ」リクニ發シ下リテ又大侯「ウラ」ジミ
ルヨリ出ツ他ノ外采貴顯ノ一系ハ其源ヲ外國王侯ニ
取レリ而メ許多ノ貴族ハ其系統元ト土地ヲ領スル貴
人ヨリ出テラスト或モ魯國大侯ニ帰服臣事シ數百年ノ
久シキヲ經テ魯國ニ著明ノ勤功ヲ顯ハシタル高貴ノ
人ヨリ出タリト
系統貴族ハ國家ノ至貴至重ナルモノト自負スル意見

賞
勳
局

ニ浸潤シテ夫ノ官位等表ニ基ツキ文武ノ兩官ニ由テ
容易スク貴族トナルヲ以テ貴族ノ品價ヲ減殺シ且ツ
其特權ヲ昧蝕セシ「テ」テ袖手傍觀スルニ忍セズ千七百
六十七年ノ貴族代議人會議ニ於テ貴族ノ權利ヲ官位
ニ由テ與ル「テ」ナク唯殊徳偉功ニ由テノミ帝ヨリ之ヲ
賜フ「テ」キヲ論述セリ此系統貴族ハ官位貴族ヨリ分裂
シテ特立ノ範圍ヲ成サントセシ事千七百六十七年ノ
會議ニ言論セシ所ヲ以テ見ル「テ」即テ其代議人ハ官
位ヲ以テ貴族トナス可ラサルヲ發論セリ「レ」エレ「ト」ツキ
イ郡ノ代議人千七百二十四年一月三十一日ノ旧令ニ
貴族ヨリ出シ者ニアラザシハ書記官トナス可カラズ
ト有ルニ執リテ彼得兒大帝ノ趣意ハ唯貴族ノミ文官
トナシタル者ニメ夫ノ上等士官ヲ貴族トナセシカ如

賞
勳
局

キハ瑞魯西国交戦ノ時ニ立テタル一時ノ法ニメ太平
無事ノ時ニハ廢セサル可カラスト推察臆測セリ又「ヤ
ロスラフ郡ノ代議人」シナユルバトフ侯モ亦斯ノ如キ
臆測ニメ且ツ官位ニ由テ貴族ノ權利ヲ失フベカラス
但帝命ニ由テノミ之ヲ賜フヲ得ヘシト断論セリ而メ
「クリンスク郡ノ代議人」オロフ氏前文ノ諸説ニ附言
シテ曰貴族ノ系統ヨリ出テサレ士官ハ直ニ官位ニ由
テ貴族ノ尊榮ヲ受クハ難ハサレカ故ニ貴族系統ニ非
ル士官ハ縱令ニ高級ナリト虽モ其下級ニアル貴族系
統ノ士官ヲ指揮スル難ハサレノ處分ヲナス「シト
斯ノ如ク貴族ノ間ニ分裂ノ勢ヲ成シテ系統貴族ハ官
位貴族ヲ拒絶セント欲スレバ政府ヨリ官位ヲ以テ貴
族ノ權利ヲ賜フ「ハ依然トシテ止マヌ之カ為ニ貴族

族々増殖スルニ從ヒ其分裂モ亦族々倍蓰スルニ至ル
此貴族増殖ヨリシテ貧困ヲ生ス殊ニ一子相續ノ廢止
ニ從ヒ諸子分地ヲ制定セシ時ニ其貧困尤モ甚タシト
ス而シテ貴族ハ貧困ニ逼ラレニ從ヒ實際上ニ於テ弥
々平民ニ接近シテ自カラ其貴族社會ヨリ退出スルニ
至レリ
十七世紀ニ於テ數學校及セ守兵學校ニ教育ヲ受ケシ貴
族ノ諸子其貧困ニ逼ラレニ至リレハ各自ノ父債ニ一人
及ヒ三人ノ家祿ヲ有シ或ハ其一人ヲモ有セサレニ
由テナリ其一ニ「的例ヲ演説シテ曰「プロシンスキイ郡
ノ貴族首長」テユトク「氏」千七百七十一年十一月二日
元老院ニ上奏シテ曰「二百余名ノ貴族子弟未タ奉職在
官ノ任ニ堪ユル難ハスト且其中心ノ數人衣服靴沓ヲ

得ル能ハサルヲ以テ仕官ニ就カシテ余ニ強願セリ
ト又千七百十四年ニ於テ貴族ノ一夫人「アフマトワ」ノ
ウゴーロトノ縣令「シウユルス」氏ニ懇願シテ曰幸ニ尺寸
ノ土地一畝ノ農夫ナキヲ以テ華家相共ニ農業傭役ニ
從事シテ日々ノ生活ヲ營ミ且ツ良人ハ彼得得兒堡ニ在
リテ產物運輸ノ小舟ニ傭夫トナリ久シク帰郷セサル
ヲ以テ甚々貧困ニ逼マリ自費ヲ以テ三子ニ教育ヲ授
クル能ハス冀クハ兵卒子弟教育ノ為ニ設立セラレレ
同縣ノ守兵學校ニ此三子ヲ附託レ教育ヲ得シ丁ヲ欲
スト乃チ縣令「シウユルス」氏此事情ヲ元老院ニ上奏セリ
是ニ於テ元老院「ノウゴーロド」縣ニ貴族ニシテ子弟ヲ
教育スル能ハズ且ツ貧困ニ逼マリカ役勞動ヲ以テ生
活ヲ得ル者ノ員數幾許アルヤヲ調査ス又他縣ニ於テ

賞
勳
局

モ之ニ類似スル貧困貴族ノ少カラサレ洞察シ其子
弟ノ員數千人ノ多キニ至ルト虽モ之ヲ守兵學校ニ於
テ教育スル為ニ其入費ハ一生徒ニ付キ一年ニ五圓（五圓）ニ
十二錢（五圓）五厘ヲ飲料稅句ヨリ支給スベキヲ定ム又悅加
埜利那二世ヨリ「ノウゴーロド」トウユルス（ノウゴーロド）ノ縣令「アル
ハロフ」氏ニ贈リシ書簡ニ由テ視ルニ該縣ノ諸邑ニ居
住セシ貴族ハ農夫ヲ有セシテ皆自ラ耕耘ニ從事セ
シテ徵スルニ足レリ
亞歷山的兒帝一世ノ治世ニ於テモ亦無產貴族ヲシテ
其塔ヲ安セシメンカ為ニ甚々心ヲ用ヒ思フ勞シテ十
八百一年諸隊中ニ定員ノ外貴族ニメ下等士官ヲ務メ
何等ノ給俸ヲ受ケス貧困ニ堪ヘサルヲ察シテ之ニ並
兵卒ノ給料ヲ與ヘ且ツ之ニ並兵卒ノ職務ヲ任スハキ

賞
勳
局

ヲ命セリ其後尼格柔帝ハ無産貴族ノ情况ニ一層ノ注
意ヲ加ヘ先帝ノ法ニ異ナルニ法ヲ制定セリ其甲法ハ
無産貴族ニ官有地ヲ分與シ且ツ之ニ扶助金ヲ下賜ス
ヘキ法ナリ而シテ乙法ハ貧困貴族ノ子弟ニ教育ヲ授ク
ヘキノ法ナリ即チ

其甲法ニ謂フ所ノ無産貴族ニ官有地ヲ分與スルニ曠
漠ナル諸縣ノ土地ヲ以テレテ且ツ之カ所有權利ノ制
限ヲ定ム千八百四十三年^ミニベトリヌク縣ニ於テ三
百人ノ無産貴族一家毎ニ六十^テシヤチンノ土地ヲ分
與ス^タンボ^フス^ク縣ニ於テモ亦其一家毎ニ八十^テ
シヤチンノ土地ヲ附與シテ其收稅ヲ得セシム是ニ於
テ無産貴族ノ曠漠ナル諸縣ニ移住セント欲スル者ハ
カラバメ^リヤガ^ンヌク縣ヨリ二百九十五戸^スモレシ

ヌク縣ヨリ一百九戸移住セシ者アリ其後千八百四
十七年^リヤガ^ンヌク縣三十戸^スモレシヌク縣ニ戸
貧困貴族ハ^サマ^ルヌク縣ニ分與ノ地ヲ得且ツ政府ヨ
リ扶助金ヲ受ケリ又千八百四十九年ニ二十三戸千八
百五十二年ニ七戸ノ貧困貴族^サマ^ルヌク縣ニ分與ノ
地ヲ得且ツ政府ヨリ百圓^トヨリ百四十圓^トニ至ルノ扶助
金ヲ受ケリ

其乙法ニ謂フ所ノ貧困貴族ノ子弟教育ニ関シ千八百
四十三年諸卿會議ヲ以テ貧困貴族ノ子弟七年ヨリ十
七年ニ至ル者ヲ兵卒子弟ノ軍團ニ入レテ教育スヘキ
ヲ定ム又千八百五十二年ニ弥々之ヲ確定シ且ツ其子
弟ヲ軍學校ニ於テ教育スルヲ允ス若シ父母或ハ親戚
自費ヲ以テ其子弟ヲ官ヨリ定メレニ赴カシムル能ハ

賞勳局

賞勳局

サル時ハ其縣ノ貴族一統ノ入費ヲ以テ之ヲ其學校ニ
 送致スヘキヲ命セリ
 余輩前説ニ於テ貴族ノ貧困ニ逼マリシ実跡ヲ論ス又
 其貧困ニ執リ衆多ノ貴族ニ社會分裂ノ勢ヲ發生シ生
 計富貴ナル新旧兩貴族ハ生計困難ナル新官位貴族ヨ
 リ分裂ス而メ承譜第六編ノ衰頽貴族ハ新官位貴族ニ
 合一ノ形態ヲ成セシテモ既ニ論述セリ其新旧兩貴
 族ハ巴レテ系統貴族ト自称シ特種ノ社會ナリト自負
 シテ唯平民及ヒ下等貴族ノミナラス中等貴族ヲモ蔑
 視スルヲ甚タレ之ニ準シテ一般ニ貴族ハ平人ト賈壞
 ノ外界ヲナシ自ラ高位ニ居ルト誇慢シテ其子弟ヲメ
 平人ト共ニ教育セシムルヲ欲セス別ニ貴族學校ヲ設
 立ス即チ貴族學校貴族女學校及ヒ貴族軍學校ナリ又

所謂魯國ノ系統貴族ハ並貴族ヨリ巴レテ外界セント
 欲シテ系統貴族子弟ノ為ニ其學校ヲ造立ス即チ系統
 貴族幼年學校系統貴族大學校及ヒ系統貴族法學校ナ
 リ系統貴族ノ子弟見孫ハ此諸學校ニ於テ法國革命以
 前ノ華言美態等ヲ摹倣シ善良ナル古昔法國ノ世襲貴
 臣ノ如ク其言行ヲ修整スルニ至リ殆テ退校セリ十八
 紀ノ末法國王黨遷徙ニ由テ古昔法國ノ美俗ハ實ニ魯
 國上等社會ノ容儀風俗及ヒ心意ニ甚々大ナル影響ヲ
 生セリ魯國ニ於テ法國ノ如キ系統貴族ヲ新成セシハ
 十八紀ノ末十九紀ノ始メニアリ然レモ新成ハ既ニ十
 八紀ノ始メヨリ久シク萌芽ヲ發生シ已ニ廷臣及ヒ官
 員ヨリ貴族ヲ創立セントスレ時ニオリ系統貴族ハ官
 位貴族ト外界シテ特別社會ノ範圍ヲ成サントス是ニ

於テ彼得見大帝旧新官位ノ貴賤ヲ論セス貴族ノ列ニ
縉紳、侍童、將官、少尉、内閣、正議官、及ヒ文官八等ニ在ル者
ヲ加入ス十八紀ニ於テ魯國貴族ノ増殖セシハ貴族代
議人ノ令書ニ見ル如ク名族ニテハクニヤスガラン侯伯其他無學ノ下
士官長、兵卒、九等文官、司廐官ニ至ルマテ貴族トナレリ
故ニ此等ノ貴族ハ其名称ノミアリト虽ヒ貴族タルノ
意気アラサルヲ以テ或ハ共和政事トナリ其身ノ零落
シテ活路ニ惑ハシトテ常ニ危懼シ救護ヲ上帝ニ祈ル
ニ至レリ

彼得見大帝以前人民溥朴ニメ同權自ラ其間ニ存スル
ヲ以テ高官ノ卑官ニ於ケル地主ノ農夫ニ於ケル主人
ノ家僕ニ於ケルカ如キ關係ハ人民社會ノ間ニ存ス
ヲ見ス而メ不同權ハ唯實際上ニ於テノミ強弱貧富等

人間ニ存在ス即チ強者ハ弱者ヲ彼シ富人ハ貧人ヲ制
シ廷臣ハ賤民ヲ壓セリ然レハ彼得見大帝以前ニ於テ
ハ十八紀ノ始ニ創定シ漸ク當今ニ至リテ確定セシ所
ノ人民社會ノ間ニ著明ノ分界アラズ彼得見大帝ニ至
リ初メテ上等社會ヲ以テ貴族ニヤトストツオヲ創成ス此貴族ハ衣食
居住ヨリ言行風儀ニ至ルマテ歐洲開明ノ皮相ニ擬シ
且ツ歐洲封建貴族ノ風ヲナシテ貴族ノ平民ニ於ケル
ハ猶高官ノ下官ニ於ケルカ如シ故ニ貴族ハ貴頭階級
トナリ平民ハ卑賤階級トナレリ此ハ分裂ハ魯國人民ノ
性情ニ固結シテ今ニ至ルマテ猶然ルアリ
魯國ニ於テ彼得見大帝以前所謂上等社會ナルモノ有
ラサルヲ以テ貴頭貴族ナルモノモ亦有ルナシ唯帝
族ヲ以テ貴頭貴族トナス故ニ貴頭ノ語ヲ以テ帝族ノ

尊称トナス而メ其他ノ人民ヲ以テ魯帝國^{ツアリ}固有ノ家臣ト
ナセリ彼得見大帝ニ至リ帝族ハ他ノ尊称ヲ受ケ^{ニヤフトストクオ}貴族
ハ外國ノ制例ニ模倣シ^{フランスロードノイ}貴頭貴族ト改称セリ此貴頭貴
族ノ改称ヲ公行セシハ千七百二十一年貴頭ヲ以テ帝族
ノ尊称トナスヲ止メ正教ヲ以テ其尊称トナスノ際ニ
始マレリ然レ氏千七百十年ノ書中ニ回テ考ルニオス
トゼイヌク地方ノ忠義連士ヲ称スルニ貴頭或ハ高上
貴頭ノ尊称ヲ以テヌ又其以前千六百四十九年ニ於テ
波王^{「ヤンカズミル}小魯西亜ノ貴族^{「ボクダシ}ブトウ
オ氏ヲ呼称スルニ貴頭ノ尊称ヲ以テシタリ
官位等表ノ制定ニ由テ卑賤出生ノ者ト虽モ奉職在官
セシ時ハ之ヲ高貴出生ノ者ト許認シ上等士官ノ官位
ニ昇進セシ者ハ^{フランス}貴頭ノ尊称ヲ以テ称セラレハキ權利

ヲ得ハシ又上長士官ヲ奉職セシ者ヲ至貴出生ノ者ト
ナシテ高上貴頭ノ尊称ヲ得ハシ而レテ官位ニ由テ貴
頭ノ尊称ヲ得ルニ從ヒ遂ニ貴族社會モ亦一般ニ自ラ
此尊称ヲ得ルニ至レリ即チ余輩貴族社會ヲ称スルニ
貴頭尊称ヲ以テセシ事ハ千七百五十四年ノ詔令
ニ於テ初メテ見エテ得タリ然レ氏勅令ヲ以テ貴族ヲ
魯國貴頭貴族ト改称セシハ千七百六十二年ニ在リ又
其後ニ至ルト虽モ多分ハ貴頭貴族ト称セス誠忠貴
族ト称セリ
貴族ハ^{フランス}貴頭ノ者トナリ平民ハ卑賤ノ者トナレリ此名
称ノ分定ハ成法上ニ於テモ亦公行セリ即チ千七百十
四年及チ千七百二十年公令中ニ卑賤者ト記載セシ文
字アルヲ以テ之ヲ證徴スハ然レ氏成法上ニ於テ此

賞
勅
令

賞
勅
令

卑賤ト記載セシ字義ハ下等ト言フカ如クニメ敢テ心
志品行ノ卑賤ナルヲ言フ義ニ非ス
彼得見大帝ノ命令ニ由テ独ニ服ヲ服レ唇下ノ髯ヲ
剃シ平民ト其外見ヲ異ニセシ貴顯貴族ハ漸々歐洲建
建貴族ノ風ニ浸潤シテ之ニ著目セリ是則チ十八紀上
半ニ於テ魯國貴族外國ヲ遍歴シ貴族鑑等ノ如キ諸種
ノ小冊子ヲ齎シ來リ能ク其事實ニ通曉シテ遂ニ魯國
貴族ノ此方向ニ著眼スルニ至リシハ更ニ疑ヒナレヌ
独ニ貴族ノ影響ヲ魯國貴族ニ生セシ所以ハオストゼ
イスク地方ノ忠義連士ヲ以テ其媒トナス加之十八
紀ノ初メ独ニ魯國ニ遷移シ其官務ヲ奉セシ者甚々
夥多ナルヲ以テナリ文武兩務ノ高位貴官ハ多ク独
人之ヲ台得ヌ即チ千七百三十年安那、次安諾、予那、即位

ノ時ニオリ文武兩務ノ將官合計百七十九人ナリ其員
中独ニ人五十名アリ
人民社會ヲ分裂シテ貴顯及ヒ卑賤ノ兩族トナレ其卑
賤ノ一族ハ生來血氣骨格ノ強堅ナルヲ貴族ト異ナル
ヲ以テ勞役ヲ免レサル動物ノ如ク見物ス貴族ハ賤民
ノ言ハサル外國語ヲ專用センヲ欲シ貴族幼年學校
ニ於テ唯其子弟ヲ教育ス而メ賤民子弟之ニ入校スル
ヲ固ク禁セリ
十七紀ノ終リ佛人デ、ニヨウ井、リ氏魯國ニ采遊シ
言テ曰ク魯國ニ於テ貴族一般ニ外國語ヲ專用スルヲ
欲スト虽巧ニ法語ニ通スル者ハ唯「ドルゴル」コ
フ侯ノ一人ノミナリト十八紀ノ初メ彼得見大帝嚴ニ
貴族及ヒ其子弟ハ必ラス外國語ヲ習學スヘキヲ命

賞勳局

賞勳局

セリ其命ニ曰貴族及ヒ其子弟ハ他ノ無學文盲ノ者ト
其外別一目ニシテ驟然タラレメ且ツ其演述スル所婢
僕ヲヒテ了解シ得サラシメンカ為ニ平常相互ニ外國
語ヲ以テ説話スヘシト是ニ於テ貴族漸々外國語ニ習
熟スルヲ得ルニ至レリ乃テ「バルハゴ」リツ氏ノ語ニ
回レハ「カシツ」大臣「ゴロウ」井ン氏ノ子ホタ切ナリト虽ヒ
猶善ク英佛及ヒ他ノ國語ニ熟通セリ又「子」プリユエフ
氏ノ記録ニ回レハ「サル」テコフ侯ハ千七百二十七年法
國公使ヲ接待スルニ法語ヲ以テ自在ニ問答ヲナセリ
又女侯ダシコフ氏ハ千七百四十四年ニ産生シ博學ヲ
能ニレテ遂ニ魯國大學校長トナリ善ク四箇國ノ語ニ
達セリ而レテ魯語ニ至テハ却テ其熟達ヲ得ヌ故ニ十
八紀ニ於テ外國語ニ熟通スルヲ以テ甚々貴重ナリト

ス而レテ貴族ノ外國語ヲ習學スルハ開明ニ進捗スル
ノ一大要具ト為リ且封建貴族ナルモノ起生スルノ原
由トナリテ其人民社會ヨリ分裂セントスルヲ助ケリ
然レトモ此外國語ヲ習學專用スルハ大ニ弊害ヲ招ク
ニ至レリ
魯國人民ノ間ニ於テ其國語ニ習熟セサル者又少カラ
スト即チ元帥「ル」ミヤンツ「オ」フ氏ハ独乙語ノ韻調ヲ以テ
魯語ヲ誦ス又「カ」チ「バ」イ侯ハ法語ヲ用ユル巧鍊ナリト
虽ヒ魯語ヲ用ユル却テ鈍遊ナリ故ニ余輩今外國語ヲ
習知スルヲ以テ非トスルニアラスト虽ヒ之ニ偏惑ス
ル寸ハ自國ヲ賤辱シ正音ノ國語ヲ以テ未開人民ノ言
辭トナレテ之ヲ度外ニ措クニ至ルヲレ
魯國系統貴族及ヒ並貴族共ニ自持確立ノ志氣ナク常

賞
勳
局

賞
勳
局

ニ外國語ニ眷意セシテ以テ富有貴族ハ外國人男女ノ
師傳ヲ以テ其子弟ヲ教養スルニ至ルモ亦怪シムニ足
ラサレナリ此外國師傳ハ往昔ヨリ魯國ニ來入セリ即
チ千七百十四年ニ出生セレナタリヤドレゴルコフ
ト云ハル貴女ノ師傳ハ外國ヨリ來ル所ノ婦人ナリ其
後魯國貴族ノ子弟ヲ教導スル所ノ外國人男女ノ師傳
日ニ月ニ倍蓰シテ家訓ノ事一ニ其掌中ニ帰スルニ至
レリ又千七百五十二年ノ命令ニ由テ視レハ外國教師
女傳ハ唯其家ニ於テノミナラス且ツ市上ニ於テ商法
ヲ事トスルヲ知ルハレ故ニ千七百五十七年命令ヲ下
シ外國教師ヲシテ聖彼得見登大學校ニ試験ヲ受ケシ
ム其受ケサル者ヲ家訓ノ教師トナスバカラスト
政府摸斯格府ニ大學校ヲ設立シテ貴族子弟ノ教導ヲ

メ外國ヨリ來リシ教師ノ掌中ニ帰セサラシメントス
然レモ其成功ヲ得ル難ハス何トナレハ貴族ハ摸斯格
府ノ大學校ニ入ルヲ好マサルニ曰テナリ此大學校ヲ
設立スルヤ初メハ平民ノ入校ヲ許サス其故ハ貴族專
務ノ學術ヲ以テ教導スルニ由テナリ然ルニ農家ニ生
出シ遂ニ魯國第一ノ碩學トナリレロモノソフ氏ハ魯
國人民ノ大學校ハ入り修學スヘキ權利ヲ維持シ建議
シテ曰夫レ大學校ハ貴賤貧富ヲ論セス皆共ニ修學講
習スルノ所ナリト是ニ於テ其公議ニ從ヒ大學校ハ貴
族平民ノ共ニ修學スヘキ所ト定ム是ニ由テ貴族ハ大
學校ニ入ルヲ好マスレテ更ニ貴族學校ニ於テ其子孫
ヲ教育センコトヲ欲セリ
彼得見大帝ノ時世ニ至テ貴族ノ子弟ハ平民ノ子弟ト

賞勳局

賞勳局

共ニ教育ヲ受ケリ又千七百四十四年ノ命令ニ由テ守
兵學校ト數學校トヲ合併シ貴賤貧富ノ子弟ヲ論セス
共ニ修學スルヲ定メリ然レモ亦夙ニ貴族學校ノ設
立アリシヲ知ルヲ見テ其學校ハ女帝安那沃安諾子
那ノ時ニ始マリ尼格來帝ニ至テ其旺盛ヲ極ムルニ至
レリ

正院ニ於テ貴族ノ益ヲ計リ其子弟ノ為ニ特別ノ幼年
兵學校ヲ設ケ其子弟ヲ直ニ陸軍及ヒ徭兵隊ノ士官
トナシ取テ其兵卒ノ役ヲ經ルヲ要セサラシメンヲ
上奏ス而メ此兵學校ハ安那沃安諾子那ノ時ニ成就シ
テ千七百三十一年ニ一ハ氏ノ意見ニ由リ魯國貴族
ノ子弟百五十名^トエストリヤンド及ヒ^トフリヤンド^ト
才貴族ノ子弟五十名合計二百名ノ定員ヲ限リ之ヲ設

立セリ然レモ入校ヲ請願スル者數多ナルカ故ニ速ニ
此定員ヲ増益シ魯國貴族ノ子弟二百三十七名^トフリヤ
ヤンド地方貴族ノ子弟三十二名及ヒ^トエストリヤンド
地方貴族ノ子弟三十九名ニ至レリ小魯西亜ノ貴族ハ
魯國及ヒ^トオストゼイスク地方ノ貴族ト權利同等ナラ
サルカ故ニ其子弟ノ入校ヲ許可セス又千七百五十二
年ニ於テ貴族子弟ノ為ニ海軍學校ヲ創設ス又千七百
五十五年ニ於テ莫斯科府大學校附屬ノ中學ニ校ヲ設
立ス其一校ハ貴族ノ為メ他ノ一校ハ平民ノ為ニ農
民ノ為ニ非ス千七百六十二年女帝悅加埜利那二世貴
族子弟百四十六名ノ為ニ大礮及ヒ築城學校ヲ設ケリ
千七百六十四年聖彼得得兒堡ノ^トウオスクレセンスク寺領
ニ貴族ノ女子ヲメ真良溫柔ノ教育ヲ得セシメンカ為

貴族
力
局

貴族
力
局

ニ女學校ヲ立テリ其後貴族及ヒ平民ノ為ニ此女學校
ヲニカス即チ其貴族ノ學級ヲ分ツテ三室トナシ平民
ノ學級ヲ別ツテ二室トナセリ千七百六十六年ニ於テ
貴族陸軍學校ノ定規ニ曰入校ヲ請願スル子弟貴族々
ル確証ナキ片ハ之ニ入校ヲ禁止スレトウヰーゲリ
氏ノ説ニ曰レハ此陸軍學校ハ貴族ノ甚々信憑スル所
トナリレテ以テ高位貴官ノ者皆競ヒ其子弟ヲシテ之
ニ入學セシメンテ好望セリ千七百六十七年會議ニ
於テ「カレンスク郡貴族代議人」コジユン氏建言レテ曰
此一ノ陸軍學校ヲ以テ足レリトナスバカラス摸斯格
府ニ於テ亦此ノ如キ學校ヲ設立スレト此學校ニ於
テ敍章局ノ證書アルニ非レハ入校ヲ許サス若シ入校
ノ生徒ニメ貴族ノ確證ナキ片ハ速ニ之ヲ退校スレシ

又悦加埜利那二世ノ時ニ貴族社會ハ自費ヲ以テ貴族
學校ヲ諸縣ニ設立セリ即チ千七百七十七年「トウユルマ
ク縣ノ貴族ハ貧困貴族子弟百八十名ノ為ニ同縣ニ學校ヲ
立テリ
貴族ハ其子弟ヲ特別學校ニ於テ教育シ他ノ一般社會
ト教育ヲ異ニセン」ヲ欲シ貴族學校ヲ設立スルニ至
ルノ間摸斯格府大學校ニ其子弟ヲ入ルヲ好マス特ニ
下等學校ニ入ルヲ望マサルヲ益々甚シトス何トナレ
ハ貴族子弟ハ平民ノ子弟ト共ニ同室ニ入り同席ニ列
シ遂ニ其賤惡ノ慣習風儀ニ感染スルヲ畏懼スルニ由
テナリ千八百五年「ムコフスキイ氏」ハ學校改正ノ為
ニ「ハリコフ縣」ノ大學校ノ派遣セラレ貴族ハ其子弟ヲ
メ平民及ヒ農民ノ子弟ト共ニ修學講習セシムルヲ快

トトセス、當時貴族ノ間ニ其妄想臆說紛々トシテ到ル
所ニ行ハルハ起由ヲ辨說シテ曰貴族子弟ハ農民ノ子
弟ト同等ニ修學スルノ風習ニ據リ其子弟遂ニ平民農
民ノ子弟ト交ヲ通シ親ヲ厚シ平民ノ行フ所ヲ行ヒ平
民ノ言フ所ヲ言ヒ貴族子弟ヲ教育スル目的ニ適應セ
サル思慮言行ヲ為スニ至リ其徳ヲ得ル少ナクメ却
テ其徳ヲ失フヲ甚メ大ナルト又同氏癸論シテ曰
中學校ニ於テ貴族ノ為ニ其學室ノ前席ニ特別ノ椅子
ヲ設置ス而シテ農民ハ必ス此學校ニ入ルヲ禁スヘシ
ト其後文部卿ウハロフ氏中學校管内ニ貴族小學校ヲ
創設スル時ニオリチムコフスキイ氏ノ學則ヲ採用シ
貴族生徒ノ為ニ其服制ヲ異ニシ且ツ學室ニ特別ノ櫺
子ヲ設ケ他ノ生徒ト混居セシメズ然レ氏貴族生徒ハ

多分懶惰遊蕩ナリトス
貴族ハ學校ニ於テ他ノ一般社會ト其教育ヲ分離セ
トスルノ勢亟登山垣兒帝一世ニ於テモ亦猶止マズ千
八百一年ニ於テ貴族子弟ノ軍學校ニ入ルヘキ學課ヲ
修ムル為ニ數縣ニ軍小學校ヲ設立セリ尼格來帝ノ治
世ニ至テハ益々其學校分離ノ制立旺盛ニイ千八百三
十年ニ於テ貴族子弟ノ為ニ諸縣ニ軍學校ヲ設ケリ之
ニ準シテ唯貴族ノ女子ノミヲ教導スル女學校ヲモ亦
諸縣ニ創設スルニ至レリ
現今ニ至テモ亦魯國ニ貴顯貴族學校及ヒ貴族學校遺
存スルヲ以テ往時貴顯貴族ハ並貴族ト介界シ並貴族
ハ平民ト介域スルノ要求及ヒ方向ヲ徵スルニ足ルノ
ミニメ此學校ハ一般人民ノ開明進歩ニ方向ヲ異ニメ

賞
勸
局

却ノ土地ヲ再收スル處置ヲナセリ
彼得兒大帝唯魯國貴族ノ義務ヲ尽スヲ望シテ他ノ
フリヤンド及「エストリアンド貴族ヲシテ仕官スルモ
仕官セサルモ其自由ニ任セシム然レモ千七百三十四
年女帝安那沃安諾乎那ノ時初メテ之ヲ確定セシテ以
テ「オストゼイスク貴族ハ其子弟ヲ貴族陸軍學校ニ入ル
ノ權利ヲ得タリ而シテ小魯西亞貴族ハ之ヲ有セス又
概言スレハ「オストゼイスク貴族ノ特權ハ當時魯國貴
族ノ有スル特權ニ超越セリトス即チ若干異邦人ハ「オ
ストゼイスク貴族ノ特權ヲ已レニ公賦スヘキ契約ヲ
得テ魯國ノ屬臣ナラン「ヲ豫望セリ「オストゼイスク
貴族ハ魯國人民中一二ノ者ニ特別ノ尊重ヲ表センガ
為ニ時トシテハ之ヲ其子孫ト共ニ自己ノ貴族社會ニ

算入ス即チ魯國有名ノ「アレキサンドル、ビーゴフ氏
ハ「フリヤンド貴族ヨリ此特別尊榮ノ免許證ヲ得レ
事アリ斯ノ如ク「オストゼイスク貴族ハ其權利ヲ魯國
貴族ノ權利ト異ナレモノトシテ特種ノ一貴族ナリト
自負シ魯國ノ地租及ヒ經界ノ定規ニ從ハス是ニ於テ
千七百六十三年悅加埤利那二世ハ「オストゼイスク地
方ヲ兼併シ其忠義連士ヲシテ魯國貴族ト同等同權ナ
ラシメン「ヲ務メテ其魯國貴族ニ於ケル如ク「オスト
ゼイスク忠義連士ニモ親シク貴顯貴族ノ尊榮ヲ下賜セ
リ又千七百八十三年ニ於テ女帝安那沃安諾乎那曾テ
千七百三十一年ニ一世米邑ヲ世襲系地ニ合併スル為
ニ下セル命令ヲ「オストゼイスク地方ノ「リージスク及
ビ「レウヌ「リススク兩縣ニ擴充ス又其後千七百七十五

年ト千七百八十五年ノ成法ヲモ「オストゼイスク貴族
ニ擴充セリ然レトモ其以前「オストゼイスク地才ノ縣
官ニ魯語ヲ習學スル「ヲ命セリ而レテ曾テ千七百七
十五年置縣管理ノ成法ニ基ツキ千七百八十三年ニ於
テ「リフヤンド「リ「リスク縣ト成レ之ヲ九郡ニ分界
ス又「ユストリヤンド「レ「ユリスク縣トナレ之ヲ五
郡ニ分域セリ其各縣ノ貴族ハ其成法ニ據リ更ニ貴族
首長ヲ撰舉シテ旧來ノ貴族會議ヲ廢止セサル「カ
サルニ至レリ

魯國貴族一覽

第二編

第一章

往時魯國ニ仕官奉職ヲ專領スル一社會アリ之ヲ勤務
社會^{イカラス}廷臣トナス是即チ政府ニ於テ一般人民ヨリ分界
シテ之ニ重任^{ナハシ}ヲ負擔セシムルモノナリ何ヲカ勤務社
會ノ重任ト云フ曰ク國家ニ尽スノ義務ナリ何ヲカ國
家ニ尽スノ義務ト云フ曰ク勤務社會ノ恒ニ為サハル
可テサレノ職分^{ボクキノスナ}ナリ此義務ヲ赦免スルニ方リテ初メ
ハ秩祿^{ニルムレニイ}ヲ以テ給與セシカ後テ采地ヲ以テ分與スルニ
至ル此義務ニ種々ノ性質アリ其任スル所ニ曰テ相異
ナリ即チ將校及公使ノ任ヲ擔當レテ諸方ニ派遣セラ
ル者アリ又裁判官、司膳官、官官或ハ其他種々ノ職務ア

リト雖氏只軍務ヲ以テ其重大ノ義務トナス而ノ勤務
社會中ノ殊ニ委員ナル貴族及縉紳子弟ヲ以テ此軍務
ニ任定スルモノトス然レ氏此軍務ハ拔免常ナクテ
其徵募モ亦時々ナリトス唯遣員及事務ヲ掌トル廷臣
ノミ常職アリ耶ナ裁判官、將校、官官等之ナリ一世地主
又世襲地主タル貴族及縉紳子弟太平無事ノ時ニ於テ
ハ村落ニ住シテ生計ヲ營ミ或ハ商法獵業ヲ事トシ或
ハ訴訟等ニノミ從事シテ將校ノ使兵糧ヲ貯ヘ馬ニ秣
ヒ役ニ赴クヘキ帝命ヲ傳ヘ來ルニアラサレハ平生此
ノ如クニシテ殆シト軍事ヲ顧想スルヘナキカ如シ若
シ使兵ノ來リ報スルアレハ耶ナ鎗筒シタル祖先ノ鐵
衣ヲ穿テ各々家僕ヲ率ヒ軍馬ヲ整ヘ兵器ヲ携ヘテ其
屯營ニ赴ケリ

各都會將校ハ一世地主及世襲地主ニ徵募書ヲ廻達シ
テ年々之ヲ換斯格府徵募局ニ送致ス該局ニ於テハ戰
端ヲ開カントスルニ先テ其徵募書ニ基キテ諸郡ニ閱
檢使ト徵募使トヲ派遣セリ蓋シ閱檢使ハ赴役ノ當否
ヲ閱檢センカ為ニシテ徵募使ハ滿十八年ノ合格ナル
新兵ヲ召集シ之ヲ列伍ニ加ヘシカ為ニセリ此ノ如ク
ニシテ時々間斷ナク貴族及縉紳子弟ヲ徵募シ軍務ニ
就カシメタリ然レ氏ウストリヤロフ氏ノ説ニ曰レハ
彼輩ハ周年概子村落及領地内ニ散布セル家宅ニ住シ
テ唯日用飲食家事生計等ニノミ意ヲ用ヒ更ニ兵事ヲ
顧ミサルカ如シ耶ナ短銃、刀劍等ノ如キハ久シク壁上
ニ掛リ皆ナ鎗筒シテ用ユ可ラス而メ其兵士ナル地主
モ亦々常ニ耒耜ヲ負テ耕耘ニ從事シ或ハ年市ニ出テ

賞
力
局

掌
熏
局

商業ヲ管イリト之ヲ以テ其弊風ノ景状ヲ證徴スルニ
足ルヘシ
彼得見大帝ハ此義務ノ性質ヲ變革シ新兵徵募ヲ以テ
編成スヘキ整軍ニ家僕、兵器、軍馬ヲ率フル所ノ一世地
主及世襲地主ヲ以テ之ニ充テリ而メ其赴役ハ時々ニ
非スシテ常備トナリ唯、老衰及不具ノ者ノミ此赴役ニ
免レモトス而イ勤務社會ニ又特別ノ一職務ナルモ
ノヲ分出ス是即チ文務ナリ又義務アレハ采地アリ采
地アレハ義務アルノ結合ヲ失フニ至レリ即チ彼得見
大帝ニ至ルマテ勤務社會ハ唯采地ノ為ニノミ義務ヲ
為スカ如キモノナリシカ大帝以來ハ初メテ貴族社會
ノ如ク其義務ヲ尽スニ至リ自今俸給表ニ基キテ確定
セシ給料ヲ以テ勤勞ニ報ユルヲ定ム然レ共例外ニ於

賞
勳
局

テハ殖民采地ヲ以テス
貴族ノ一大義務ナル文武兩務ノ外ニ於テ此兩務ニ緊
要ナル一義務アリ是即チ修學ナリ故ニ彼得見大帝ハ貴
頭貴族ノ稱ヲ以テ義務ト開明トノ兩義ヲ合一シタル
モノトナス貴族ハ官務ニ就クベキ者トナリ官務ニ就
クヘキ者ハ必ス開明ナラサル可ラス此官務ト開明ト
ヲ備タルヲ以テ貴頭貴族トナス
彼得見大帝ノ治世ニ於テ官務開明ニ注意スル甚々嚴
密ナルヲ以テ大ニ此法ノ實効ヲ奏ス女帝安那^アナ^ナト
半^ウ那^ナノ治世ニ至リテモ亦タ其実行セシハ女帝ノ輔佐
ミ^ミニ^ニハ^ハ氏^氏ノ治眼アルニ由リシナラン且ツ貴族服役
ノ期限ヲ二十五年ト確定セシモ亦^ミニ^ニハ^ハ氏^氏ノ服役
期限變革ノ^ミニ^ニハ^ハ氏^氏ニ意ヲ用セシ功ニ回リシナル^ミニ^ニハ^ハ氏^氏又成

賞
勳
局

法ノ全集ヲ觀ルニ二世彼得兒帝ノ治世ニ至リ貴族赴
役ノ嚴法漸ク弛緩セシヲ知ル何トナレハ其治世中ニ
貴族少年ノ顯出ト閣檢トニ関スル一ノ命令アレヲ見
サレナリ又女帝悦利撒味ヲ彼得兒子那ノ時ニ至リテ
ハ「シテユルバートフ侯ノ一書ニ徵スルカ如ク彼得兒大
帝ノ制定セシ嚴法弛解シテ役務ノ甚々容易トナリレ
ハ姑ラク之ヲ措キニ三歳ノ孩童ヲシテ隊伍ニ記入レ
有名無実ノ官位ヲ貪リ漸ク成長シ成年ニ至リテ直ニ
大官ニ昇進セシムルノ弊風貴族ノ間ニ行レヲ以テ隊
伍ノ実務ニ入ラス更ニ其何モノナルヲ知ラザルモノ
出ツルニ至レリ又其女帝ノ時ニ於テ模斯格有大學校
創立ノ後テ貴族ハ官務開明ノ併行ヲ要スルノ間ニ頤
頤ノ事情ヲ生セシカ魯國ノ賢才ナル「イワン、イワノウ」

チシワ「セフ」氏ノ之ニ関英セシ功ニ曰テ終ニ開明ノ
利益アルヲ決セリ
前章説ク所ニ曰テ考レハ十七紀ニ於テ貴族及縉紳子
弟ヲ徵募シ之ニ采地ヲ褒賜スル法ノ專ラ行ハレレ時
ニ此ニ入ルニ十八紀上半ニ於テハ貴族ノ都府ニ來集レ
職務ヲ奉スル者最モ多ク而メ各地ニ散居レ土地ヲ占
領スル者最モ少ナキヲ知レナリ彼得兒大帝ハ其國事
登革ノ最初ニ方リ先ツ貴族各自ノ土地占領ノ事ニ最
モ注意セリト雖モ當時兵役止ム時ナク貴族ノ軍務ヲ
要ス且ツ未タ行政ノ題按定マラス又之ヲ定ムルモ政
務章程猶未備ラサルヲ以テ遂ニ其意ヲ果サス然レハ
此際ニ方リ貴族ハ土地ヲ占領レテ村落ニ生活スルヲ
好ミ皆爭テ之ニ心ヲ傾ケリ蓋シ魯人ノ恒ニ都人トナ

賞
功
局

ルヲ好マズシテ田夫トナルヲ好ムハ自然ノ性質ナル
ヲ以テ已レカ義務ヲ遁レ潛匿スル者アリ從テ脱着無
名ノ人ヲ生スル其數ヲ知ラス故ニ之ニ處スルニ嚴罰
ヲ以テスルニ至ル而メ貴族ノ土地ヲ占領スルノ原因
ハ益勤務ニ就クノ原因ヲ壓倒スルニ至レリ彼得見三
世ニ至リ終ニ貴族ノ義務ヲ廢止シテ之ニ無期ノ赦免
ヲ施スシ之ヲシテ各其家ニ歸ラシメタリ女帝悦加^エ堙^テ
利^リ那^ナニ世ハ其赦免歸家ノ貴族ヲ以テ各縣ニ縣貴族社
會ヲ成レ地方裁判及警察ノ事務ニ關與セシメンカ為
ニ其社會中ヨリ委員ヲ撰任セシメタリ斯ノ如クニレ
テ貴族ハ又猶ホ勤務社會ノ性質ヲ成スニ至リ^{ロウ}ユ^エ
ツキイ^イ氏ノ論說ニ據テ遂ニ貴族ヲ陸軍省ヨリ内務省
ニ屬ヲ轉シタリ然リト雖モ非常ノ時ニオリ地方徴兵

賞
勳
局

ノ事アレハ之ヲ徵募スルニ旧法ヲ以テセリ然リ而メ
貴族ハ常ニ一般社會ニ卓越シテ高貴ノ地位ヲ占メ且
ツ國務ニ參與スルノ特權ヲ有スルカ故ニ文武ノ兩務
ニ入ルヲ得タリ
彼得見大帝治世ノ最初ニ於テ勤務社會ヨリ成立シタ
ル貴族社會ハ猶往時ニ於ケルカ如ク國家ニ義務ヲ尽
セリ例ハハ^レエ^ウエ^ド國開戦ノ初年ニ於テ司膳官、宮官
模斯格府貴族、侍童及帝族司膳官ハ兵役ニ堪ユ^キ其
子弟ヲ携^ハテ其役ニ赴ケリ又十七百零六年^ニオ^ス南
義^ノ出征ノ時ニオリテ司膳官、宮官、模斯格府貴族及侍童
ハ^レセ^レメ^テフ^氏及^ホワ^ンス^キイ^氏ノ隊伍ニ編入シテ
其役ニ在^レリ又同年ニ於テ^メシ^コフ^氏ノ^チユ^ル子^ゴ
^フ縣ヨリ贈^リレ^一各ニ^目シ^ハ司膳官、宮官、模斯格府貴

賞
勳
局

族、侍童及ブリヤンユクコロチユンスク兩郡ノ一世地主
及世襲地主ニ命シテスモレンスク地主ノ役ニ赴カシメ
リト云フ降テ千七百十二年土耳其格交戦ノ危急ニ際シ
内廷高官総員ヲシテ其家僕ヲ率井シメテ出役スヘキ
ヲ命シタリ但シ自ラ其役ニ當ルヘキ者ハ家僕五十人
ヨリ甲兵一人ヲ以テシテ而メ自ラ之ニ當ル可ラサル
者ハ五十人ヨリ騎兵一人ト甲兵一人トヲ以テス其翌
年ニ於テハ内廷高官及郡邑貴族及ヒヤロスラフ縣貴
族ヲシテ外敵ヲ防護セシメンカ為ニ各其家僕ノ甲兵ヲ
率ヒテウカライナ地方ニ赴ムクヘキヲ命セリ又此時
ニ於テ他ノ廷臣ヲモ亦バルゴロド地方ノ役ニ赴キ内
閣貴族子プリユユフ氏ノ所ニ至リテ各其赴著セシメテ
達スヘキヲ命セラル降テ千七百三十八年女帝安那奴

豆諾乎那ノ治世ニ至リバシキレスク土耳其格來襲危急
ノ秋ニ臨テカザニスク縣貴族ニ一令ヲ下シ各其家僕
ヲ率ヒテ此役ニ赴ムクベク然レ凡自ラ其役ニ赴ク能
サル者ハ自己ノ甲兵ヲシテ之ニ赴カレムベキヲ命シ
タリ
女帝悦利撒味多彼得見乎那ノ治世ニ至リテモ亦猶此
ノ如キ軍事赴役ノ事跡アルヲ見ル然レ凡是レ唯「スモ
レンスク縣貴族」ノ赴役ナリ即チ其貴族ハ年々五月一
日ヲ以テ程ヲ癸シ諸才ニ赴キ九月ニ至リテ其家ニ歸
ル之ヲ以テ其職務トナスノミ而シテ其勤務ヲ奉スル
者ハ皆各世襲采地ヲ占有スルカ故ニ官府ニ於テ聊カ
之ニ俸禄ヲ支給セサルモノトス千七百五十二年ノ調
集ニ目レハ該縣貴族ハ其総員一千三百二十名餘アリ

賞
功
勳

之ヲ區分シテ四部トナセリ
彼得兒大帝ハ早ク已ニ軍務出役ノ規則ヲ一變シテ更
ニ整軍ノ常務トナサン^トヲ圖レリ殊ニ大帝^ナトシテ
オニ戰セ屢々敗績シタルヲ以テ後ヲ主トシテ貴族軍
務赴役ノ旧法ヲ信用スルヲ止メリ千七百零四年ニ於
テ大帝親シテ貴族少年ヲ閱檢シ其兵役ニ堪ユベキ者
ヲ撰シテ兵卒ニ編入セリ又^{ボヤル}縉紳^チホシニキ^チテテ、ス
ト^レシ子^フ氏ハ其兵卒中ヨリ一千人ヲ撰ミテ一大隊
ヲ編成シ之ヲ^ドウラ^グン^隊ト名ケリ而後テ又該隊ニ
摸擬シテ他ノ^ドラ^グン^隊ヲ編成セリ千七百零四年ノ
閱檢ニ顯出スル貴族少年ハ都テ八千零九十二名アリ
テ其中^ドウラ^グン^隊ニ編入セラル者三千名アレリ又
同年^プレ^ヲブラ^ゼン^スク^隊兵卒ニ編入セラレシ貴族少

年三百七十七名アリ其兵員中^エレ^ツコ^フ氏^シア^ホフ
ス^ク氏^ドル^ゴレ^トコ^フ氏^ガガ^リン^氏等以下数名ノ諸
侯アリ又^アル^ミイ^ウオ^ルイ^シスキ^イ氏^ウシ^アコ^フ氏^等
以下数名ノ往昔貴族アレリ
千七百十一年ニ於テ元老院ヲ創立シ又徵兵召募旧令
ヲ廢棄シテ貴族義務ノ新法ヲ設定シ又義務ニ褒賜ス
ルニ米地ヲ以ラスルノ旧法ヲモ廢止シ同年二月十九
日ヲ以テ更ニ騎兵三十三大隊并ニ歩兵八十五大隊ニ
給兵スルニ俸給表ニ基キテ確定セシ俸給ヲ以テシタ
リ
貴族少年ヲ勤務ニ配置セン^カ為^メニ閱檢ヲ設ケテ或ハ
大帝親シク之ヲ閱檢スルアリ或ハ元老院書記局長或
ハ地方首長之ヲ閱檢スル^トアリテ更ニ定リナク全國

賞
功
局

賞
功
局

貴族ヲ統轄スル所ノ故章局長ノ職務ヲ創設スルニ至
ルマテホタ掌テ其定法ノ記録中ニ存シタルヲ見サル
ナリ而シテ少年貴族頭出ノ期限及閱檢ノ順序及貴族少
年ヲ軍隊ト諸書記局トニ配當スルノ法モ共ニ女帝安
那^ナ沃^ワ亞^ア諾^ノ乎^フ那^ナノ治世ニ至リ初メテ確定スルニ至レリ
或ル令書ニ目テ觀ルニ最初ニ於テハ貴族少年自各ノ
頭出ヲ要セスレテ唯々其少年ノ人員ト年齢トヲ記載
セシモノ、ミテ徵募局ニ送致セシモノナルヲ知ル例
ハハ千七百零四年ニ於ケルカ如シ然レ共時トシテハ
少年ヲ呼召シ大帝親シテ之ヲ閱檢シタルヲアレリ例
ハハ千七百零四年ニ於テ諸郡縣ニ令ヲ下シ少年輩ヲ
シテ自ラ出テ各、大帝陛下ノ閱檢ヲ受ケシムハキヲ命
ジタリ又同年ニ於テ^レブレヲブレゼンスク隊中ノ諸將

校及諸方ニ派遣スハキ者ヲ閱檢スルニオリ徵募局各
訖官^レサミヤトニシ氏ニ命シテ各自ノ姓名ヲ呼召セシ
メテ大帝親シテ之ヲ閱檢シ而シテ後ニ又親シク其名簿
ヲ參觀シテ姓名ノ上部ニ標點ヲ記シテ其當否ヲ示セ
リト云フ^レジユリヤブウジスキイ氏ノ記録ニ詳ナリ^レ元老
院創立以來ハ少年輩ヲ閱檢スルニオリ時トシテハ其
書記局ニ召集シテ之ヲ閱檢セシ^レトアリ談局ニ於テハ
即チ其少年ヲシテ勤務ニ就カシメ或ハ學校ニ入學セ
シメ或ハ其採用スルニ至ルノ間各、其家ニ帰ラシム^レト
キヲ定ム然レ共又時トシテハ少年輩ヲ閱檢スルニ其
家産資力ノ富貧ニ應シテ其閱檢スルキ所ヲ異ニセシ
トアリ即チ一千七百十三年ニ於テハ農夫百三十戸^レ四
人ヲ以テ一戸トス以上ヲ有スル少年ハ聖彼得兒府ニ

貴
力
局

遣シテ之カ閱檢ヲ受クハク而メ其所有ノ農夫百三十
戸ニ過サル者ハ摸斯格有ニ遣ハシ元老院書記局ニ於
テ閱檢ヲ受クバキヲ命レタリ其翌年ニ於テハ農夫百
戸以上ヲ有スル父ハ其少年ヲ聖彼得見府ニ遣シ而メ
共百戸以下ヲ有スル者ハ軍務局ニ出シテ其閱檢ヲ受
クバキモノト定ム聖彼得見府ニ於テ多クハ常ニ大帝
親シク少年輩ヲ閱檢シタリト見ユ水師提督「モルドウ
井」フ氏ノ記録ニ曰ク余甫マテ十二年閱檢ヲ受ケン
カ為メ聖彼得見府ニ在シ時ニ於テハ大帝陛下親シク
余輩ヲ閱檢シ而メ其拜謁セル所ノ貴族少年ト非職貴
族トヲ又親シク取捨シ後時ノ閱檢ニ於テモ亦々此ノ
如クシタリト云フ又「ワシリイ、ワシリウ、井チ、ゴロウ、井チ」氏
ノ一各ニモ亦之ニ均シキ事ヲ見ル「ゴロウ、井チ」氏ノ語ニ

曰レハ一千七百一十二年五月内國ノ貴族幼年輩ハ聖彼
得見府ニ呼召セラレ同月下旬ニ於テ大帝陛下親シク
余輩ヲ閱檢シ之ヲ撰フニ三區分ヲ以テス即チ其稍々
年長ナル者ハ兵卒ト定メラレ中年ナル者ハ航海學修
練ノ為ニ海外和蘭國ニ派遣スルモノト定メラレ余モ
亦何ノ罪アリテカ不幸ニシテ其遣員中ニ加入セラレ
タリ而メ又其最モ幼少ナル者ハ修學ノ為ニ「レ」ウエリ
都ニ遣出セラレタリト云フ「パカルスキイ」氏著書第一
編百四十二葉ニ詳細ナリ
一千七百二十一年ニオテ西伯里及「アスタラ」ハニ縣ヲ
除クノ他凡テ内廷高官貴族非職士官ヲシテ聖彼得見
府若クハ摸斯格有ノ閱檢ニ應シ出府ス「キ」ノ嚴令ヲ
屢々公布シタリ之カ為ニ諸郡最寄ニ回リニ郡ヲ併合

賞
力
局

シ貴族ヲ甲乙兩部ニ分テ相互ニ交番シテ其閱換ニ應
セシム甲部交番ハ一千七百二十一年十二月ニ於テ必
ス閱換ヲ受クルニ出ツバク乙部交番ハ其翌年三月ニ
於テ必ス出ツバキモノトス而レテ甲部交番不在中ノ
事務ハ乙部交番ノ貴族之ヲ司ル而後乙部之ニ交代シ
テ閱換ニ出ツ又其不在中ノ事務ハ歸郡甲部ノ貴族之
ヲ管理スルモノトセシム又内廷高官郡邑貴族及在官
非役士官ノ名簿ハステバン、コレイチエフ氏ニ任レテ之
ヲ司ラシメ肝要ノ適宜ニ應シ此名簿ヲ參觀シテ其事
務ニ配當セシム又コレイチエフ氏ヲシテ非職貴族及自
巴ノ村落ニ安居センヲ欲シテ勤務ヲ適レ潛匿スル
貴族ヲ監察セシメンカ為ニ模斯格府ニ遣シ而メ又模
斯格府アゾトフスモレシクキイフスクアルハンダ

ロゴウロドスク諸縣ノ貴族ヲ撰任シ或ハ事務ニ配置
セシメンコトヲ命セリ又同氏ハ其任所ナル他ノニシ
ニイ及カサニ兩郡ノ貴族ヲシテ新年ニ模斯格府若ク
ハ聖彼得見府ニ出府用意ヲナサシメンカ為ニ豫メ公
告シテ而後同氏自ラ之ニ赴クカ或ハ委員ヲ派出シ
テ貴族ヲ監察シ或ハ細察ニ記名スルヲ要セリ其翌年
ニ至リコレイチエフ氏ハ更ニ改章局長ニ任セラレ之ニ
曰テ貴族ノ義務ト修學トノ法此ニ於テ全ク定マリ貴
族ノ統轄ハ專ラ改章局長ノ手ニ在リ恰モ往時ノラズ
リヤド局カ勤務社會ヲ統轄セルカ如シ其職務タルヤ
余輩ノ説明スルカ如ク恒ニ貴族人員ノ精算ヲ請知セ
サル可ラス故ニ改章局長ハ自ラ名簿ヲ公布シテ貴族
人員ノ精算ヲ得ルモノナリ又貴族ヲレテ文務民事

貴族
力
局

賞
勳
局

濟ノ事ヲ修學セシムルノ最モ緊要ニイ上等貴族及中
等貴族ノ子弟ヲシテ文務民事及經濟ノ事ヲ修學セシ
メシカ為メニ假學校ヲ設立セサル可ラサルニ至レリ
何トナレハ此時ニ至ルマテホタ全ク所謂民事ノ習學
具ラズシテ殊ニ經濟ノ學ニ至リテハ更ニ何等ノ形跡
ナキヲ以テナリ而メ敎章局長ハ貴族各氏ヨリ文務ニ
入學スル者三人ニ過キサラシメ海陸軍員ノ減却セン
ヲ恐レ浮言ヲ流傳シテ潛匿遁逃スル者ヲ懲戒シ命
ニ從サル者ハ必ス國罰或ハ天罰ヲ蒙リテ死スバレト
云ヒ或ハ貴族ノ小事ニ係リ都會坊市ニ潛匿スル者ヲ
銳意ニ監察セサル可ラス而メ又元老院ニ於テ民事ノ
何等ヲモ問ハズ貴族ヲ採用セントスルハ則テ敎章
局長貴族ヲ元老院ニ出タシ而メ後ナ元老院ノ任スル

所ニ從テ之ヲ遣出スルヲ要ス一十七百三十五年ニ才
テハ貴族ヲ軍官ニ出スニ更ニ本人ヲ派出セシテ唯
々其姓名ノミヲ敎章局長ニ申達スバキヲ定ム若シ又
一々ヒ事務ニ任ジタル貴族ヲ退免セントスルハ議
院長書記局縣令及將校ハ必ス先ツ敎章局長ニ通知レ
テ之ニ其貴族ヲ返還スルヲ要ス若シ通知セサル寸ハ
其貴族ハ徒ラニ以前ノ事務ヲバカ司掌トナレ陰ニ安
ヲ偷ミテ自己ノ家ニ潛匿スルノ弊アルヲ以テナリ又
議院或ハ各縣或ハ地方軍營ニ於テ貴族ヲ採用レテ職
務ニ任セントスルハ先ツ其貴族ヲ撰舉シ其事由ヲ
元老院ニ上申シテ其許可ヲ得ルニ非ラサレハ之ヲ採
用スル能ス而メ又職務委員中ニ欠員アル諸局ニ於テ
貴族進士ヲ自テ命スル能サル時ニ於テハ之ヲ元老院

賞
勳
局

ニ上申ス可シ然ルハ該院ヲテ紋章局長ニ命ジテ貴族進士ヲ撰ミ其久員ヲ補ハシム是ヨリ前一千七百十四年各縣ニ於テ非職ノ内廷高官ヲ事務ニ配當スルニ元老院書記局ノ許可ヲ得サレハ之ヲ配當スル能ワスレテ元老院ヨリ之ヲ採用スルモノト定ム(二千七百七十号)紋章局長ハ唯下官職務ノ糧食司官ノ如キモノノミ元老院ニ上申セス自主ノ權ヲ以テ決斷スルヲ得タリ蓋シ是レ千七百二十五年ニ於テ已ニ紋章局長職務ヲ法發行ノ後制定スル所ナリ

彼得兒大帝ノ治世ニ於テハ貴族及少年輩閣檢ノ招令屢々公布セラレタリト雖モ大帝殂落ノ後チ一千七百三十二年ニ至レバ殆ント此令アルトナク同年ニ至リ初メテ全國貴族ノ子弟及士官ノ子弟十五年以上ノ

賞勳局

者又上長官上等士官下等士官ヲシテ同年六月元老院ニ於テスル紋章局長ノ閣檢ヲ受クルニ出テサル可クナルヲ公布シタリ次テ無産ノ少年輩ヲ聖彼得兒府ノ閣檢ニ遣出セスエテ直ニ其住所近傍ノ軍隊ニ編入スヘク而シテ彼得兒府ニ於テハ少年輩ヲカビ子ツトニ召集シテ閣檢スヘキヲ命ジタリ然レハ貴族少年ハ千七百三十二年三月三日ヲ以テ公布シタル詔令(無産貴族)現府ノ閣檢ニ出スヲ願ニス唯々無産ニシテ乘輿旅行ノ資金無キ者ノミナラス脚步旅行ノ資金ナキ者ト雖モ亦依然トシテ陸續彼得兒府ニ出府スルヲ以テ聖一千七百三十三年ニ於テ更ニ令ヲ下シ唯々少年ノ農夫二十人以上ヲ有スル者ノミ聖彼得兒府ニ出テ閣檢ヲ受クヘク其所役農夫ノ二十人以上ナル者ハ住所近傍

賞勳局

軍隊ニ編入スヘキヲ命シタリ

一千七百三十六年十二月三十一日ノ詔書ノ翌年ノ詔書明解各トヲ以テ貴族少年閱檢ノ顯出又官仕ノ法及満期免役ノ法全ク定メラル十二月三十一日ノ詔書ハ貴族ヲシテ其家屋ト村落トヲ善ク治理セシメニカ為ナリ即テ其詔書ヲ左ニ掲載ス

第一條數男アル者ハ其一人ヲ家ニ留メテ其家産ヲ司ラシムルヲ得ヘク兄弟數人アル者モ亦タ同ク一人ヲ家ニ留メテ主計ヲ管マシムルヲ得ヘシ然レモ其家ニ留マル者ハ文務ニ任セシカ為ニ文學ヲ修メサル可ク
第二條其他ノ數男兄弟二十年ニ至レハ服役二十五年ノ軍務ニ入ルヘク而シテ其服役年期ノ終ル後テ若シ其

役ヲ永續スルヲ好マサル時ハ官位一尋ノ昇進ヲ得テ
退役スルノ権利ヲ得ヘシ

第三條其家ニ留マル者ト定規ノ年限ヲ経テ退役スル者已レニ代フルノ新兵ヲ立ツヘシ但シ農夫百人以下

ヲ役使スル者ハ一人ノ定メ一人ヲ増ス毎ニ一人ツ
ハヲ加増スヘキモノリ定ハ少年閱檢ニ出ツルノ定期

ヲ示サシカ為ニ即テ次章ニ掲ク

第一條凡ソ貴族少年七年ニ至レハ聖彼得堡府ニ於テ

ハ該章局長ニ參謁シテ其名簿ニ記入セラレヘク而シ
模斯格府及諸縣ニ於テハ縣令ノ前ニ出テ名簿ニ記入
セラレヘシ但シ此名簿ハ年々ノ末ニ至リテ該章局長
ニ送致スルヲ要スルナリ

第二條其少年十二年ニ及テ第二閱檢ヲ受クルニ

賞勳局

出ツヘシ但シ讀書習字ヲ諸知セサル可ラサルモノト
ス此處換ヲ経テ後ヲ其少年ノ父兄若クハ親戚若シ其
少年ヲシテ自宅ニ於テ修学セシメニテ願フ時ハ後
来ノ閱検ヲ受ルニ至ルマテ必ス之ニ サキボリイ 神教法、算学、測量
学ヲ講習セシメザル可ラス而シテ外国語学ハ其自由ニ
任スヘキモノトス然レバ其父兄親戚ハ農夫ヲ有スル
百人ニ下サルカ或ハ又小領地ヲ有スル者ニシテ其以
年ニ修学セシメカ為ニ判然タル方法ヲ辨明シ得ル
者ノニ之ヲ許ス若シ然サル時ニ於テハ其少年ヲ家ニ
帰ラシメスニシテ直ニ学校ニ入学セシムルモノトス
第三條少年十六年ニ至ル時ハ唯々聖彼得見所及換所
格所兩所ニ於テ新ニ閱検ヲ受クルニ出ツヘシ改章局
ニ於テハ之ヲ元老院或ハ其會計局ニ出タス而シテ若シ

修学セハ所ノ算学、測量学ヲ詳ニ諸知セルト認ル時
ハ父母ノ諸願ニ從テ其二十年ニ至ルマテ必ス築城学
地理学、算学、歴史学等ヲ修学セシムヘキ契約ヲ以テ其
家ニ帰ルヲ得タリ若シ又其父母自宅ニ於テ尚之ニ修
学セシムルヲ願ハス或ハ其方法ヲ有セサル時ハ十六
年ノ幼年ヲ大ニ学校ニ入学スルヲ定ム然レバ若シ其以
年此第三閱検ヲ経テ算術、測量学ヲ習熟セサルト認ム
ル時ハ派令其家ニ留テ家産ヲ司ル者ト離モ之ヲ除去
スルヲナク服役無期ノ水夫トナスヘキモノトス
第四條其少年二十年ナルニ及テ更ニ聖彼得見所換所
格所兩所ノ改章局ニ出テ閱検ヲ受クヘシ蓋シ該局ハ
其少年ヲ軍務ニ配置シ或ハ學術ノ他ニ卓越スル者ヲ
官位ニ登庸スル所ナリ

賞
勳
局

第五條 閱換ニ出テ除キセラレ少年ハ其年某閱換ニ再
ニ出ツヘキヲ記載スル証書ヲ受テ又十六年ニシテ第
三閱換ヲ受ル時其父母其數男ノ中其一男ヲ家ニ留メ
テ家産ヲ司ラシムヘキヲ上申スレハ其家ニ留マレ
者モ又タ証書ヲ受テ但シ其書中一男ノ某ハ家産生
計ヲ管ル為メ及ヒ家産ヲ司ルカ為メ家ニ留マレ
ヘキ更テ記載セルモノナリ

一千七百三十六年ノ詔書ハ貴族社會ノ為ニ重大ナル
寛易トナレリ即チ貴族終世ノ服役ヲ廢シテ更ニ二十
五年ト決シ又貴族眷属ノ一人ヲノ家産ヲ司ラシメシ
カ為メ家ニ留ムヘキモノト定ム加之閱換ノ為ニ期限
ヲ設ケテ其主意ヲ定ム即チ少年ノ閱換ニ應スヘキ時
ヲ四期トナシ七年十二年及十六年ノ第三初期ハ試験

ノ主意ニシテ二十年ノ末期ハ勤務ニ配置スルノ主意トナ
ス而シテ此詔書ハ土耳其格戰爭ヲ終ルニ及テ普ク成就セシ
テテ預定セラレタリト雖モ一千七百四十年ニ至ルマ
テ漸クニテ實行セラレシ此年ニ於テ勢大ニ行ハルニ從
テ其數個ノ條ヲ補充改正シタリ即チ服役ニ十五年ニ
シテ退役スル者其家ニ於テハ生計ヲ管ルニ家内第一
ノ權利ヲ有スルモノト定ム而シテ滿期退役スル者ハ次章
ノ順序ヲ以テ已レシ代ルノ新兵ヲ立テサル可ラス即
チ農夫七十人以上百人以下ヲ有スル者新兵一人ヲ出シ
テ其欠負ヲ補フヘク五十人以上七十人以下ヲ有スル
者ハ三十圓ノ金貨ヲ以テ償フヘク三十人以上五十人
以下ヲ有スル者ハ二十圓ヲ以テス而シテ二十人以下ヲ有
スル者ハ何等ノ償納ヲ出ササルモノトス

女帝悦^{エウ}撤^ウ味^ウ多^ウ制定ノ一令ヲ見ルニ一千七百三十六年
ハ及其翌年^一ノ二令ハ廢棄セラレ而シテ新兵徵募ノ支
ハ一千七百四十一年ノ令書二十三ヶ條ヲ以テ定メラ
ル即チ總テ幼年貴族十七年ヨリ軍隊付^イ諸將官ニ出ツ
ヘシ而シテ聖彼得兒府^ウ換斯格^ウ府^ウ兩府ニ於テハ軍務ニ合格
ナル者ヲ配當スル所ノ陸軍省會計局^ウ又^ウ紋章局^ウニ出ツ
ヘキモノトス此時ニ方リ役務ヲ負フ可カラサル幼年
ヲ軍務ニ配當スルノ弊風ヲ來メニ至リ其記入セハ幼
年ハ再ヒ放タレテ家ニ歸リ成年ニ至ルマテ其家ニ住
シ此際ニ在リテ其勤務ヲ兼入シ官位ヲ昇進スルヲ得
タリ是ニ於テ女帝悦^{エウ}利撤^ウ味^ウ多^ウ波得兒^ウ那^ウハ彼得兒大
帝ノ制定セル令書ノ勢ヲ再渡シ若シ此令ニ背ク者ア
レハ幼年貴族ヲ水吏トテシ老年貴族ヲ殖民ノ爲メトテ

レヒテ^ウル^ウニ^ウ駁論スヘキモノトナス一千七百四十
九年ニ於テ文武兩務ノ非職貴族ヲ速ニ紋章局ニ遣出
シ之ヲ元老院ニ出シテ勤務ニ任定メヘキモノトス
余輩既ニ貴族及貴族幼年ノ閱換法ヲ論述シタリ其閱
換ノ法アルヤ政府ニ於テ貴族義務ノ勤惰ヲ監察スル
ノ便宜ヲ増セリ即チ其義務ニ三種アリ曰ク文務曰ク
武務曰ク修学ナリ
又余輩既ニ彼得兒大帝ニ至ルマテ軍務ヲ一世地主ト
世襲地主トニ任當レテ其初ノ之ヲ進退スルニ常ナカ
リシカ後ニ至リ其服役二十五年ニ定マリタルヲ論述
シタリ而シテ大帝ノ治世ニ於テハ貴族ヲシテ文務ニ
近接セシメンコトヲ昂メリ
彼得兒大帝ノ治世ニ方リテハ貴族ヲ軍務ニ就カシム

賞
功
勳

ルニ甚ク幼年ノ時ヨリモテ常ニ十五年ヨリ始ム而シテ
其就カシムルニ必ス並兵卒ヨリ始ムルモノトセシカ
時ニシテ其首長タルモノハ巴ノ同族ニ利シ便宜ヲ興
ヘシカ爲ニ其幼年ニシテ且ツ下官ヲ勤メス或ハ之ヲ
勤ムルモ亦甚ク暫時ニシテ兵卒役務ノ基ヲ知ナルモ
ノト魚氏之ヲ士官ニ昇登スルノ弊アルヲ以テ一十七
百十四年ニ於テ更ニ令ヲ下シ近衛隊ニ入り兵卒ノ役
ヲ勤メ終ラサル貴族ヨリ直ニ士官ニ登用スルヲ嚴禁
シ一十七百十九年ニ至リテモ亦タ再々此令ヲ公布セ
リ彼得兒大帝ノ遺志ハ「イワン、イワノウヂ、シワロフ
氏ノ元老院ニ建議セシ如ク近衛兵学校ヲ設立シ入隊
ノ幼年貴族ヲシテ修学セシムルニ在リ然レ氏其後女
帝安那列屋授利土子那ノ治世ニ至リ法ヲ一変シ又シ

賞
勳
勳

女帝エリサウエツクベトロウナノ治世ニ至リテ法則
大ニ変シテ貴族ハ其子弟ヲ直ニカブラテ下士官
古称下士官
官下士官長トシ隊中ニ編入シ而後成年ニ至ルマテ
之ヲ已メ膝下ニ養育スルノ弊ヲ来シ而シテ入隊ノ時
日ハ其編入ノ日ヨリ算シ又官位昇登モ此日ヲ以テ始
ムルニ至ルユシゲリガールト氏ノ記録ヲ見ルニアレ
テブラジエシス隊中ニ下士官ヲ算スル百余人ヲ以テ
ス而シテ少年トナリ其隊中ニ在ルモノ一人ヲ見スト女
帝悅利撒味多二世ノ時ニ及シテ其弊習大ニ行ハルニ至
リ有名ナルパイロバコフ氏ノ一子ハ甫ッテ二年近衛
隊中ニ編入セラレ九年ニ至ラ士官ニ昇進セラルト云
フ、エシゲリガールト氏ノ語ニ曰ク余南ノテ十三陸軍
裁判官ニ登用セラレタリト又女帝悅利加得利那二世ノ

賞
勳
勳

前ト虫氏痛此ノ如キ教例ヲ見ル即チ一千七百三十六年ニ於テ「エロプキ」氏ハ十三年ニメ士官トナレリト又「ルミヤ」氏ハ「ガドナイヌ」氏ハ一千七百三十一年ニ方リ生レテ六年兵卒ニ編入セラレタリト云フウヤズニ「ナノ」氏モ亦幼ニメ或ル軍隊ニ編入ニ遂ニ陸軍御トナレリト云フ是ヲ以テ之ヲ見レハ「エ」ゲリガル「ル」氏ノ澄澈セシカ如ク「巴」維「兒」第一世ハ近衛入隊ノ貴族ヲ呼ビテ「素養」ト称シタルハ又怪シクハ足ラヌ波得兒大帝ノ沿世ニ於テハ未タ嘗テ此ノ如キモノアルヲ見サルナリ即チ諸侯「シヤホ」フスキ「ル」氏ノ語ニ曰ク余伯父ニ向ヒ我己ニ十四年ナリト語りニヤ伯父我ヲ携テ近衛「マ」ノ「フ」ス「ル」隊ニ入ラシメタリ而シテ該隊ハ勤務時限ノ短長ニ依テ兵卒アリ下士官、下士官又下士官長アリ然レドモ幾多ノ幼年貴族一タニ入隊スルノ後自巳ノ家ニ住スルヲナシ余ハ既ニ入隊シ士官ノ名目ヲ負ヒ實ニ隊伍ノ順序ヲ遂テ其ノ役務ヲ經タリト「ハ」ル「フ」ゴ「リ」ツ「氏」ノ日記ニ曰ク一千七百二十一年ニオテ「プ」レ「ア」ブ「ラ」ゼ「ン」スキ「イ」セ「メ」ノ「フ」スキ「イ」兩隊ノ並兵卒ニ入ルモノ多クハ貴族及諸侯ヨリ出ツ而シテ並兵卒ノ義務ヲ実行シ並兵卒ト共ニ給料ヲ賜リ又之ト共ニ其役務ヲ同フセリト即チ諸侯「ゴ」リ「ツ」イン「氏」ハ並兵卒ト共ニ伯位「ガ」ラ「フ」ゴ「ル」シ「ナ」ン家ノ警護トシテ其番兵員中ニ在レリト又太政大臣兼外務卿ノ一子「ゴ」ロ「ウ」イン「氏」ハ曾テ海外ニ遊學シテ國內開明ノ一人ト称セラレ而シテ本國ニ歸ル後チ海軍下士官トナリ海軍隊中ニ入レリト又「ロ」ル「ド」ウ「エ」ツ「ト」ウ「オ」ル「ド」氏ノ説ニ曰ク「メ」ン「シ」コ「フ」指

士官長アリ然レドモ幾多ノ幼年貴族一タニ入隊スルノ後自巳ノ家ニ住スルヲナシ余ハ既ニ入隊シ士官ノ名目ヲ負ヒ實ニ隊伍ノ順序ヲ遂テ其ノ役務ヲ經タリト「ハ」ル「フ」ゴ「リ」ツ「氏」ノ日記ニ曰ク一千七百二十一年ニオテ「プ」レ「ア」ブ「ラ」ゼ「ン」スキ「イ」セ「メ」ノ「フ」スキ「イ」兩隊ノ並兵卒ニ入ルモノ多クハ貴族及諸侯ヨリ出ツ而シテ並兵卒ノ義務ヲ実行シ並兵卒ト共ニ給料ヲ賜リ又之ト共ニ其役務ヲ同フセリト即チ諸侯「ゴ」リ「ツ」イン「氏」ハ並兵卒ト共ニ伯位「ガ」ラ「フ」ゴ「ル」シ「ナ」ン家ノ警護トシテ其番兵員中ニ在レリト又太政大臣兼外務卿ノ一子「ゴ」ロ「ウ」イン「氏」ハ曾テ海外ニ遊學シテ國內開明ノ一人ト称セラレ而シテ本國ニ歸ル後チ海軍下士官トナリ海軍隊中ニ入レリト又「ロ」ル「ド」ウ「エ」ツ「ト」ウ「オ」ル「ド」氏ノ説ニ曰ク「メ」ン「シ」コ「フ」指

揮スル処ノ「ドウラグ」隊中ニ並兵卒トナリ入役スル
諸侯三百名ナリト而メ其後ニ至リ唯々富豪貴族ノミ
各自ノ采邑地内ニ在リテ下官ヲ經ルノ特權ヲ有シタ
リト或ハ貧困貴族ニ至ツテハ一々入隊スレハ兵卒
ノ重務ヲ負ヒ區々トシテ生活ヲ送過セリ例ハ「テ
シアウキン」氏ノ如キハ「ブレラ」ブラジエンスク隊ノ並兵卒ト
ナリ數百ノ新兵ト共ニ其屯營ニ寢食シテ又之ト共ニ
溝渠ヲ浚清シ兵糧ヲ運搬シ或ハ使兵トナリ諸才ニ奔
走シテ士官ニ報書ヲ送ル等ノ働作ヲ同セリト云フ兵
卒ノ役務タルヤ其辛苦實ニ貧民ト相異ナルヲナシ殊
ニ貴族ハ其生出ノ至貴至重ナルヲ回顧スル故ニ愈々益々
其役務ノ困苦ヲ増スニ至レリ此ニ於テ内閣ノ議ハ專
ラ貴族ニ便宜ヲ與ヘ之ヲ兵卒及其他卑官ニ推任セズ

更ニ生徒ノ數隊ヲ編成シ該隊ヨリ直ニ上等士官ニ登
用スルノ目的ニ在レリ然レハ陸軍生徒學校ノ設立ヲ
以テ充テシ此目的ヲ達スル能サルナリ何トナレハ該
校ハ入学生徒ノ定員アルヲ以テナリ故ニ許多ノ貴族
ハ舊日ニ依テ兵卒ニ入ルヲ免レス而シテ次章ニ論及セ
ルカ如ク後來貴族勤務ノ特權大ニ行ハルヲ以テ終
ニ其兵卒トナルヲ廢止スルニ至ル
最初彼得兒大帝ノ計畫スル所ニ曰レハ貴族ハ必ス近
衛兵ニ入隊シ其學校ニ入学シテ士官ニ昇進スルノ階
梯タル軍法及近衛隊務ヲ講習セサル可ラサレナリ故
ニ魯國第一ノフレラジエンスキイ「セノ」ノフス
キ「イ」兩隊ハ貴族中ヨリ編制シタル並兵卒ナリ然レ而
シテ最初近衛隊ニ入ル者甚々寡少ナリシカ漸々増員シ

賞
勳
局

テ遂ニ在勤ノ者モ猶速ニ解散スルニ至レリ此ニ於テ
一五ノ疑問ヲ生シタリ曰ク貴族ノ誰ヲシテ近衛隊ニ
入ラシムルカ又誰ヲシテ陸軍隊ニ入ラシムル乎ト此
疑問ヲ決定セシカ爲ニ一千七百二十一年ニ於テ更ニ
法ヲ設ケ唯貴顯貴族ノニ近衛隊ニ入レ他ノ貴族ハ別
ノ諸隊ニ入ルヲ定ム然レモ已ニシテ又疑問ヲ生シ
首長ニ迫リテ曰ク如何ナル者ヲ以テ貴顯貴族ト称ス
ル乎ト長首大ニ其疑問ヲ漸決スルモ苦ニ一千七百二
十四年大帝ニ上奏シテ曰ク貴顯貴族ト称スルハ農夫
百戸以上ヲ有スル貴族ヲ以テスル乎或ハ又官位等表
ニ曰テ称スル者乎ト彼得兒大帝英断ヲ以テ之ニ對テ
曰ク貴顯貴族ト称スル者ハ別ケ其任ニ堪ユベキ者ヲ
以テスト已ニシテ又疑問ヲ生セリ曰ク大帝ハ近衛隊

ニ入ル、何ヲ以テ其任ニ堪ユルトス乎曰ク品行ノ正
シキヲ以テスル乎将タ爾相ナルヲ以テスル乎或ハ体
力強ハナルヲ以テスル乎或ハ軀幹長大ナルヲ以テス
ル乎ト顧フニ是レ長軀強カナルモノヲ以テシタルナ
ラン何トナレハ彼得兒大帝ノ治世ニ於テハ容良美麤
ニソ体力強ハ且ツ軀幹長大ナルモノヲ採用シテ近衛
隊ニ入ラシムタルヲ以テナリ然レモ後ニ至リテ貴族
ハ其家産資力ノ貧富ニ應ジテ近衛隊ニ入ルハ自他ノ
諸隊ニ入ルヲ分定セラレ即チ農夫二十人以下ヲ有
スル貴族ハ陸軍隊ト戎兵隊トニ入ルヘキモノト定メ
リ然レモ其後ニ至リ又身体ノ合格不合格ヲ以テ分
定セリ即チ一千七百四十一年ニ於テ長軀ニシテ且ツ体
格容良ノ全備セハ若ク近衛隊ニ入ラシメノ軀幹短矮ナ

賞
力
局

ル者ヲ屯田兵ニ入ルヲ定ム又貴族ヲシテ全ク戍兵ニ
入ラシメナルモノト定ム然レ氏其後ニ至リテ猶ホ貴
族子弟ノ戍兵ニ入隊スルモノアルヲ以テ女帝悦利撒
味多彼得見半那ノ治世ニ至リ嚴ニ此法ヲ実行セシム
彼得兒大帝ハ貴族ヲ海陸西軍ニ分定スルニ西軍ノ兵
員ヲシテ同數ナラシメシトニ意ヲ用ヒタリ余輩既ニ
聊視セル如ク紋章局長ハ海陸西軍ニ入ルベキ者ヲ減
少セサラシカ爲ニ貴族ノ各氏ヨリ文務ニ入ル者三人
ニ過キサラシメシトニ注意スルヲ以テ最モ切要ナリ
トセリ水師提督「モルドウエノ」氏ノ記中第九條ヲ見ル
ニ一千七百十六年ニ於テ大帝親シク少年ノ閲檢シテ
後テ其四十名ヲ撰シテ海軍下士官ニ編入シタリト云
フ然レ氏彼得兒大帝及女帝悦利撒味多彼得見半那一世ノ後テニ

至リテ貴族ノ子弟ヲ海軍兵役ニ分定スルヲナケリシ
ヲ見ル貴族子弟ハ唯テ陸軍生徒学校大砲学校築城学
校學術学校ニシテ好テ入学シ海軍学校ニ入学スル者
殆シトアルヲ要キヲ以テ海軍学校ニ於テ上申シテ曰
ク該校ノ生徒甚ク少クシテ海軍兵役ニ入ルヘキ者十
ニト此ニ於テ女帝悦利撒味多彼得見半那一千七百四
十二年ニ於テ更ニ海陸西軍ノ人員ヲ同數ナラシムル
ノ法ヲ再興セシトニ著眼ヒタリト然レ氏一千七百五
十七年ニ至リテモ猶ホ大判官「トルベ」イッコシ氏元老
院ニ建言セルヲアリ曰ク貴族ノ子弟少年ハ陸軍生徒
学校ニシテ入学スルヲ以テ海軍学校ノ生徒ハ全ク定
員ヲナスヲ能ハスレ故ニ元老院ニ於テ少年ヲ同數ニ
分テテ海陸西軍ニ分入マシメリ

凡ソ軍務ニ入ル者ハ海陸ヲ論セス一千七百三十七年
ニ於テ服役二十五年ノ定法國內ニ公行スルニ至ルマ
テ常ニ免役スルヲテ唯々老衰或ハ傷痍或ハ瘵疾カ
ルニ非レハ終世其役ニ在リテ在役ノ貴族ハ傍ラ地主
ヲ兼ネタリ何トテレハ派令時限アリテ其家ニ歸ルモ
ノト雖モ家復生管ノ如何ヲ省ミサル可ラス故ニ時々
放タルテ其家ニ歸ルヲ歸省ト稱ヘ一千七百二十一年
ニ於テ貴族ヨリ徴召セム下士官及並兵卒ノ歸省ヲ願
フ時ハ其代人ヲ入レ半年間ノ休暇ヲ與ヘ放テ其家ニ
歸ラシムルモト定メ彼得見大帝ノ治世ニ至ルマテ
一世地主及世襲地主ノ軍務ニ出ルニ代人ヲ出スノ法
大ニ行ハレタリキ而シテ又貴族並兵卒其隊中ノ働
作ヲ止メレトテ願フキハ其所役農夫ヨリ隊中擔當ノ

課務ヲ能クシ得ヘキ代人ヲ撰テ出スヘキヲ定メラル
又一千七百二十四年ニ於テ海軍兩軍ノ兵員ヲ其家ニ
歸ラシムルノ法ヲ設ケリ曰ク陸軍ハ例年其全兵員ノ
半ヲ家ニ歸ラシメ海軍ハ三年ニ一回トナス即チ其二
年ハ隊中ニ消光シ其第三年ヲハ自己ノ村落ニ居住ス
ルモノト定メタリ一千七百二十七年ニ於テ貴族ヨリ
入役ニタル士官及下士官及並兵卒ノ二分部ヲ放テ各
自ノ村落ニ歸ラシメ其村落ノ体裁ヲ巡見理整セシメ
シカニ為ナリトナス第二世彼得見帝ノ治世一千七百二
十九年ニ於テ年々其三分一ヲ放テ家ニ歸ラシムルモ
ノトス又女帝安娜妖巫諾子那ノ治世一千七百三十二
年ニ於テハ年々一月二月ノ西月ノニ近衛隊ノ三分一
ヲ歸家セシメ其他ノ教員ハ決シテ之ヲ許サズルヲ

賞
勅
局

定ハ又女帝悦利撒味多彼得兒乎耶ハ一千七百四十三
年四月一日ヲ以テ海陸兩軍ノ士官及並兵卒ノ三分一
ヲ年々放免歸家セシムルヲ定ムル並氏病ハ快ナリト
セスレテ此際ニ方リ皆相語テ曰ク休息ノ時日長短ノ
期限アルコセヨ第一召命アルハ必ス之ニ應セサル
可クスト又千七百五十八年ニ至リ鄂令ト將官ハ令
シテ休息ノ為ニ軍務ヲ放免スル時ニ臨ミ如何ナル重
大ノ更改アリトモ之ニ拘ラス頃刻ノ猶豫ナク速ニ隊
ヲ除セシムルヲ定ム貴族ハ一大義務ナル軍務ノ外ニ
又文務ヲモ奉職ニタリ然レ氏彼得兒大帝以前文務ハ
其勢ヲ得スレテ魯國ニホク文官アラス唯武官ノミ
アリタリ彼得兒大帝ノ治世ニ至リ初テ軍務ヨリ一種特
別ノ文務ヲ分出スルニ至リ然レ氏此経験ハ已ニ飛

實
錄
卷
之
三

猶兒亞歷設味帝ノ治世ニ始マルモノト云フ吾人最初
ニ於テ文務成法ニ注意着眼セハ一子相續令書ノ追加
ナル一千七百十四年ノ一令中ニ認ルルヲ得ヘク且ツ
此時ニ至ルマテ彼得兒大帝ノ勅令中ニモ亦文務ノ主
意アルヲ視ルヲ得ヘク或ハ内國諸法則定ノ時ニ於テ
昔時ハ唯武官タリニ貴族ヲ文官トナシタル文官ノ官
位等表ヲモ認メ得ヘキヲ信スルナリ(官位等表ハ一千
七百三十六年ノ勅令七千四百四十二号ニ記載スル所ナ
リ)
彼得兒大帝以前ニ於テ貴族ハ唯一ノ軍務ヲ勤ムルヲ
以テ真ノ國務トナシ文務ヲ勤ムルヲ以テ唯時々ノ支
務ヤリト輕視ミタルヲ再ヒ此ニ説カントス曰ク劍鎗
ノ職務ヲ以テ筆硯ノ職務ニ比スレハ最モ貴重ナリト

實
錄
卷
之
三

見做し又貴族ハ書記官ニ入ルヲ以テ自己ノ名誉ニ非
スニテ恥辱ナリハ固思ヒタリ此ノ如キ気持ち其ノ慣
習タル大博士ヲロウエイフ氏ノ史上ニ照々タリ曰ク各
記官アリヤシ、ロパウヒシ氏ハ帝「ミハイル、ヘラドルウ
エテ」ニ傾首伏拜以テ謝シテ曰ク臣カ家ハ古來撰任ニ
目テ首府ニ在勤ヲ辱フセリ而シテ臣ハ今ニ至ルマテ當
所ニ於テ在勤ヲ辱フセリ是ヲ以テ伏シ帝「ハ書記官
ノ職ヲ免セラレシ」ト故ニ帝親ラ詔ヲ下シ彼ヲ各
記官ニ登用スルニ彼ハ貴族ニ非シハ其先榮ナキヲ以
テ一々ハ貴族ニ入籍シテ各記官ニ昇進スヘシト然レ
雖氏彼ハ甚々之ヲ以テ快ナリトセサリト云フ又一
千六百四十二年會議席上ニ於テ文人武士ノ間ニ互ニ
相敬視スルノ情ヲ顯ハセタリト云フ

書記官シキ官クワンココララヒヒ氏シハ曾テ自己ノ官職ヲ恥辱ト見做
スノ意アルヲ以テ彼得現大帝ノ後ニ至ルマテ貴族輩
ハ其意ヲ固信シ各々武士ノ風態ヲナシ而シテ政府ノ
貴族ヲシテ文務ニ込接セシメトスル注意ヲモ顧ミ
ス文勢ヲ嫌忌シテ聊カ之ニ心ヲ傾ケサリキ故ニ文務
ハ「カラ、ピーウノイ、セー」ニ文務ヲ奉職スル人ヲノ手
ニ遷轉シテ貴族ノ手ヲ脱スルニ至ル蓋シ「カラ、ピーウ
ノイ、セー」卓名ノ種子ノ異名ハ古來文人武士ノ間
ニ隙アルヲ知ル所ノ貴族ガ名吹ヤシ所ナリ如斯シテ
貴族ヨリ召集セントスレバ貴族ノ之ニ参入スル者ナ
キヲ以テ下等社會ヲシテ文官ニ入ルノ方向ヲ生セシ
メ然リ而シテ文官社會ハ上等社會ノ方向ヲ一変スルニ
至レリ然レバ政務章程ハ貴族ニ官位ヲ欽派セシメテ遂

賞勳局

ニ貴族ト結合ノ情ヲナセリ然リト雖氏到底文官ヲ輕
視シ魯國ノ政務章程ハ貴族ノ之ニ參入ニ全ク擴充ス
ルナカリシト雖モ魯國ノ文務進歩ノ為ニ又敢テ害ヲ
生シタルニ非サルナリ

夫レ貴族ノ功績タルヤ甚タ至貴至重ト云フヘキヤリ
蓋シ其精神揮揮ニ其鮮血ヲ注キ或ハ「イブマイル」ノ

郭ヲ畧シ或ハ有名ナル「スタレブウル」(土耳格ノ公斯坦
布堡ヲ云フ)

リ語ナリヲ拔キ國家ノ為ニ心カヲ常ニ深ク此心ヲ抱

テ勲功ヲ立タルモノナリ又諸侯クニヤス「ケルバ」ドフ氏ハ

其日記ニ載スル如ク一千七百六十七年ノ會談ニ於テ

言ヘル有名ナル「ヤロスラフ」縣貴族代議人「ニケルバ」

ドフ氏ノ語ヲ以テ之ヲ激スルニ足ル曰ク嗚呼汝魯國

ニ汝ノ滅亡スル時ニ方リテ手ツカラ之ヲ救助セシ者

ハ誰ソヤ曰ク汝ノ信愛セル諸子往昔ノ魯國貴族ニア
ラスヤ貴族ハ則チ其妻子眷屬ヲ捨テ其生命ヲ犠牲ニ

供シ汝魯國ヲシテ外敵ノ苦難ヲ避ケシメ汝ニ古來ノ

自由ヲ得セシメタルニ非スヤト其功業タルヤ史上ニ

於テモ名譽ニ於テモ其價ノ高貴ナル幾クソヤ然レ氏

文人社會官員ノ大小ヲ問ハス功績ノ光榮名譽モ亦其

價大ナラスヤ即チ我魯國ノ治安ト創立トノ為ニカヲ

尽シタル書記官「グセイフ」氏「シケルカ」ロフ氏「レラン

チエフ」氏「グリガ」エードフ氏「ガラマ」ラン氏「シア」セローフ

氏等以下ノ功業勲績ノ至大至重ナル實ニ佛國政治家

ノ偉功ニ讓ラサル所ナリ故ニ恐ラクハ其功名ヲ相争

フテ其間或ハ隙アラシ然リ而メ彼得現府ニ政務章程

ヲ創設スルヤ摸斯格府書記官ノ事業ヲ移シテ以テ成ル

賞
功
局

モノナリ又其政務章程ノ未タ具サレ所アルニセヨ困
難勞苦同功ヲ尽シ熱心慎密シテ一大邦國ヲ全備スル
ニ於テ誰カ之ヲ辞退スル者アラシヤ而メ武士モホジ
アレスキイ氏「セレメテフ氏」ミ「ニハ氏」ル「ミヤンツア
氏」ク「ドウゾフ氏」ス「ウオロフ氏」等以下数名ノ勇將剛士
ノ功業ヲ誇言スルヲ得「シ文人モホタシヤヒロフ
氏」ヤ「クジンスキイ氏」ア「ステルマン氏」バ「ズボロジコ
氏」ト「ロシナンスキイ氏」ス「ベランスキイ氏」等以下有功
ノ數名ナリ
政府ニ於テハ貴族ヲシテ文務ニ承接セシメントスレ
氏其頑固強情ニシテ文務ヲ嫌忌シ之ヲ避クル故ニ政
府ニ於テ大ニ之ニ注意配慮シタルヲ次章ニ論セント
ス

一千七百二十年内國一般ノ諸法ヲ制定スルヲ以テ貴
族子弟ヲ議院及書記局ニ於テ書記官ニ之ヲ監督セシ
メ且ツ書記官ノ夏務ヲ學ハシム而シテ其學ヲ得ル所
ノ度ニ應ニテ高官ニ登用セント「シテ定ム又凡テ貴族子
弟ヲ唯文務ニノミ入ルヲ許サス軍務ニ入ル、モ亦平
均同負ニ二分シテ之ヲ入ル、ヲ定ム且ツ立法官ハ貴
族ハ書記官ノ職務ヲ輕視スルノ意見アルヲ察知シ貴
族ニ令レテ之ヲ蔑視スルナケラシム又紋章局長ハ議
院及裁判所ニ任スヘキ人負テ貴族ヨリ百歳スルヲ要
スルカ故ニ他ノ職務ニ撰用シテ後テ其殘餘ノ最モ善
キ者百名ヲ撰ニ下等裁判所ニ任定スルヲ要ス但シ此
百名ヲ彼得見府ノ下等裁判所ノ職務ニ任セ之ヲ甲乙
兩部ニ分チ年々相互ニ交番セシム甲部交番ノ其裁判

實力局

所ヲ退去スルニ臨ミ其中三分一ヲ翌年ニ留メ甲部交
番ノ出ツルマテ其年ノ夏務ヲ知得セシムル為ニス又
貴族子弟ヲシテ書記官ノ夏務ヲ修学セシムル為ニモ
各議院ニ六人若クハ七人ヲ置ケテ定メリ然レ氏一千
七百二十四年ニ於テハ貴族子弟ノ議院ニ在ル者甚々
少ナリ或ハ其一人モ在サルノ議院アレリ此ヲ以テ大
學校ニ入り修学スル所ノ貴族ヨリ更ニ百名ヲ撰用シ
テ諸議院ニ配当スルヲ公布セリ又同年ニ於テ書記官
ニ登用スルニ必ス貴族ヨリスヘキヲ定メ是レ貴族ヲ
議官及ヒ自他ノ最大高官ニ昇進スルヲ得セシムル為
ナリ然レ氏唯々非常ノ時ニ於テハ裁判書記官ヨリ
書記官ニ任撰スルモノトナセリ其後一千七百二十六
年元老院ニ於テ内閣議院ニ上書シテ曰ク議院ノ下等

士官ハ文官ノ夏務ヲ修ムル故ニ書記官ノ官位ニ登
用スヘカラスト此ニ於テ貴族ヨリ入りタル下等士官
ヲシテ文官ノ事務ニ習熟セシムルニ至ルマテ文人ヨ
リ書記官ニ登用スルモノト定ム又女帝安那妖亞諾キ
那ノ治世一千七百三十一年ニ於テ陸軍生徒學校ヲ設
置シテ唯々貴族子弟ノミヲ入学セシメ該校ニ於テ政
治學ヲモ修学セシムルヲ定メリ何トナレハ人ノ天賦
ハ唯々一ノ軍吏ニノミ傾クモノニ非ス又國家ニ政治
民法ノ修学ヲ要スル最モ少カラサレハナリ又一千七
百三十六年十二月三十一日ヲ以テ公布セシ詔書ハ貴
族ノ軍役期限ヲ二十五年ト定メ又教男若クハ教兄弟
アルモノハ其中一人ヲ家ニ留メ家産ヲ管ラシムルヲ
許セリ而シテ其家ニ留マル者ハ文學ヲ講習シテ文務ニ

賞
勳
局

入ルヲ昂ソナル可ラス貴族少年ハ十六年ニシテ
經其最モ文務ノ任ニ堪ユヘキ者ハ文務ニ入ルヘキヲ
定ム而シテ叙章局長ハ之ヲ議院ノ書記局トシテ配定スル
モノトナス

一千七百三十七年元老院ニ於テ宰相局ニ上申シテ曰
ク彼得兒府居住ノ年齢十五年以上十七年以下ニシテ
文学ニ達シタル貴族少年ヲ撰テ之ヲ元老院議院書記
局トシテ配當スヘシト此ヲ以テ其農夫百人以上ヲ有ス
ル者ヲ元老院ニ入ラシメ二十五人以上ヲ有スル者ハ
議院ノ書記局トシテ配當スヘキモノトス是レ其少年貴
族ヲシテ唯給料ヲ以テスルノミナラス各自ニ其心膽
ヲ潔白ニシ其身体ト衣服トヲ清潔ニ保護ニ得セシメ
シカ為ナリ而シテ文務ヲ勤メ傍ラ貴族トシテ民吏トシテ適宜

緊要ナル他ノ學術ヲモ亦講習セサル可ラス斯ノ如ク
シテ貴族少年ハ擬令寫字ノ捧給ヲ受クル者ニシテ其歸
スル所ニ從ヒ何レノ處ニ入ルトモ元老院或ハ議院
或ハ書記局ノ貴族ト稱セサル可ラス此ヲ以テ終ニ書
記官ヲ蔑稱スルノ汚名ト之ヲ輕視スルノ意ト皆共ニ
身ヲ離ルニ至ル而シテ此少年輩ニ五年間ノ勤務アリ即
チ最初一年ハ寫字ノ給料ヲ受ケ其後二年ハ下等書記
官ノ給料ヲ賜ハリ最後ノ二年ハ書記官ノ給料ヲ拜賜
スルモノトナリ而シテ此五年間ノ勤務ヲ經テ後其任ニ堪
ユヘキ者ヲ書記官ニ登用スルモノトスルモ其若シ此
五年間ヲ經過シテ舊民吏文官ノ吏務ニ迂遠ナル者ハ
元田兵卒ニ編入セシカ為ニ陸軍省ニ送致スルモノト
定ム是レ當テ一千七百三十七年ニ於テ元老院ノ宰相局

賞勳局

こ上申スル所ニ依ル此度ニ関シ著名ナル公令アルヲ
以テ別ニ宰相局ヨリ元老院ニ其意見ヲ促カストル氏
其決議スル所ニ至リテハ元老院ノ上申ト其論意ヲ異
コセス此決議ノ実行スルニ及ビテユスポフ氏波得兒
府ニ於テ紋章局長ノ閣検ヲ控タル貴族少年ヲ分定ス
ルニ次章ノ方法ヲ以テセリ即チ元老院ニ十二名教部
省ニ六名外務省ニ十二名陸軍省司法省司高局ニ各六
名礦山局造幣局ニ各四名ヲ置ケリ又同所ニサルラマ
コ氏操斯格府元老院會計局ニ於テ閣検ヲ控タル少年
ヲ配当スルニ次章ノ順序ヲ以テセリ即チ元老院會計
局、收税局、戸籍局、米地局ニ各六名裁判所ニ四名没収局
ニ二名ヲ置ケリ斯ノ如クニ記当セラレシ少年ハ各各
重大ノ監督ヲ蒙レリ即チ元老院ニ於テハユスポフ氏

之ヲ監シ元老院會計局ニ於テハサルテコフ氏諸議院
ニ於テハ其長官或ハ次官書記官ニ於テハ判事長之ヲ
監督セリ而シテ元老院ニ於テ大書記官ヲシテ貴族ノ統
轄ヲ擔當セシム但シ大書記官ハ之ヲ派遣各記局ニ配
當シ書記官等ヲシテ課表規則ニ基キテ其貴族ニ法律
及ビ諸規則等ヲ教授セシメ又一週間ニ二回分間學、地
理學、算學及文法ヲ教授セシメシカ為ニ之ヲ注意スル
ク而シテ書記官ハ一周間毎ニ此事實ヲ大書記官ニ上書
シ大書記官又之ヲユスポフ氏ニ申達スルモノトナシ
ユスポフ氏ハ毎月一回其貴族ノ試験スルモノトナス
又書記在勤ノ者ヲシテ此貴族ニ對シ無礼或ハ誹謗ス
ルナカラシメ貴族モ亦各自己ノ品行ヲ正フシ実直礼
讓ヲ以テ之ニ對遇セサル可ラサルモノトナス又其貴

貴
力
局

族ヲシテ不正ノ地ニ至リ不義ノ家ヲ訪ヒ或ハ骨投ニ
戯レ骨牌ヲ玩セ或ハ貪酒沈醉スルナカラシムルノ規
則ヲ立テ之ヲ遵守セシメンカ為メニ若シ此規則ニ違
犯スル者アレハ服役無限ノ兵卒トナスノ戒罰ヲ以テ
嚴ニ之ヲ禁制ス且ツ又外見裝飾ノ事ニ注意シ元老院
書記局ノ貴族ヲシテ常ニ衣服ヲ清クシ身体ヲ潔クシ
テ日々白^{ブクドリ}香粉ヲ用ヒ鬢髮ヲ梳リ美濃ナラシムルヲ要
セリ何トナレハ常ニ高位貴官ノ席前ニ出ツルアルヲ
以テ衣服身体ノ清潔ヲ要シ持ニ祭日ニ於テハ^{カデ}女學生
徒ト共ニ庭園園内ニ遊行スルアルヲ以テナリ
然リト由ヒ此法則ノ制ハ嚴密ニ過クムヲ以テ速ニ不
進歩ヲ顯ハセリ即チ千七百四十年元老院ニ於テ書記
官ノ事務ニ決定シタル貴族中ヨリ諸候^{リウオウ}氏^{クワ}

シロシオマリシ氏アレクマ^イア^クカ^コフ^ノ氏等二十七
名ニ文学又ハ書記官ノ夏務ニ近遠ナルヲ以テ兵卒ト
ナシ又諸候^{シッホ}ト^フスキ^シ氏^エガ^ルイ^チ氏等ニ
十八名ハ文学ニ勉勵スルト由ヒ書記官ノ夏務ニ心ヲ
用ヒスシテ軍務ニ入ラセ^イテ^九老^院ニ出願スルヲ以
テ軍務ヲ講習セシシカ為ニ陸軍兵學校及海軍兵學
校ニ入学セシムヘキヲ命^シタリ^何ア^ナレ^ハ彼輩^ヲニ
テ書記官ノ夏務ニ就カシメントスレ^ハ其^好ハ^所ニ非
レ^ハ又^之ヲ^如何^トモ^スル^ナキ^ヲ以^テナ^リ加^之ス^九老
院ニ於テ既ニ撰定シタル^ハ廣地^ノ貴族^及貴顯^貴族
ノミ^ナラ^ス中^等以^下或^ハ卑賤^ノ貴族^ト由^ヒ病^書記^官
ノ習學ヲ好マス且ツ其他ノ貴族社會ハ軍務ノ基ト見
做レ唯軍務ニ心ヲ熱心勉勵スルノ情實ヲ確認シテ心

賞
勳
局

ヲ文務ニ傾テサルヲ以テ更ニ法ヲ設ケ唯文務ニ入ラ
シテ請願スル者ノ之ヲ許シ其願サル者ハ之ヲ推
強セサルモノトナス如斯キテ政府ノ貴族ヲ文務ニ誘
導セシメタル百端ノ勞苦ハ更ニ水泡ニ属テリ即チ
千七百六十七年ノ會議名簿ヲ以テ貴族ノ文務ニ近接
セリルノ如何ヲ得テ見ルニ足ルヘシ又魯國史全集ヲ
見テ以テ貴族ノ軍務ニ入ル者最モ多クシテ文務ニ入
ル者最モ少キヲ知ルヘシ即チ大隊長アリミ當今此官名副
隊長ヨシ艦長フナシ騎兵下士官下等士官長今用下等士官前兩官
不列兵卒等二十名中ニ殆コト漸クコルレビスキイア
ツセスソルハ文官一名ヲ見ルヲ得シリ女帝悦加得利
那二世ニ至リテ令ヲ出シ軍務ヲ旺盛ナラシメタリト
雖凡太平無事ノ時ニ於テハ大務ヲ肝要トスルヲ以テ

文務ハ貴族ニ適應ト見做スノミナラズ却テ之ニ入ル
ノ光榮ヲ占有シ得ヘキヲ思フルモノト信スルナリ然
レ氏具女帝ノ治世中ニ於テ貴族ハ文務ニ入ルヲ以テ
各自ノ汚辱ト見做シ密爭テ軍務ニ入ル特ニ陸路
近衛隊ニ入ル者其數ヲ知ラス而シテ若シ稀ニ其文務奉
職ノ者ヲ見ルハ唯其高位貴官ニ昇登シ自治ノ擅權ヲ
占得セシカ者ニ軍務ヨリ轉職シテ文務ニ入ル者ナリ
即チ議院ニ於テハ議長副議長或ハ縣令或ハ大判官ノ
官位ニ昇登シ擅權專制恰モ君主ノ如ク此ニ於テ貴族
ノ品價甚ク高尚ニ在レリ余輩此ニ其一例ヲ掲テ以テ
示サシ即チ女帝エカテリテ二世ノ末世ニ方リテ議官
ヱルドウヒシ氏ノ兄弟ニシテ農丈千余人ヲ有スル一
ノ富豪地主基アリ遂ニサラニスキハ都會首長トナシ

賞
勳
局

ヲ班シ氏第二級ノ職務即チ議院ノ委員各縣ノ權令又
各縣ノ議官大書記官ノ職務ハ別格ナル「カラヒーウ」ノ
イセーメニノ永続シテ勤ムル所トナレリ
千七百九十九年ニ於テ各縣制法ノ新令ヲ發スルニ及
ビ又左ノ一令ヲ下セリ曰ク縣政ハ幼年貴族ヲ獎勵シ
文學講習ヲ終フルニ及テ其地方ノ法則ハ裁判法トシ
研究セシメ又吏務ヲモ實行セシメテ後チ高官ニ登用
シ其榮譽ヲ天下後世ニ顯ハシ一撤ノ鴻益ヲ致サシム
ルヲ以テ最モ緊要ナリトス一世巴維兒帝ノ治世ニ方
リテ軍律ノ嚴重ナル貴族ヲシテ文務ヲ嫌忌スルノ念
ヲ絶シシメ而シテ其文務ニ入ルノ制限ヲ速ニスルヲ以
テ終ニ貴族ヲシテ皆先後ヲ卑ヒ陸続文務ニ入ル其數
ヲ知サレニ至リシメタリ一世巴維兒帝ハ其治世ノ最

初ニオリ貴族ヲシテ文務ニ入ルノ研究ヲナサシメシ
カ為ニ議院下士官ノ名稱ヲ再興シ千七百九十九年ニ
於テ其中唯五十名ヲ留メ其餘ハ皆陸軍省ニ遣出スハ
キヲ元老院ニ命シタリ此下士官ハ外務省記録納所ニ
置カレタリ即チ彼得現府ニ二十名莫斯科府ニ十名ヲ番
ハ其後ニ至リ貴族ヲ文務ニ入ルノ法制大ニ開タルニ
至リ千七百九十九年十月五日ヲ以テ元老院ニ勅令ヲ
下シ貴族子弟ヲ文務ニ登用スルニ必ス帝ニ上奏セサ
レハ之ヲ編入スル能ハサルモノト定ム次テ千八百年ニ
至リテ軍務退役ノ貴族ヲ文務ニ擢用スルヲ禁止ス又
曾テ貴族子弟ヲ文務ニ擢用スルニ皇帝ノ許可ヲ得ス
シテ之ヲ用ユルノ禁制ハ一世貴族ニモ亦波及セルニ
至リシカ貴族特權証書ノ快復ヲ以テ遂ニ此等ノ制限

賞
勳
功
勞

ヲ廢止セラレ又貴族社會ハ文務上ニ立ナ局務ニ関與
セスレテ有名無実ノ官位ヲ受クルノ弊風其間ニ行ハ
ルヲ以テ政府ニ於テ深ク之ニ注意セリト其社
會ハ自ラ維持スルヲ以テ其弊風將ニ當今ニ至ラントシ
テ殆ント漸ク永續セス千八百七十年ニ方リリヤザシ
ク縣ニ於テ有名無実ノ官職ヲ奉スル者三百三十九名
ヲ其局ニ記入セシト既ニ帝ノ確知スル所ナリ此ヲ以
テ帝詔ヲ下シ実務ヲ奉セサル者ヲ其局ニ記算スル
ナカラシメタリト其弊習ハ未タ全ク脱セサルニ
目テ千八百四十四年更ニ令ヲ下シ何等ノ事務ヲモ負
擔セサル者ヲシテ職務上ニ算スルナカラシメタリ
貴族社會ハ真ノ文務ヲ奉セスレテ徒ラニ好シテ諸局
ニ記入關與シタリ然レ氏是レ唯一世「巴維見帝ノ制定

掌
書
局

セシ軍律漸ク緩弛シテ終ニ容易トナリレノミヲ以テ
貴族ノ文務上ヲ見做スト故ノ如クナルニ至リ徒テ文
務ニ入ルノ制法ヲモ亦共ニ廢棄セラレニ因テナリ若
シ「ウヰゲリ氏ノ説ヲシテ信ナラシメハ貴族ハ「ラリテン
ブルク親王ノ築城家ノ為ニ武務ノ官位ト大礼服ノ制
定トヲ請願スルニ至ルマテ築城官職ニ入ルヲ欲セサ
リシト云フ又諸省ノ創設アルヲ以テ其新設制定ノ職
務ニ參入スルノ流行ヲ貴族ノ間ニ生スルニ至リ千八
百零二年内務省創立ノ最初ニ方リテ農夫十人ヲ有ス
ル所ノ貴族社會ニ命レテ行政ト政表トノ歴史ヲ分掌
セシメンカ為ニ其分局ニ任セリ而シテ其中一人ハ常
ニ内務卿ノ命スル所ヲ為シ或ハ他ニ其命ヲ傳ハレメ
シカ為ニ卿ノ側ニ在ラシメタリ千八百十一年ニ於テ

賞
力
局

左ノ法ヲ出シ何等ノ官位ヲ有セサル貴族ヲ文務ニ撰
用スルニ分局ニ於テハ貴族ノ名称ヲ以テシ而メ自他
ノ諸局ニ於テハ等外書記官ノ名称ヲ以テスハキモノ
トナス

斯ノ如クシテ新設諸省ノ書記局ニ書記官課長及貴族
ヨリ撰用スル等外書記官ヲ置ケリイワシイワノウ井チ
デミートリイ氏ノ云ハル千七百六十七年間別格貴族
ヨリ書記官ヲ登用スル事ノ行ハレシトノ往古ノ各記

官ト當今ノ書記官ト其間如何ナル差異アリヤ大書記
官「クラマレンコフ氏ハモンテスキイ氏著書ノ萬法精
理ヲ叙述シ而メホカイムスキイ氏ハエスタヤ氏著書
ノ邦國治安ヲ譯シタルニ非スヤト云フ語意ハ是レニ
関スルヤ否ヤ然レドモ貴族ヨリ登用セル新各記官モ

亦文務上ニ政務章程ノ精巧ノ風ヲ生シ書記局ニハ佛
國ノ体裁ト巴里ノ方言トヲ采セリ

然リト雖モ貴族ノ新設諸省ノ勤務ニ入ルノ流行スル
ヤ暫時ニメ止メリ是レ即チ有名ナル魯國ノ法學士「ス
パラシスキ」氏政務章程ヲ講習スル所ノ學校ヲ設置
シタルヲ以テ貴族ヲシテ漸々諸省書記局ヨリ退出シ

且ツ其近衛隊ニ溢流スル故ノ如クオキニ至ラシメタ
リ一世歴山王帝ノ治世ニ至リ貴族ノ近衛兵ニ入隊ス
ルノ最モ流行シ之ヲ貴族ノ本務ト見做スニ至リ唯タ

文務中外交進歩ノ一事ニ於テノミ聊カ貴族ノ重スル
所トナレリ帝「ニ格羅伊」一世ハ貴族ヲシテ盛ニ再セ文
務上ニ関與セシメン「ト」昂メ系統貴族ヨリ文務官員
ヲ造出センカ為ニ回リツイ校ニ新ニ法學校ヲ供立シ

賞
力
局

此遺存ノ校中ヨリストルボウノドワリヤン正統貴族ヲ出シテ之ヲ官員トナセ
 リ然レ氏文勢上ノ景况一變シテ最モ尊榮ノ職トナリ
 唯々大學校ヲ經タルドワリヤン貴族ノ兒孫ノミ文勢ニ入り其勢
 力影響一般ニ波及シテ同帝ノ治世中ニ其確固強盛ナ
 ルヲ如此ナルニ至ル而メ其大學校ノ貴族兒孫ハ終ニ
 一社會ヲナシ他ノ特權ニ抗シテ已ヲ保護センカ為ニ
 一般階級ヲシテ悉ク皆同等ノ權理ヲ得セシメント
 要求ス其一社會ハ文人社會ヲ盛大ナラシメタル故ニ
 尼ニコ格コ羅ラ伊イ帝ノ政治法制ノ真意ハ軍事ニアリト其氏文
 務官員ハ大ニ一般ノ尊敬ヲ得テ終ニ文人ハ武士ノ上
 ニ位スルニ至レリ
 余輩已ニ前文ニ於テ貴族ノ文武兩務ノ事ヲ論說シタ
 リ其文武兩務ハ遂ニ貴族ノ常職要務トナレリト其氏

其兩務ノ外ニ又他ノ臨時準備ノ諸務アリテ其間ニ存
 セリ余輩今此ニ記錄中ニ載スル所ノ其準備職務ノ支
 ヲ説カントス即チ千七百十一年ニ方リ小魯西亞ニ於テ
 疫疾大ニ流行シ甚々人民ノ傷害スルヲ以テ之ヲ預防
 セルカ為ニ諸方ニ因門ヲ設置シ退役非職ノ貴族ヲ以
 テ之ヲ專リ注來諸物ヲ點検調査セシメヨリ又千七百
 十二年尤老院ニ於テ諸物運搬ノ為貴族少年九百名ヲ
 ニテ換斯格府ニ在ラシメヨリ命セリ但シ此少年ハ
 尤老院ヨリ各十五アルテシ金貨ノ名ニ糧食ハ各半サ
 シシ量目量目ヲ附給セラレ又千七百十四年ニ方リ彼
 得兒府ニ於テ糧食及其他種々ノ支務ヲ負擔セシメ
 カ為ニ各縣ニ命シ一縣ヨリ貴族二名ヲ採り用セリ
 千七百二十一年ニ於テハ真珠澳業ノ支アリシヲ以テ

貴族。命シテ之ヲ監察セシメリ又千七百二十二年に於テ按地所^カ有^ルノ貴族少年ヲシテ兵卒ニ代^カリ收稅^カ局ノ番兵又運輸ノ吏ニ任ヌヘキヲ定ム降テ千七百三十二年に於テハ換斯格府ノ諸務又諸物運輸ノ為^ニノ貴族六十名ニ命シテ同府ニ任セシム但シ其在番ハ二十名ヲ以テシテ四町間毎ニ交代ス即チ一年ヲ三分レテ六十名ノ三分一ニ配当セシモノナリ加之紋章局^テニ命シ聖彼得見府諸物運送ノ為^ニハウゴロ^ル縣^ノゴスコ^ノス^ク郡^ノウエリコル^ノツク郡^ノロベ^ノツク郡^ノ地主ヨリ貴族六十名ヲ撰用セシム是レ即チ彼輩^ヲシテ一年ヲ三分シシ二十名ヲ以テ在番交代同府ニ在任セシムルモノナリ何^レトナレハ彼得見府ニ於テ諸物ノ運輸タルニ貴族ヲ用ユル^ノ最モ多キヲ以テナリ又千七

百三十五年に至リ貴族百名ヲ募リ一小隊ヲ編シ之ヲサマ^シト^シ及^テアレセ^リト^シカ^ノ兩地ニ置クベキヲ以テ其三十三名ハ番外貴族^ハ又異域人種ノ子弟ヨリ徴シ其餘ハ悉ク貴族少年ヨリ募^リテ之ニ編入シ而シテ之ニ給共スルニ年々各十二半^ノト^シグ^ルト^シ（我^レハ^ハ概^シト^シナ^リ）金負^ヲ以テセリ千七百三十九年ニ於テ改章局長ニ命シ貴顯貴族及豪富貴族中ヨリ百二十名ヲ撰用シ之ヲ二分シテ彼得見府換斯格府兩所ニ在居セシム即チ聖彼得見府近傍ニ村落ヲ有スル者ハ同府ニ任セシム換斯格府近傍ニ有スル者ハ其府ニ任セシム但シ議院^ハ及書記局ノ吏務ヲ擔當セシモノカ者ニ年々其三十名ツツヲシテ在番交代セシムルモノナリ又同時ニ於テ紋章會計局ニ於テ各郡州ノ貴族若クハ非役士官ヲ何某

ノ事務ニ要スル裁人ト記載スル調表ヲ預メ其各郡州
ニ使シ紋章局長其郡州ニ呈リテ之ヲ撰用スルモノト
ナセリ千七百三十九年中ニ於テドウリスクニ縣兵各製
造所用炭準備ノ為ニ同縣ノ退役非職ノ貴族三名ヲシ
テ「ボリヤンデレ」氏ニ随從スヘキヲ命セリ又其翌年ニ
於テ「カザンスク」アムハシゲロ、ゴーロドスクニ兩縣居住
ノ異種人中之魯教ヲ宣布セシケル為ニ貧困貴族ノ子弟
ヲ召集シテ之ヲ教部省ニ遣シタリ蓋シ該省ハ異種人
中ニ傳教スル所ノ福音経ヲ修学マシメ而後礼ヲ行ヒ
之ヲ僧トナス所ナリ千七百六十二年二月十八日發行
ノ詔各ヲ以テ一タニ義務ヲ放免シタハ貴族ヲ聖彼得
院府元老院ト換欺裕府元老院計集局トニ五十名ヲ置
クヘキヲ定ム然レ氏是レ政府ヨリ推任スルニ非ラズ

ニテ貴族社會カ諸軍縣ニ於テ各自ニ撰任スル所ナリ
而シ又貴族ノ義務ヲ廢止セシ後ニ至テ猶時トシテ之
ニ更務ヲ委任スルヲアルハ又怪シムヘキニ非スヤ余
輩今此ニ其例ヲ掲ゲントス即チ一世歴山帝ノ治世
千八百二十年ニ方リ「ヒルゴー」ルスタニ縣廳ニ於テカ
スレスクニ郡製紙所監察ノ為メ一貴族「カルス」氏ヲ命
スルニ高入ト共ニシタルヲ以テ「ヒルゴー」ルスタニ縣貴
族首長「某」氏元老院ニ白シテ曰ク縣廳ニ於テ更務ノ何
ヲ向ハス擅マニ貴族ノ採用スルノ權利ヲ有スルヤ否
ヤ「此ニ於テ更ニ令ヲ下ニ縣政ヲ以テ擅マニ貴族ヲ
採用スルノ權利ヲ有スルヲナク且ツ貴族ニ對シ不敬
ノ更務ヲ委任スルヲナキモノトセリ
貴族ハ文武兩務ヲ勤メ或ハ種々ノ委任ヲ負擔ニ加之

貴族ノ政府ニ對シ奴隸ノ如キ關係アリテ其命令ニ應
シ或ハ移住ニ或ハ家屋ヲ造営スルヲ以テ觀察スレハ
是又其一大裁タルヲ知ル

聖彼得堡府創立ノ造営既ニ具ハリ遷都殖民スルニ方
リ如何ニテ人民ヲ聚集シタルヤ曰ク彼得堡大帝千七
百十二年「ウエー」ト戰爭ヲ終ルニ至リテ貴族一千戸ニ
命シ而シ聖彼得堡府及「コトリ」島上ニ移住スヘキヲ
キモノトセリ次テ侍臣、内閣近侍、官、帝族司膳官、官、官
衣服、裁裁、侍侍、童童、譯譯、紳紳、子子
模斯格府在在、諸諸、將將、聯聯、隊隊長、大大隊、長長、諸諸、士士、官官、下下、等等、裁裁、判判、官官、の
民、吏吏、のの、司司、下下、官官、輜輜、重重、查查、官官、亦亦、皆皆、聖聖、彼彼、得得、堡堡、にに、移移、住住、セセ、シシ、
ベキ者ノ名簿ヲ編作シ而シ其貴頭ナル者ニハ之ヲ其

家宅ニ致シ其他ハ堂々タル壇上ニ高讀シテ之ヲ知ラ
シメリ又此名簿ノ定規ニ基キテ之ヲ遵奉スルヤ否ヤ
ヲ監察セシカ為ニ間諜ヲ出サシムヘカラナルニ至レリ
千七百十四年ニ於テ聖彼得堡府ニ移住スヘキヲ命シ
タル貴族ノ一部分ヲシテ同年中ニ於テ当地ニ經營ヲ
終リ來年冬月ニ至リテ直ニ其住家ニ遷居セシムヘキ
ヲ公布シタリ其後又「ワシ」リスノ島上ニ石造及木造
ノ家屋ヲ築営スヘキヲ貴族ニ公布シタリ而シ其木石
ノ差ハ其有スル所ノ農夫ノ戸數ニ應シテ定ム即チ農
家五百戸以上ヲ有スル者ハ石造二室ノ一家屋ヲ築造
ス可ク五百戸以下ヲ有スル者ハ經營ノ資力ヲ限テ石
造二室ノ家屋ヲ築営スヘシ但シ一棟ヲ建ツルニ二人
以上協カスルヲ停止ス百五十戸ヨリ以下四十戸以上

賞勳局

ヲ有スル者ハ木造一室ノ一家屋ヲ建リヘキヲ命ス而
ノ四十戸以下ヲ有スル者ハ全ク築管スルヲナカラシ
ム然レモ若シ其給俸ヲ受クル者ニ至テハ余輩其限度
ヲ知カレナリ千七百十九年ニ至リテ更ニ新定ノ制法
ヲ出セリ即チ一千戸以下七百戸以上ノ農夫ヲ有スル
者ハ十間^{ワシゼン}モ尺余ニセシハ概ネノ石造家屋ヲ築造スヘク
七百戸以下五百戸以上ヲ有スル者ハ五間ノ石造家屋
ヲ建リヘク五百戸以下三百戸以上ヲ有スル者ハ四間
ノ石造家屋ヲ築管スヘレ而シテ三百戸以下百戸以上ヲ
有スル者ハ其所要トスル適宜ノ間尺ヲ以テ小屋^{サカレカ}若ク
ハ木室ヲ建リヘキヲ命シシト雖モ此勅令ヲ遵奉ス
ル者ナク貴族ハ唯煙管ニ着キセサルノコトナラス且彼
得兒府ニ赴ク者モ亦シアラカルナリ千七百十九年ノ

制是ハ百八十六年前ノ旧陳ノ人口調表ニ曰テナマシ
モノニシテ其後ニ至リ貴族所有ノ農夫入員ハ大ニ増
減アリシ故ニ米地局^{カウニスノイラリカリス}ニ於テハ精田ノ調表^{ロビヤキ}ヲ成スト能
ハス特ニ地主ハ所有農夫ノ入員ヲ詳明ニ顯ハスヲ欲
セサルヲ以テナリ此後千七百二十四年ニ至リ更ニ所
有農夫ノ精數ニ比較シテ家屋ヲ築管スルヲ定メリ即
チ五千人以下二千五百人以上ヲ有スル者ハ十間^{ワシゼン}ノ石
造家屋ヲ建リヘク三千五百人以下二千五百人以上ヲ
有スル者ハ八間二千五百人以下一千五百人以上ヲ有
セル者ハ五間ノ石室ヲ建サル可ラス而シテ千五百人
以下五百人以上ヲ有スル者ハ小屋^{サカレカ}若クハ木室ヲ造管
スルモノトナス而シテ貴族ハ聖春ニ至ルマテ彼得兒府
ニ此經營ヲナサシカ爲ニ同所ニ到ラサル可ラス是千

賞
力
局

賞
力
局

七百二十六年に至ルマテ各自ノ住家ヲ造営セシメシ
カ為ナリトス而シテ若シ此匠管ニ著手セサルモノアリシ
ハ其所有村落ノ半ヲ官府ニ没スルモノトス千七百二
十四年ニ於テ聖彼得堡府ニ遷居スヘキ者ヲ同府住人ト
定メ在任三年ニシテ再シ其家ニ故帰マシムルモノトナ
ス即チ其二年ハ聖彼得堡府ニ居住セサル可ラスニテ
三年ヲ経テ各自ノ村里ニ帰ルモノトス女帝安娜^{レタ}ア
諾^ウ子^ナ那ノ治世千七百三十五年ニ方リテ「ワシ」リス
島上又海軍島ニ築營スルヲ勅^シメシカ為^ルニ貴族ニ
嚴令ヲ下シ若シ此令ヲ遵奉セサル者アルハ其不動
産ヲ官ニ没入セルモノトス然レモ是レ貴族ノ為ニ極
メテ困難ナリシト見エ何トシハ其旧里ヲ去リ政府
ノ命ニ從テ北方ノ湿地ニ移遷セラルヲ以テナリ此移

賞
勳
肩

住ニ恰モ農夫ノ地主ノ為ス所ニ任テ一方ノ地ヨリ他
方ノ地ニ轉役セラレ、ノ情ノ如シ千七百四十年ニ至
リテ猶彼得堡府ニ貴族ノ家屋ハ亦々全ク建築修營具
ラス或ハ建築スルアルモ家計ニ奔走シ之ニ注意スル
ノ暇ナキヲ以テ遂ニ破壊スルニ至ルモノモ亦少ナシ
トセス此ヲ以テ千七百二十四年ノ法ニ基キ更ニ勅令
ヲ下シテ之ヲ嚴重ニセリ其後ニ至リ絶テ記録中ニ此
令ナキヲ以テ考レハ該令ハ即チ最後ノ令ナリト信ス
ルナリ
前文ニ陳述シタルヲ以テ觀シハ貴族ノ政府ニ對シ奴
僕ノ如キ關係アルハ猶農夫ノ貴族ニ於ルカ如ナルヲ
知ルニ足ル即チ貴族ヲシテ軍務或ハ文務ニ入ラシメ
或ハ種々ノ委任ヲ負擔セシメ或ハ彼得堡府ニ移住セ

賞
勳
肩

シノ或ハ諸方ニ派遣シテ學術ヲ講習セシメタリ而シテ
其罪ヲ得ルニ於テハ其肌衣ヲ剝脱シ其裸体ヲ顯ハレ
テ之ヲ鞭撻セリ而シテ貴族ハ何ヲ向ハス定制上ノ猶豫
ヲ有シタハヤ否ヤ曰ク隊中若クハ書記局若クハ學校
ヲ脱シ或ハ勤務ヲ怠リテ之ヲ避ケ潛匿スルノ外ニ定
則ノ猶豫ヲ有スルノ道ナク概シテ之ヲ云ハハ貴族ノ
義務ヲ免ル能ハカリシト恰モ赤地附属ノ農夫カ貢税若
役ヲ免ル能ハカルカ如クニシテ唯々農夫カ地主ニ抗
抵シ脱走或ハ潛匿シテ聊カ之ヲ免レ得タルノ實際ア
ルノモ又政府ニ於テ唯貴族ノ老衰或ハ不具或ハ痲疾
アル者ニハシ其役務ヲ免除スルモトス彼得兒大帝
ニ至ルマテ世上ニ於テ罪ヲ得テ遁レ或ハ苦難ヲ避ケ
ニカ為ニ信狀スヘキ所ノ寺院ニ蛭氏義務若クハ修學

賞
勸
局

ヲ避ケテ潛匿セシトスル者ハ決テ之ヲ隱藏スルコトナ
シ然レ氏彼得兒大帝ハ千七百十四年ニ於テ一子相続ノ
法ヲ公布シタルヲ以テ無業怠惰ノ徒ヲシテ績出スル
ナカラシメ且貴族ヲシテ主業ニ就カシメシカ為ニ若
干ノ自由ヲ下附セシメテ切望セリ余輩今此ニ其公布
シタル法ノ順序ヲ説カントス曰ク貴族ノ兵學生徒ニ
シテ其不動産ノ相続ニ參與セサル者ハ齡四十二至ル
後白衣僧トナリ或ハ高僧ニ入籍シ或ハ諸藝人トナル
ヲ得ヘシ而シテ若シ貴族ヲ以シ生業ニ就カレトスル時ハ
姓名ヲ稱シテ之ニ入ルヲ禁止ス是レ其不致ナスルヲ以
テナリ貴族ノ白衣僧族ニ入籍スルノ權利ヲ得テ其益
スル所トナリシヤ否ヤ余輩之ヲ知カルトナリ

賞
勸
局

「ド」ゴルーコ「」氏ノ著書第二編ヲ見ルニ「ミ」ローロフ
氏ノ祖父「イ」ワコ「イ」ワノウガチ「ミ」ローロフ「」者ハ僧徒
ニ入籍シ遂ニ「ク」レシ「レ」ニ於テ内閣大臣ヲ任ズリシヲ
知ル其他貴族ノ僧徒ニ入籍セシ者モ亦恐ラクハ之ハ
ラシ抑テ千七百十四年ノ新法ハ模斯格府大变革ノ時ニ
於テ制定シタル僧侶社會ト勤務社會トノ間ニ關係ス
ル旧法ノ性質ト相異ナルヲ以テ勤務社會ノ僧徒ニ轉
籍スルノ自由ヲ得タルハ模斯格府帝ノ勤務社會ヲ賦
カセサルカ爲ニ施行スル所ノ政意ト相適合セサルモ
ノナリ故ニ魯國ニ於テハ西歐羅巴ニ存在セシ最大貴
顕ノ系族ハ僧徒ニ入籍セテ大教主及「」高僧ニ昇進シ
得ヘキ結合ヲ此兩族ノ間ニ創成スル能クハ「」所ナリ西
歐羅巴ニ於テハ之ト異ナリ貴族社會ト僧侶社會トノ

間ニ其系統ノ連結ヲ生シ從テ系統貴族僧侶及僧侶系
統貴族「」モノヲ生スルニ至リタリ而シテ貴族ノ特權
ハ寺院ニ於テ之ヲ確定セリ然ルニ魯國ニ於テハ之ニ
及シ僧侶ハ其精神常ニ平民ニ接近シテ貴族ノ大ニ輕
視賤過スル所トナレリ又新ニ入籍シタル僧侶ノ如キ
ハ屢々人民ノ動擾ニ與黨シ殊ニ農民ノ地主ニ抗抗シ
浪動ヲ醸成スル時ニ方リテハ之ニ與黨シテ大ニ其勢
ヲ逞「」セシ事アレリ而シテ我魯國最高ノ教主ハ常ニ
唯寺院ノ職ヲ勤仕スルノミナラズ且國家ノ事務ヲモ
奉シタリ又常ニ其聖僧ノ光德ヲ以テ權利授與ノ初式
ヲ執行セリト雖ニ種族特權ノ式ハ之ヲ行フ「」ナシ
是故ニ余輩考「」ルニ何ナル貴族ハ僧徒ニ入籍シタル
ヤ又彼得見大帝カ許「」テノ貴族ニ附與セシ僧徒入籍ノ

賞
勳
局

賞
勳
局

權利ヲ以テ其益トシタルヤ恐ラリハ其益トナラザリ
シト信スルナリ然ルニ小魯西亜ニ於テハ之ト異ナ
リ此地猶未タ波蘭領ナリシ時ニ於テ既ニ貴族ト僧族
トノ間最モ近接ナルト定マレリ波王ハ貴族系統ヨ
リ許多ノ人員ヲ擧テ寺院ノ所有ヲ有タシメシク為ニ
其大教主及ヒ其住職トナシタリト云フ(大博士「イワニ
シエフ」氏著各芽十五葉ニ詳ナリ)小魯西亜國ノ大魯西
亜ノ版圖ニ併セタル後ニ至リテハ唯々並心田兵ノミ
ナラス首長及貴族トモに陸續トシテ僧族ニ入籍シタ
リ例ハ一十七百二十年小魯西亜鎮將「スコロバード
スキ」氏ノ時代ニ於テ「モイス」ガ「イフスキ」氏ハ
鎮將任可軍隊附屬ノ僧侶トナリ又貴頭ナル一地主「
ウトウ」チ「ナル者モ亦僧侶トナレル「アリ其他

掌
薫
唇

救擧ニ選アラス而シテ小魯西亜ニ於テハ軍務ヲ免レニ
カ為ニ道避シテ僧族ニ入籍スルモノ甚タ多クシテ或
人ハ同時ニ司祭トモ田兵トモ職務ヲ兼有シタル「ア
シ」子帝「安那」氏「無諾」子「那」ハ教部省ニ一令ヲ下シ「イ
フスキ」縣「タル」ゴ「フスキ」縣「アレ」ス「ラ」フ「ス」
縣ノ大教主ヲシテ大隊長若クハ隊屬首長ノ証書ヲ有
セサルハ小魯西亜首長及心田兵並ニ首長ノ子弟ヲ
輔祭及司祭トナス「テ」能「ル」モ「ト」ナシ又其他ノ貴
頭ナル者ヨリ陸軍大將ノ許可ナクシラ之ヲ採用スル
「テ」能「ル」モ「ト」ナセリ又魯國史全集ト魯國古史ト
ニ記載スル小魯西亜ノ事情ヲ讀ミ即チ一奇事ヲ得タ
リ曰ク千六百五十四年小魯西亜ヲ大魯西亜ニ併合セ
シ後ニ於テ小魯西亜國ノ軍務官員輩ハ其官職ヲ脱シ

賞
勳
局

其族中ヲ出テ司祭ニ入籍スルヲ兵役ノ事アル時ニ方
リテハ殊ニ益多シトヤス而シテ官員ヨリ轉入シタル司
祭輔祭ハ貴族會議ヲ經テ貴族免許証ヲ得猶自ラ貴族
ト徒稱シ貴族タル何等ノ勤務賦役ヲ負ハスシテ全ク
貴族ノ營生ヲナシ常ニ貴族ノ權利ヲ以テ已ラ利セリ
ト而シテ千七百二十八年ニ於テ小魯西無鎮將アポスト
ル氏ニ下シタル之ヲ制禁スルノ勅令ト其條款トニ背
キテ各許マノ土地ヲ占有シタリト是故ニ小魯西無ニ
於テハ采地ノイノイノ附屬ノ農夫ヲ有スル僧侶地主ヲ見ルト爰
々ナリ此ヲ以テ小魯西無ニ於テハ方今ニ至ルマテ猶
村邑中ニ大僧正ト司祭トヲ見ルト最モ多シ其他國內
何レノ処ヲ問ハス此例アルト最モ稀ニシ唯千八百十
一年大僧正トヤムボルスキイ氏ハスラポドスコウカラ

イニスクル縣ノ地主トナレルヲアリ又此同縣地内ニ僧
侶地主アリ然レニ是千七百十四年ノ法令ニ基テ白衣
僧トナルノ權利ヲ得テ而シテ其髮ヲ削リシ貴族ノ僧侶
ニアラスシテ多クハ曾テ殖民采地ヲ賜ハリシ所ノナ
タルジエンスキイ氏或ハ世襲貴族トナラズバヤンスキイ氏
或ハ賞典ヲ賜ハリシレフシニ氏等ノ子孫ナルモノナ
リ再シテ前章ニ溯リ千七百十四年ノ法制ヲ説カントス
曰ク此法ヲ以テ貴族社會ニ髮ヲ削リテ白衣僧トナリ
又何ヲ問ハス他ノ諸藝ヲ營ムノ權利ヲ附與シタリ然
リ而シテ許タノ貴族ハ此權利ヲ得テ當時常ニ其益スル
所トナリシヤ否ヤ余輩未タ之ヲ知ラサルナリカニ
口口氏ノ説ニ回レハ貴族ノ為ニ大ニ不便宜ヲ生シ貴
族子弟ハ其父ノ家ニ遺留セル不動家産ヲ恃スシバ如

賞勳局

何ニテ糊口ノ方法ヲ得ンヤ文学技藝ハ猶其家ニ存ス
 ルカ故ニ許多ノ貴族子弟ハ讀書習字ノ切要ナルヲ了
 解スルト雖モ之ヲ能クスルモノハ唯々稀ニ在ルノミ
 而ノ當時ノ貴顯縉紳ハ家産ニ富ノルヲ認テ幸福ナリ
 トシラ之ヲ尊敬スルニ至シリト云フ
 千七百十四年ノ法令ヲ以テ貴族ニ附與セル一課生業
 ニ就クノ自由ハ千七百三十一年ニ至リ一子相続ノ法
 ヲ廢止セラレテ以テ再々制禁セラレタリ其後ニ至リ
 テハ唯々「エストリヤントスク」リフリヤントスク「西縣
 ノ貴族ノニ義務ノ羈束ヲ免レ自由ヲ得タリ即チ其自
 由トナスハ軍務ニ入役スルヤ或ハ否ヤルヤヲ上申シ
 タルモノヤリ」千七百三十四年ニ於テ女帝「安娜」沃「無諾
 手那」モ亦タ此令ヲ下シタリ而シテ其翌年ニ至リテハ「ス

モレニ「ス」貴族ニモ波及シタリ然レモ是レ余輩ノ已
 ニ陳述シタル如ク新兵ノ徵募ヲ以テ滿期免役スル所
 ノモノナリ
 彼得兒大帝ノ治世ニ至リテモ猶未タ當然ノ退役ニ代
 フルニ償金ヲ以テスルノ法殆ニト終ニ行ハルヲ得
 タリ此償金退役ノ法ハ彼得兒大帝以前ニ於テ存在セ
 シ「右告」十六條ノ規則ニ見ヘタリ又「クレル」氏著
 ス所ノ歴史註標中ニ載スル「ホル」氏ハ一千六百九
 十六年「アット」出証ノ時ニ方リ此役ヲ免レシ「コ」欲
 シテ其父ヨリ償金百圓ヲ償納スヘキ「コ」ヲ徵召局ヨリ
 下シタル一書ニ證印シタリト「クレル」氏云ハルア
 リ曰ク當時ノ百圓金ハ其價甚々貴童ニシテ當時ハ百
 圓金ヲ以テ農夫二十人附屬ノ一小村落ヲ買フヲ得ベ

シ但シ方今ニ在リテハ其村落ヨリ收納スル所ノ收額
年ニ百圓或ハ百圓ヨリ多カルベシ此ヲ以テ之ヲ考フ
レハ當時ハ免役償金ノ甚々高價ナリシヲ知ルトゴル
一コト氏著昏茅三編二百四十二葉ニ詳明ナリ(彼得見
大帝ノ治世ニ於テモ亦々猶ホ償金免役ノ例アルヲ見
ル即チ千七百十四年中ノ一令ニ曰ラ觀ルニ許多ノ諸
近臣ハ當然ノ勤務ニ代フルニ海軍省ニ償金ヲ拂フテ
之ヲ免レタリト云フ然レモ此償金ヲ拂フニ當時ハ所
有農夫ノ戸數ニ曰ラセラルモノナレハ何ニ基テ定メ
タルモノナルヤ余輩之ヲ知ラサルナリ即チ農夫一千
六百六十三戸ヲ有セルイワン、アンドレイ、ゴリトツエン
侯及六百五十一戸ヲ有スルミハイロ、ユリエウキテ、ヲド
エフスキ、侯ハ各三百圓ヲ償納シタリセミヤン、ミハイ

ロウキチ、ミチュルバトト侯ハ農夫百十戸ヲ有シ「グリ
ゴーリイ、ミハイロウキチ、サバトキニ」侯ハ唯々七十戸ヲ
有スルノミミシテ各三百圓ヲ償納シ又「イワン、ハラド
ルウキチ、コズロフスキイ侯ハ農夫七十戸「ワシトイ、ア
ンドレイウキチ、ウオルコンスキイ」侯ハ百五十二戸「セミヤシ、
ペトローウキチ、ベスドワジエフ」侯ハ九十戸ヲ有スルモノ
ニシテ共ニ谷二百圓金ヲ償納シタリ而テ諸近臣ヨリ
償納シタル償金ノ總計四千百八十圓ナルニ至レリ此
償金ヲ以テ役ヲ免ルヲ得タルハ唯々貴顯貴族ト豪富
貴族ノミナルカ或ハ平等貴族モ亦償金ヲ拂フテ役ヲ
免ルヲ得タルカ余輩之ヲ知ラサルナリ然レモ前章ニ
載スル所ノ令昏中ニ登録スル姓名ハ概子皆ハ貴顯豪
富ノ兩貴族ニ屬スルモノナレハ實際上ニ曰テ觀ル時

賞勳局

賞勳局

ハ免役償金ノ高額ナルヲ以テ唯々貴顯豪富ノ西貴族
ノミ償金ヲ以テ其役ヲ免レ得タルモノナルヲ知ル余
輩大博士ツロウサイコ氏ノ史上ニ因テ償金免役ノ一事
ニ関スル甚々奇トスヘキ事情ヲ見ル是即チ千七百二
十三年ニ於テ「タリー」氏ノ請願シタル
事ナリ、曰ク高令ヲ下シテ「アレクセイ」氏ノ一子「ニコ
ス」氏ノ給金トシテ同氏ニ收入スヘキヲ命セラレタ
リ然ルニ「ニコス」氏ハ千七百十九年ニ方
リテ其金額ヲ辨出セリト雖氏千七百十九年以來今テニ
至ルマテ更ニ何等ノ金員ヲモ辨出セスト此ニ於テ帝
詔ヲ下シ「ゴリ」氏ノ給金トイヒタル金額ヲ同氏ニ
辨却スヘキヲ「ニコス」氏ニ命シタリト其

賞勳局

書第八編百六十三葉ニ詳明ナリ

第二章

彼得兒大帝ハ國務法制ヲ釐革ニ從テ勤勞ニ報ユルノ
法ヲ一變シタリ抑、米邑分與ノ法ハ千七百十四年ニ於
テ全ク廢棄シ從來分與ノ米邑ヲハ更ニ世襲米地トナ
シテ爾來勤勞ニ報ユルニ給俸表ニ基テ確定セル通常
ノ給俸ヲ以テスルニ至ル而シテ其給俸ハ則チ給與ノ俸
祿ニシテ彼得兒大帝ニ至ルマテ分與セシ所ノ米邑トハ
大ニ其性質ヲ異ニセラルモ「ヨリ」即チ「ゴト」氏ノ
說ニ因レハ緞紳及侍臣及内閣廷臣ニ給與スル金祿各
二百圓トシ司膳官ニ各百圓宮官馬器財衣服兼與侍ニ各
八十圓トス是レ其官位ト光榮トニ因テ支給スルモノ
ナリト而シテ其官負俸給ノ金額一圓ニ對シ田地ノ五ノ

賞勳局

チラユルチヲ以テセリト云フ然レモ彼得見大帝ニ至ル
マテ給金ハ唯采地ノ附屬物タルニ過ヤリシカ大帝以
來ハ給金ヲ以テ勤勞ニ報ユルノ本原トナシタリ然レ
モ大帝ハ其治世ノ最初ニ於テ猶ホ未タ土地ヲ以テ其
采邑トナシ分與スルヲ廢止セサルヤリ即チ千六百八
十二年ヨリ千七百十一年ニ至ルマテ官有領地ノ内ニ
百七十三村落ヲ分テ二百十三名ニ分與セリ但シ此村
落附屬ノ農夫四万三千六百五十五人ヲ算ス而メ其耕
地ハ三十三万八千九百六十「エチ」ノ坪數ヲ含有スルモノ
ナリ「カスト」リヤロ」著彼得見大帝史第一編附録十二
條ニ詳ナリ此後ニ至リ以前ノ如ク采地ヲ分與シタル
ヲ見サルナリ千七百十四年ニ於テハ「インゲルマンラ
ンド」地ニ殖民スルノ目的ヲ以テ魯人或ハ「チラフ」ナ

地ヲ分與シテ同地ニ移住セシメシカ為メ其地ヲ分
與シタリ然レモ是レ同年ヨリ算シ三年間ニシテ必ス
移住セサルハカラス若シ然ラサルハ於テハ再ビ此
地ヲ沒收シテ其他ノ者ニ分與スルモノトナセリ千七
百十一年ニ於テ武官ノ俸給ヲ確定セル所ノ武官俸給
表ヲ發行セラレタリ次テ千七百十五年ニ至リ文官俸
給表ヲ發行セラレシモ唯地方官員ノミニ要シタルモ
ノナリシカ千七百二十五年ニ於テ議院ノ為ニモ亦祭
行セラレタリ然レ而シテ彼得見大帝ハ内國官員ニ支給
スル俸給ヲ確定シタリト雖モ官金ノ甚ク寡少ナリシ
ヲ以テ更ニ「リフリヤ」ンドニ行ハレシ所ノ法則ニ倣ヒ
臨時徴税法「ア」クツ「テ」シテ其官員ノ俸給ヲ裁判所或ハ諸官省ニ於
臨時徴税法「ア」クツ「テ」シテ其官員ノ俸給ヲ裁判所或ハ諸官省ニ於
臨時徴税法「ア」クツ「テ」シテ其官員ノ俸給ヲ裁判所或ハ諸官省ニ於
臨時徴税法「ア」クツ「テ」シテ其官員ノ俸給ヲ裁判所或ハ諸官省ニ於

賞勳局

マテ猶ホ彼地ニ行ハレシ所ノ法ナリ是故ニ女帝悦加
得利那一世ノ治世ニ及ヒ初テ豫定ノ法ヲ実行スルニ
至ル即チ千七百二十六年ニ於テ司法省及世襲采地局
各裁判所及市街會議所職工番賣ノ事務ヲ司ルニ令テ下シテ其各
委員ニ給俸ヲ附給セシメタリ然レニ唯書記官ニノミ
臨時徵稅法ノ一事ヲ以テ足レリトセリ二世彼得見ノ
治世ニ方リテ臨時徵稅法再ニ盛ニ行ハレテ其規範
ヲ制定セラレ唯書記官ノミナラス各裁判所ニ於テモ
亦タ猶之ヲ拳行スヘキヲ命セラレニ至レリ女帝悦利
撒味多彼得見乎那ノ治世ニ至テモ亦其行ハル、初
ノ如クニシテ唯女帝悦加得利那一世ニ至リ一千七百
六十三年ニ於テノミ彼得見大帝ノ遺志ヲ続キ全国ノ
官員ニ俸給ヲ附與スルノ法ヲ再興セラレタリト云フ

掌 薫 居

彼得見大帝ハ俸給附與ノ法ヲ拳行セシテ其後代ノ帝モ猶
ト雖モ唯官金ノ寡少ナルノミヲ以テ其後代ノ帝モ猶
大帝ノ遺志ヲ実行スル能ハサリシナリ然レニ采地占
有ノ慣習ハ猶ホ勤務社會ノ中ニ現存スルカ故ニ千
七百二十六年ノ勅令中ヲ見ルニ他人ノ諸軍隊ノ士官モ
近衛隊士官ノ如ク常ニ村落ヲ賜ハランコトヲ出願シタ
ルヲ以テ令テ下シ唯勤務ヲ永續スル者並ニ戰功アル
者ニノミ官府ニ没収シタル村落若クハ家滅無主ノ村
落ヲ限リ下賜出願ヲ得ヘキモノト定メリ
采地分與ノ法一タヒ廢止セラレニ及ンテカザンヌリ
縣ノ采地局采地ノ事其他采地分與ノ處分ヲ管スル教
所ヲモ從テ廢滅セラレニ至レリ然ルニ世襲采地局采地
ヲ相續ル事ニ於テハ之ニ拘ラス貴族ヨリ土地下賜ノ出

賞 勳 局

願ヲ許聴シテ該局ヨリ委員ヲ派遣シ官有空地ヲ調査
実測セシメテ之ヲ分與スルノ法ヲ制定セリ斯ノ如ク
シテカシホーフスリ^ノ縣「カ」ルサノフスリ^ノ郡ノ地主「ハ」
コ^ノ氏ニ耕地一千二百十^ハチエトウエル^レト^ノ牧野二千四
百^ハ東^ノ一^ノ野^ノ坪^ノ數^ハ其^ノ前^ノ草^ノ束^ヲ以^テ筭^トト^ノ附給セ
リ又千七百三十五年ニ於テ同縣「ホ」リソグレイ^ノ郡ノ
諸^ノ侯^ノ「チ」ユ^レ「キ」ニ^レ氏^ニニ千二百七十八^ハテシヤ^チニ^レノ土
地ヲ給シ其翌年ニ於テ「ハ」カル^レコ^ノ氏^ニニ千八百^ハチ
エト^ウエル^レノ土地ヲ給與シタリ此數十^ハ万^ハテシヤ^チニ^レノ
土地ハ皆^ハナ^リ世襲米地局ニ於テ分與シタル所ナリ千七
百三十六年三月二十一日發行ノ勅令ハ記録中ニ見
ズト雖モ千八百零四年十一月二十九日發行ノ勅令ニ
万一千五百三十六号ヲ以テ徵スルニ其發行セシ^レ疑

掌
庫

ヲ容レガレ所ナリ即千七百三十六年三月二十一日
ヲ以テ世襲米地局ニ勅令ヲ下シテ嚴ニ米地分與ヲ禁
制シタリ此ニ於テ米地分與ノ事全ク止ム然リト雖モ
此後ニ至リテモ亦若干ノ官員ニ土地ヲ分與スル^レ猶
ホ旧ノ米地分與法ヲ挽回シタルカ如リナルヲ見ル例
ハ千七百三十七年ニ於テ貴族ヨリ勤ニ入ル礦物制
造所ノ士官ニ農夫十戸附屬ノ田地ヲ附與セリ但シ農
夫四人ヲ以テ一戸ト筭ス是レ給金ノ外ニ心スシモ
礦物製造所ニ在勤ス^レキ義務ノ契約ヲ以テセシモノ
ナリ(ホ^ノド^ノス^チユ^レ氏^ノ著述ノ一^ハ卷^ニ詳^ナリ)又魯國ニ
來仕セル「ガ」ルジ^ニス^クノ貴族村落ヲ賜ハリシ^レアリ
千七百三十八年ニ方リテ女帝「安」那^ノ沃^ノ無^ノ諾^ノ乎^ノ那^ノハ此^ノガ
ルジ^ニス^クノ貴族中ヨリ召徵シテ近衛騎兵一小隊ヲ編

賞
勳
局

成シタリ但シ之ニ給與スルノ法ハ先ツ訣隊ニ編入シ
テ實務上ニ在ル時ハ定額ノ給金ヲ附與シ若シ以貴族
ノ其家ニ在ル時ハ給金ヲ與ハスシテ之ニ代フルニウ
カライナシニ於テ世襲所領トシテ村落ヲ附與シタリ即
チ諸侯ニハ農夫三十戸並其幼年子弟ヲ養育セシカ爲
ニ其子弟ニ各五戸附屬ノ土地ヲ與ハ貴族ニハ農夫十
戸附屬ノ土地ヲ與フルモノトナセリ故ニ小魯西亜ニ
ガルジンスク^ル屋ノ地主ヲ出スニ至レリ即チ諸侯「ダウ
オイドフ」氏「ブルベリヤン」氏「エリストフ」氏「ウエチヤノウ
」氏「ハラト」氏「チエフ」氏「ジシヤウホフ」氏等是ナリ
又貴族「ト子」氏「ステアア」氏「カホ」氏等是ナリ
而ノ其子孫ハ今猶彼地ニ存在ス女帝「悦利撒味」^{バト}彼得
兒乎^バノ治世千七百五十一年ニ方リテ「セルビヤ」人ヲ徵

掌 薫 居

召シテ四大隊ヲ編成シタリ其ニ大隊ハ騎兵ニメ「ガサ
」ルスク^ル隊ト名ケ其ニ大隊ハ步兵ニメ「パシドルスク」
隊ト稱ス是皆共ニ大隊長「イワン」ホルワト^ルクルチ
「氏」ノ指揮スル所ナリ而メ之ニ附給スルニ新魯西亜
地方ノ田地ヲ以テス而メ此兵員居住ノ地方ヲ名ケテ
新セルビヤト云ハ當地ニ築營スル城寨ヲ号シテ「聖悦
利撒味」^{バト}ト稱ス其後ニ至リテ此地ニ采地附屬ノ農夫
ヲ生スルニ至ル即チ千七百六十年ニ於テ少將「ホルワ
」ト^ル氏元老院ニ出頭セリ曰ク新「セルビヤ」陸軍入隊ノ
諸士官曾テ拜賜セシ土地ヲ耕ヤシカ爲ニ年々二百八
十三人ノ傭夫ヲ要スルヲ以テ以傭費金額ノ總計二千
八百三十八圓金ノ多キヲ費スニ至ル故ニ希クハ傭夫
ニ代フルニ其士官官位ノ貴賤ニ準據シテ大隊長ニ各

賞 勳 局

十二人副隊長ニ各八人隊長補ニ各六人 甲比丹^{陸軍ハ}等官ハ
ニ各四人其他ノ諸士官ニ各二人ノ小魯西亞人ヲシテ
拜賜ノ地内ニ殖民セシメラレト即チ其許可ヲ
得タルヲ以テホルワト氏ノ代願ハ大ニ衆ノ尊敬ス
ル所トナリ而シテ新魯西亞ニ如ク曰ルニ産ノ貴族
系統ヲ生セシメタリ是レ即チ方今ニ至ルマテ現ニ遺
存スル所ナリ

魯國ノ諸官員ハ小魯西亞ニ於テ在官奉職ノ時ニ方リ
當地ノ習俗ニ因テ官位附屬ノ采地ヲ受ケリ例ハ子
七百六十九年ニ於テ都會成兵總長及成兵長等此官位
附屬ノ村落ヲ受ケタリ然レハ此風習ハ唯小魯西亞一
國ニシテ存スルニ非ス千七百七十六年二月二十六日
發行ノ勅令ニ因テ觀ルニ「スモヒンズク」縣令ハ同縣地

内ニ「スチヌラー」フスク領ヲ割リ其俸給トシ賜ハレリ
是レ其縣令ノ在官奉職中ニ其所有ト見做ス所ノモノ
ナリ又千七百六十七年ノ勅令中ニ載スル所ヲ顧想ス
レハ「ガオイ」ボルグスク縣令ハ其死亡ノ後ニ至リ「ケク
ス」ゴーリムスク郡ノコレヲ領地ヲ賜ハリシ「ア」キ
「ポ」ベドノ「スチ」ユ「ク」氏ノ一書ニ詳ナリ又千七百九十六
年制定ノ俸給表ニ據リ十八縣ノ縣司タル鎮將兼縣令
十八名ニ其給トシテ各農夫六百人附屬ノ田地ヲ賜ヒ
其他ハ皆之ニ代フルニ年々一千二百回及千八百回ノ
金額ヲ以テセリ（文官俸給表二百五十三葉ニ詳ナリ）
「ポ」ベドノ「スチ」ユ「ク」君ハ魯國ニ創設セシ賞典祿法ヲ以テ
官位附屬ノ田祿ニ類シテ又子孫累世ニ傳襲スル所ノ
采邑ニ似タルモノト見做セリ是即チ「巴」維兒一世カ子

賞典
功
勳

七百九十七年ニ於テ先ツ魯西亜国帝ノ功牌ヲ制定シ
テ後チニ賞典禄支給ノ法ヲ設ケリ余輩今此ニ教語ヲ
賞シラ曾テ西政羅巴ニ行ハレシ「アリチス」功牌ト忠
義連士トノ法則ヲ傳來シテ以テ我魯國ニ創成シタル
本源ヲ説カントス曰ク巴維兒一世ハ忠義連士ヲ創成
スルノ意見ヲ常ニ胸懷ニ忘レズ西政羅巴ニ存在セシ
忠義連士ノ風ニ模擬シテ魯國一般ノ忠義連士ヨリ創
成セシ「ヲ」ヨリ西政羅巴ノ忠義連士ト賞牌トハ各其
位資ト米邑トヲ占有スルヲ以テ帝即チ之ニ範トリ村
落ヲ分割シテ忠義連士ニ分典シタリ（此ニ於テ魯西亜
帝國ノ忠義連士ハ一種無二ノ光榮ヲ有スルヲ以テ國
人ノ大ニ重スル所トナレリ）是即チ忠義連士ヲシテ其
村落ヨリ産出スル賞典禄收額ヲ得セシメンカ為ニノ

一時ニ農夫五万人附屬ノ田地ヲ分典シタル「アレリ」
其後チニ至リ賞牌ノ位資ヲ倍シタルヲ以テ從テ賞典
禄ヲモ亦増加スルニ至リタリ即チ聖「アンドレイ」エカ
テリサ「アレクサンドル」子ト「フスク」聖「アンナ」ノ四大功
牌ニ基テ第一等ニ分チ其最大賞典禄ハ聖「アンドレイ」
ニノ第一等ナルヲ以テ農夫一千人附屬ノ田地其最小
賞典禄ハ聖「アンナ」ニシテ第一等ナルヲ以テ田夫四百
人或ハ百人附屬ノ田地ヲ分典スルモノトセリ又其四
大功牌ノ間ニ僧侶社會モ參入シテ其賞典禄ヲ受クル
ニ至レリ然レニ其僧侶ハ自ラ之ヲ管ムニ非スシテ恰
モ官府ニ於テ其寮局ノ農夫ヨリ收納セルカ如クセリ
例ハ「アレキサンドル」子「フスク」功牌ヲ拝賜シ又模斯
主ハ「アレキサンドル」子「フスク」功牌ヲ拝賜シ又模斯

格縣地内ニ三百零一人附屬第十六号ノ賞典禄ヲモ賜
ハレルコアリ而ノ僧侶ニ非ル者賞典禄ヲ賜ルハ直
ニ之ヲ処分スルコ地主ノ如クスルヲ得ベシ然レ此
賞典禄ハ功牌等級ノ中ニ其廣狹ノ境界ヲ存スルカ故
ニ數條ノ制限ヲ設クルニ至レリ曰ク其賞典地内ニ製
造場或ハ釀酒場ヲ開設ス可ラスシテ唯々農業ノ一事
ノミ廣行スルヲ許ス而ノ其耕地ト牧野トノ三分二ハ
其農夫ノ有ニ屬スルモノトシ其三分一ハ領主ノ所有
ニ屬スルモノトナセリ千八百零一年ニ於テ^{アレキサンデル}歷山王一
世ノ帝位ニ即クマ速ニ賞典禄ヲ官府ニ奉還セシメタ
リ
米地分與ニ代フルニ十八紀中ニ於テ更ニ国家或ハ國
帝ニ非常ノ功勞勲績アル者ハ之ニ報ユルニ^{コマンダースト}殖民米地

ヲ以テスルノ法ヲ施行スルニ至ル
千七百年中ニ方リ一世米地及世襲米地分與ノ事行ハ
レシ時ニ於テハ土地ヲ以テ第一ノ^{アラン}目算トナセシカ農
夫ヲ以テ計算上ニ入ルニ能ハカルナリ是レ他ナシ十
五十六兩紀中ニ於テ已ニ米地分與ノ制法具ハリ此時
ニ於テ農夫ハ不羈自由ニ採賜ノ土地ヲ去リ隨意ニ
他ニ轉任スルヲ得タルニ回ラ之ヲ^{コマンダースト}算記スルコ能ハル
ヲ以テナリ是故ニ唯々草ニ耕地幾坪牧野幾束ノミヲ
以テ算用シタリ千七百年代ニ於テ已ニ役奴ノ法定マ
レル時ニ至リテモ猶慣習ヲ便トシ土地ヲ計算スルニ
幾坪幾束ノ語ヲ以テセリ彼得見大帝ハ米邑分與ノ法
ヲ廢止シテ^{コマンダースト}殖民米地ヲ附與スルノ法ヲ發行シ耕地幾
坪牧野幾束ノ語ヲ用ヒスシテ一般ニ田夫ノ戸數ヲ以

賞典局

テ集セシメニテ勦メタリ而メ其後代ノ帝ニ至リ人
口調査及人税ノ法ヲ制定シタルヲ以テ農夫ノ人員ヲ
調査セシメテ注意セリ何トナレハ家産ノ一七資ヲナ
ルヲ以テ其所有地價値ト其多寡トヲ量ルニ足ルヲ以
テナリ然ルニ或ル諸縣ニ於テハ農夫ノ人員ヲ算スル
ニ幾人ノ語ヲ用ヒスシテ幾頭ノ語ヲ以テセシメテアリ
例ハ白魯西亞地方ニ於テハ農夫幾頭牧畜幾頭ト算
スル故ニ一書ヲ見ルニ千七百七十七年ニ於テモギレ
フスク縣諸侯ヲギンスキイ氏ハ其所領ノ農夫一千六
百二十二頭ヲ六名ノ下等貴族ニ典却シタルトアレシ
彼得兒大帝ハ小魯西亞地内及攻畧ノ土地ヲ割キ其同
功ノ諸臣ニ殖民采地ヲ分典セリ然レハ其地ノ廣狹ト
マカトニ至リテハ素ヨリ之ヲ詳明スル能ワスト雖モ

唯タバルチク沿海ノ地方及小魯西亞其他教所ニハシ
シコフレ氏ノ大領地アルヲ知ルノミ千七百二十四年ニ
於テ算スル所ニ因レハ其全領地内ノ農夫合計凡ソ十
万余人アリテ其中脱走シテ來ル者及移轉シテ來ル者
凡三万二千二人ニ過リ又自他ノ同功臣殖民領地ヲ賜ハ
リシコトヲ此ニ掲ケン即チ僧侶ナダルジンスキイ氏ハ
スラボドスコ、ウカラインスク、縣ニ農夫四千二人附屬ノ
地ヲ賜ハリ又「画速弗海」ヲ攻畧シタル時ニ於テ「フアル
ト」氏ハ「エピファン」スク及「リヤザン」スク、兩郡ニ農夫百六
十戸附屬ノ地「ゴルド」氏ニ百戸「シエイ」氏ニ三百五戸
附屬ノ地ヲ共ニ「アトイル」スク郡ニ賜ハルシリセル
ブルク」ヲ攻畧シタルニ因テ「ゴロトウ」氏五十七戸「ソ
ヲト」氏四十戸「ゴリトウ」氏三百九十四戸附屬ノ地

ヲ共ニゴゼリスク郡ニ賜ハリホルタワ捷戦ニ因テシ
ユレノテ「氏」廣大ナル世襲領地ヲヤロスラ「コ」縣
小魯西無西所ニ賜ハレリ又諸侯ヤ「コ」フ、ヘッドルウチ
ドルゴル「コ」氏「シ」ウエト戦争ノ時ニ於テ敵軍ノ為
ニ俘虜トナリ遁レラ本國ニ歸リタルヲ以テ四百戸附
屬ノ地ヲ拜賜シトルスト「イ」氏伯位「ア」プラクシシ「氏」諸
侯カシテミール氏ノ三氏「ガ」ルト「ノ」和議ヲ終ルニ及
ンテ谷四百戸或ハ四百戸以下附屬ノ地ヲ拜領シタ
リト(ポベドノスチユラ「氏」著書ニ詳ナリ)又他ノ諸大將
モ疑クハ村落ヲ賜ハリシ「ア」ラシ「ン」千八百五十九年出
板ノ讀本第一編中ニ載スル千七百十八年祭行ノ詔書
ヲ見ルニ小魯西無鎮將「ス」コロ「バ」ドスキ「氏」一族ノ
小魯西無内地ニ賜ハリシ土地ノ廣大ナルヲ以テ觀ル

掌 熹 居

ベシ即チ其妻「ナ」ス「タ」スヤ「マ」ル「コ」ナ「氏」及其女「ウ」リ「ナ」イ
リ「ノ」ウチ「氏」賜「フ」所「コ」ロ「フ」小領地邑一邑内ニ「カ」シ「ノ」フ
タ「リ」ノウ「キ」ツ「ア」等ノ村落兩三戸ノ農及一大領地官省管
「フ」云「ボ」イ「コ」フ「ス」ク「ロ」フ「ス」ク等是ナリ
一子七百零三年ニ於テ彼得見大帝ノ召シタル有名ノ
「ロ」ル「ビ」ヤ「人」ヤ「ウ」ワ「ウ」テ「ジ」ス「ラ」ウ「キ」チ「ラ」グ「シ」シ「ス」キ「イ」氏
ハ「マ」マ「イ」グ「氏」(小魯西無鎮將)ノ同胞「ロ」ミ「ー」コ「フ」氏及「チ」
ウ「イ」ケ「ウ」チ「氏」ノ所有ニ屬セシ「ト」パ「リ」キ「ハ」イ「バ」ラ「セ」イ
「フ」カ「ロ」ズ「ボ」イ「シ」ユ「フ」カ等ノ村邑並ニ十四ヶ所ヲ小魯西
無ニ賜ハレリ
其後嗣ノ治世ニ至リテモ亦々殖民采地分典ノ法ヲ施
行セリ即チ女帝悦加埜利那ノ治世ニ於テ「ハ」ン「シ」コ「フ」
氏ハ「ハ」ド「ウ」リ「ン」セ「ル」子「河」ノ「邊」ニ在ル地「ア」ス「ク」郡ヲ拜賜

賞 功 勳

セシトテ請願シタリシカ素ヨリ當帝無二ノ寵臣ナル
 ヲ以テ異議ナクシテ許容セラレタリト云フ
 女帝安那沃無諾乎那ノ即位ニ及ニテ殖民采地分與法
 ノ施行ス可ラサルヲ要求セリト雖ニ終ニ行ハレザリ
 キ（是）何ノ主意ナルヤ貴族社會ノ幸福ヲ妨害スルヲ昭
 明ナリ（女帝安那沃無諾乎那）其即位ノ當日ニ於テ采
 地ヲ分與シタリ即チ諸侯ガシテミール氏及ゴリール
 エシ（氏）各農夫四千人附屬ノ地ヲ賜ハリ又クテシ
 チ（エフ）氏ハ一千人附屬ノ地ヲ拜賜シタリト云フ余輩同
 帝ノ其他土地ヲ分與シタルヲ知ラズト雖モ當時權勢
 ヲ逞フシタル（ゴ）氏ヨーステルマシ（氏）ミール氏
 曾テ（マ）シ（コ）フ（氏）ノ有ニ屬セシ小魯西亞ノ領地ハミ
 ール（氏）ニ傳襲シタリ諸侯（チ）エルカ（ス）スキ（氏）ゴロ（ワ）キ

シ（氏）等ハ其女帝ノ恩愛ヲ蒙リシ者ナレハ恐クハ各采
 地ヲ賜ハリシナラニテテ想信スルナリ
 又其後嗣ノ治世ニ至リテハ殖民采地分與ノ法最公行
 セラレ其土地ヲ拜賜セシヤ余輩ノ明知スル所ニ係ル
 モノ亦以テ少ナシトセス而シテ其最モ廣大ナル土地ヲ
 下賜シタルハ女帝悦（加）坦利（那）彼得（兒）乎（那）即位ノ時ニ
 アレリ即チ（左）大臣（ゴ）コー（ウ）ン（侯）及（リ）ン（シ）ココ（侯）ノ奉
 還セシ大約農夫一万四千人附屬ノ地ヲ近衛隊中ニ分
 與セラレ並兵卒（ゴ）マ（ド）ル（ラ）マ（ミ）ノ（氏）以下二百
 五十八名ハ各二十九人附屬ノ地ヲ拜賜シ乃チ其地主
 トナレリ女帝悦利撒味（彼得兒乎那）ノ位ニ在ルヤ初
 ヨリ終リニ至ルマテ領地分與ノ事ヲ止メズシヤホー
 フ（氏）ハ其給與ノ大地ヲ受領シタリト雖モ獨リ（イ）ワン（ン）

イワノウサチシワアロフ氏ハ當時ノ最モ貴重ニ且ツ賢明
ノ人ナルヲ以テ女帝エリナラエツタノ同氏ニ推興スル
六千人附属ノ地ヲ辭シテ之ヲ受ケサリシト云フ其他
太政大臣「バスドウジエ」氏ニ「ウエデン」全都會ヲ賜ハリタ
リト雖ニ其最洪大ナル領地ハ「ラズウモフスク」氏一族
ノ賜ハリシ所トナル蓋シ「ラズウモフスク」氏ハ農家ニ
生レ女帝悦利撒味多「彼得兒乎那」ノ寵愛ヲ蒙リ遂ニ伯
位ニ昇ル者ナリ伯位「キリルグリゴリイウサチ」氏ハ農夫
十万人附属ノ土地ヲ占有セシカ其過半ハ概子皆拜賜
セシ所ノモノナリト云フ其他「ラズウモフスク」氏ノ諸
親戚織エ「ウラスブトリヤンスキイ」氏及縫裁師「ヤクシレ
フスキイ」氏及屯騎兵「エヒムムダラガシ」氏ハ皆共ニ
「ラズウモフスク」氏ノ寡居セル諸ヤヲ聚リタルヲ以テ

賞
勳
居

為ニ貴族ニ昇進セラレ大地ヲ賜ハレリ又「ウラスブド
リヤンスキイ」氏ノ一子「ミハイル」氏ノ有地附属ノ農民
一千七百八十三年ニ於テハ合計六千零四十二人アリ
内農男三千三百三十九人ニ農女二千二百七十三人
アレリト云フ又女帝悦利撒味多「彼得兒乎那」ハ其代父
「デミヤン」ヲボロンスキイ「氏」ノ徳ヲモ忘却セズシテ一
千七百四十五年ニ於テ「ウサチ」ニヤンリ及「ゴロジ」ノ
西邑ヲ賜ハレリ
彼得兒三世モ亦殖民采地分與ノ法ヲ永續シタリ即チ
帝ノ良友ナル「グトウサチ」氏ハ農民一万五千人附属ノ「ス
タロボリヤドチエス」領地ヲ賜ハレリ是レ其後ニ至テ
女帝悦利撒味多「二世」ノ為ニ收没セラレシカ「巴維兒帝
ノ再々同氏ニ賜ハレ所トナルモノナリ又「メリグウ」ノ

賞
勳
局

フ^レ氏ハ田夫一子附屬ノ地ヲ賜ハリアレクサンドル、イ
リノウキ子、シワロー^レ氏モ亦タ同ク一子人附屬ノ地
ヲ其欲スル所ニ擇ムヘキヲ許サル又帝ノ宮官^{カメルンチル}ゴルシ
チンスキ^イ氏^{カメルゲル}等官ノ本務ヲ奉職スルアレ
クガンドル、ブレソ^レ氏ハ魯國貴族ト共ニ一子零九十
四人附屬ノ地ヲ^ハウオゴ^レロド^レ郡ニ賜ハリ騎兵長官^ア
シエ^レ氏及騎兵長補官^レジツキ^イ氏モ亦食料^トシ
テ一村落ヲ賜ハレリ即チ^アシエ^レ氏農夫三百五十
六人附屬ノ地ト^レシ^ウキ^イ氏ハ百三十八人附屬土地
ヲ^ハ賜シタリ女帝悦加^カ埜利^レ那^ニ世ハ其帝位ニ在ルヤ
農夫附屬ノ地ヲ分與シタル^ト洪大無量ナルヲ以テ世
ニ^ニ驗證ヲ殘セリ而シテ其在位多年ナリト^ハ蚕^ハ猶陸^ニ統^ト
シテ之ヲ分與スル^トク^ハホ^レリ^レ國ヨリ恢復シタル

數縣地内ヲ以テセリ女帝悦加^カ埜利^レ那^ニ世ハ其諸寵臣
ニ^ニ殖民米地ヲ賜ハリシ^トアレリ即チ^チ千七百六十二年
八月第六十四号ノ聖彼得見新聞誌ヲ讀ミ農夫一万七
千二百余人附屬ノ地ヲ二十六名ノ諸寵臣ニ分與シタ
ルヲ知ル即チ^リト^コフ^スキ^イ氏^{フロ}タ^リア^レ氏^ウエ^{イル}
ボ^レ氏^チエル^トコ^フ氏^エロ^フキン^レ氏^等以下共ニ十名ハ
貴族ニ昇進セラレ各八百人附屬ノ地ヲ賜ハリ^ウオ^レエ
^レ氏^兄弟^西名^ハ各七百人^スドウ^レピン^レ氏^チス^ウエ^ツキ^イ
^レ氏^外一名ハ各四百人附屬ノ地ヲ賜ハリ^エウ^レノ^レ氏
ト^フセ^ウオ^ロド^スキ^イ氏^共ニ三名ハ各三百人又内
閣^ア衣^ス官^ヲ衣服^ノ事^ヲ司^ル事^ヲシ^リイ^シウ^シチ^ク氏^其妻^ト共ニ
一千人附屬ノ領地ヲ賜ハレリ其後大將^グ兼^フ傳^フ奏^シ官^及内

賞
勅
局

密議臣等ニ廣地ヲ分與セラレタリ即チ其列名ハ年表
記中ニ掲載ス「ラルロフ」氏「ワシリチコフ」氏「ヤワドフス
キイ」氏「ポチヨムキニ」氏「ツヤチ」氏「ゴルサコフ」氏等是ナ
リ共ニ内密議臣「ズタラホフ」氏ト同時ノ人ナリ「テニス
コイ」氏「エルモロフ」氏「デミトリイムモノフ」氏「プラトン
ズボフ」氏等共ニ内密議臣「モルドウエノフ」氏ノ同時ノ人
ナリ此諸義臣等其始ニ於テハ甚々貧困ニシテ漸ク近衛隊
中ニ入ルヲ得タルノミナリシカ終ニ最大富豪ノ地主
トナリ魯國系統貴族ノ榮譽ヲ輝カスニ至レリ而メ又
「ガリツス」氏ノ説ニ回レハ「ラルロフ」ノ眷屬ハ千七百六
十二年ヨリ千七百八十三年ニ至ルマテ僅ニ二十二年
間ニ於テ田夫四万五千人附屬ノ土地ヲ賜ハリタリト
云ヒ又「ワシリチコフ」氏ハ二十一年間ニ於テ七千人附

屬ノ地ヲ賜ハリ「ポチヨムキニ」氏ハ二年間ニ三万七千人
附屬ノ地ヲ皆共ニ大魯西亜内地ニ賜ハリ又「ヤワドフ
スキイ」氏ハ十八年間ニ於テ六千人附屬ノ地ヲ小魯西
亜ニ又二千人附屬ノ地ヲ「ポリーシ」ニ一千八百人附屬
ノ地ヲ大魯西亜國內ニ賜ハリ「ゴルサコフ」氏ハ十六ケ
月間ニ四千人附屬ノ地ヲ「ホーリシ」内地ニ賜ハレリト
云フ然レハ「ガリツス」氏ノ算計スル所ハ全ク至當ナラ
スシテ且ツ確實ヲ得サルモノナリト何トナレハ内密
議臣「エルモロフ」氏ハ田夫六千人附屬ノ地ヲ「モギレフ
ス」縣ニ賜ハリタルヲ以テ脱セリ又「ゴルサコフ」氏ハ
同縣ニ六千人附屬ノ地ヲ賜ハリシヲ誤テ四千人附屬
ノ地ト記ス又「ツヤチ」氏ノ一万三千人附屬ノ「シクロ」
領地ヲ賜ハリタルヲ以テ脱シテ載セズ又「ヤワドフス

賞勳局

キ一氏有地附属農夫ノ總計三万一千人アリタルヲ上
章ニ誤テ記スルモノナリガリボフスキイ氏ノ誌録ニ
因テ觀レハ女帝悦加垓利那ハ其他ニ領地ヲ分與シタ
ルヲ又甚々廣大ナルモノヲ見ル即チ伯位「テルコフ」氏
及左大臣「カースタルマン」氏ハ各六千人「バスボロ」ジ
ク氏ハ一万六千人伯位「モルコフ」氏ハ四千人附属ノ土
地ヲ「ボドリ」スツ「縣」ニ賜ハリ「トロ」シ「スキイ」氏ハ一
千七百人附属地ヲ「ボ」リ「シ」ニ賜ハリ「ポ」コ「氏」ハ同帝
「レ」ム「啓行」ノ時ニ於テ一千八百人附属ノ「レ」シ「チ」ロフ
カ「地」並ニ一千人附属ノ地ヲ「ボ」ドリ「ス」ク「縣」ニ賜ハリ近
侍書記官「ガ」リ「ホ」ソ「スキイ」氏ハ同縣内地ニ六百五人附
属ノ地ヲ賜ハリ「アル」ラ「スタ」ラ「グ」ラ「ズ」エ「ツ」氏ハ六百人
附属ノ地ヲ「ボ」リ「シ」ニ賜ハリ又國相議事院ノ記録ヲ

見ルニ千七百八十四年ニ於テ外務省ノ一委員「パイ」ト
ム「バ」ク「ニ」シ「氏」ハ「ボ」ロ「ツ」キ「イ」縣「ウ」ユ「リ」ジ「ユ」ス「ク」郡ノ「ガ」
ラ「ゾ」ウ「ユ」ツ「カ」ヤ「ラ」グ「ル」イ「ン」ヲ「フ」ス「ク」兩領地ノ分部ヲ
割キ併セテ田夫一千四百七十四人附属ノ地ヲ賜ハレ
リト云フ
凡テ朝廷ニ重大ナル事故アルカ或ハ捷戰或ハ和義ノ
事アルニオテハ必ス毎ニ領地分與ヲ施行セラレタル
モノナリト見ユ即チ千七百七十三年ニオリ伯位「ニコ
ライ」イ「ワ」ノ「ウ」井「チ」パ「ニ」シ「氏」一書ニ外務卿トアリハ太子
「バ」維「兒」彼「得」兒「味」ノ教育ヲ終リレ時ニ於テ其功勞ト其
他勤功ヲカ為ニ之カ慰勞トシテ四千五百十二人附属
ノ地ヲ「ス」モ「レ」シ「ス」ク「縣」ニ及三千九百人附属ノ地ヲ「プ
スコ」フ「ス」ク「縣」ニ下賜セリ然レモ其三千九百人附属ノ

賞
カ
局

賞
勳
局

地主ハ大警視ノ人員ニ同スト巴維兒帝ハ千七百九十
七年四月五日ヲ以テ帝位ニ即キ此日ニ於テ其勤勞功
績アル者ニ殖民采地ヲ分與シタリ又千八百六十七年
出版ノ讀本中ニ載スル所ノ此日ニ於テ施セシ帝ノ恩
意仁心ノ結果ヲ誌セルクウラン氏ノ作文ニ係ル一奇
事アリ曰ク前キニ百零五名ノ親臣ニ賞典祿ヲ下賜シ
且ツ又八万二千餘人附屬ノ地ヲ分ツテ之ニ支給セリ
ト而シテ其最モ廣大ナル領地ハ伯位「バズボロ」氏
ノ賜ハレル所トナル即チ其一ハ曾テ諸侯「カンテミ」
氏ノ有ニ屬セシ「ウオロ」子「レスク」縣内ヲローフスクナ
ル三才「デレヤ」チンノ世襲采地ニメ其一ハ即チ同氏ノ
好ハ所ニ撰ビレ六千人附屬ノ地ナリ大將「レプ」ニシ
モ亦六千人附屬ノ地ヲ賜ハレリ其他又各々數千人或

賞
勳
局

ハ數百人附屬ノ地ヲ賜ハリシ者アリテ其最小ナルモ
ノハ即チ八十六人附屬ノ地ニメ大隊長「バト」レクソエフ
氏ノ賜ハレ所ナリ又婦女ニメ土地ヲ拜賜セシモノア
リ即チ一等女官「リウ」シ氏ハ一千五百人附屬ノ地ヲ賜
ハリ又少將「マク」レモウ「井」チ氏ノ寡女某氏ハ二百九十
三人附屬ノ地ヲ小魯西亜ニ拜領セリ又其他小魯西亜
ニ領地ヲ拜賜セル者アレリ即チ内閣正議官「スト」レカ
ロフ氏ハ二千五百八十人中將「ル」ジヤエフ氏ハ六百
七十八人附屬ノ地ヲ小魯西亜ニ賜ハレリ又「バズボロ」
ジコ氏ニ愛セラレタル驛巡察一委員「スウ」ジインコ氏
ハ五百人及小魯西亜郵便局長「ミロ」ラトウ「井」チ氏ハ四
百十四人附屬ノ地ヲ賜ハレリ其他ハ畧シテ此ニ掲ケ
ス

賞
勳
局

千七百九十七年四月五日ヲ以テ賜ハリシ者ニメ其他
日賜ハレル者ハ即チ「カドナシ」(彼一邑)下ノ人ニシテ
「グルジンスク」縣ニ世襲領地ヲ賜ハレル伯位「ラクナエ」
氏ナリ其他帝ノ諸寵臣即チ帝ノ剝鬚者「クナイソ」氏
曾ト生擒セラレハ伯位ニ叙シ「宮内司」官ニ任セラレ
洪大ナル采地ヲ賜ハリシ「クラキン」侯「ボリヤ」ニノ
フ氏「ラスト」ブチン氏「サル」テコフ氏等ニ均シ伯位「ウエ
イル」ゴレスキイ氏「ハリ」トフスク縣「カメ」子ツ郡ニ世襲
采地ヲ賜ハレリ此地方ヲ名ケテ一般ニ「カメ」子ツ、リト
フスクト云フ皆共ニ小魯西亜内地ニアリ「バウ」維兒一世
ノ治世ニ於テ諸長官ハ凡テ其隨官ノ委員ニ勞功アル
中ハ豫メ其各委員ニ褒賞スヘキ采地附屬ノ農夫ノ人
數ヲ公定シテ之カ為メニ特賜セン「ア」出願スルノ權

利ヲ得タリ即チ元老院大判事局ノ各委員ニ支給セン
カ為ニ農夫五千人附屬ノ地ヲ下賜セラレシ「ア」レリ
又一千八百年ニ方「ハ」サルトフスク縣ニ於テ二十一
万三千「テ」ヤチンノ土地ヲ分割シテ諸官員中ニ下賜
セラレタリ編者曰ク「バウ」維兒帝ノ大度豪氣ニシテ仁惠
ヲ世ニ施シ其名アル「ト」唯魯國ニ於ケルノミナラス外
國ニ於ケルモ亦々未タ曾テ此ノ如キ例アルヲ聞サル
所ナリ
又殖民采地ヲ下賜スルニ時トシテハ何レノ處ヲ問ハ
ス其拜賜スル者ヲレテ好ム所ニ從ヒ自ラ之ヲ撰拔セ
シメタル「ア」リ女帝「悦」加「利」那二世「イ」ワシ「グ」リゴリ
イ「ラ」ロ「フ」氏ニ贈ル一書ニ曰ク曾テ汝チノ父伯位「ア
レ」ク「サ」ンドル「グ」リゴリイ氏「チ」エ「ス」メン「ス」クノ戰功ア

賞勳局

賞勳局

ルニ回テ下賜シタルモノニメ未タ受領セサル四千人
附属ノ地アリ余今汝チノ為ニ六千人ヲ増加シ「プスコ
フ縣或ハ「ウオルガ河畔或ハ「ウオルガ郡ノ内汝ノ可ト
スル所ニ任セ之ヲ撰拔ス「レト又「彼得兒三世ハ曾テ
「アレクサンドルイワノウ井チシ「ワ「ロフ氏ニ農夫四
千附属ノ地ヲ下賜シ其好ム所ニ任セ之ヲ撰ムベキヲ
許シタル「アリシカ「巴維兒帝モ亦之ニ同ク「バズボ
ロ「ジコ氏ニ何処ヲ論セス其好ム所ニ任セ「サルテコフ
氏ニハ「ポドリヌク縣ヲ限リ此西氏ヲシテ之ヲ撰ムノ
權ヲ有セシメタリト云フ
又村地拜賜ヲ出願シタル者アレリ即チ諸侯「メンシコ
フ氏ハ「バトウリシ地ヲ拜賜セン「「ヲヤ帝「エカテリナ
一世ニ出願シタル「「アリ又「キリ「ロ「ガリ「ゴリ「イウ井

賞
勳
局

チ「ラズウモフ侯モ小魯西垂鎮臺都督官位附属ノ領地
ヲ自己ノ世襲采地トシ賜ハラシ「「ヲヤ帝「悦「加「埜「利「那
二世ニ請願シタル「「アレリ千七百十一年ニ於テ「ド
ゴル「「キ「イ侯ノ一族ハ曩キニ各一千人附属ノ地ヲ拜
賜スルノ約アリシカ之ニ代フルニ二千人附属ノ地ヲ
更ニ「チ「エ「ホクサルヌク郡ニ賜ハラシ「コトヲ出願シタリ
ト云フ
又千七百四十四年ニ於テヤ帝「悦「利「撒「味「妻「彼「得「兒「乎「那
ニ出願セル願書ノ記簿ヲ以テ徴スルニ唯勤勞節義ノ
為メニ死スル者ノミナラス當時ノ因習トナリ尋常一
様ニ死スル者ト虽氏猶領地拜賜ヲ出願セル者アルヲ
見ル即チ諸侯「ドウルツコイ氏ハ勤勞節義ノ為ニ死セ
ルヲ以テ定約上ノ村落ヲ拜賜セ「「「願セリ然レハ

賞
勳
局

大隊長「ワレリイ、ヤンスキイ氏書記局議官」フリソク
イフ氏ハ尋常一様ニ死セルモノニメ出願シタルヲ
アリ

又時トシテ魯国ニ属セサル異種人ノ首長ニ殖民采地
ヲ下賜セルヲアレリ即チ「カラムイツキイ首長」ド
ウク「ナムホノ妻子千七百四十二年ニオリテ魯国ニ来
リ魯教ヲ受ケ魯国ノ侯地ヲ賜ハリ女帝悦加埜利那ニ
世千七百六十二年ニ於テ「カルムイツキイ部落」首長
ノ尊號トテ其一族「アレクセイドンドウコウ井チナル
者ニ返却シタリシカ彼レ死シテ後千七百八十一年
ニ於テ又其部落一千八百十六戸ヲ没收シテ官有ノ管
轄ニ帰ス而メ首長ノ兄弟諸侯「ヨアンドン、ドウコウ井チ
氏」ドウクコル「サアコフ氏」トニ「モギレ」ヨフ縣「ラ
ルシヤ

ンスキイ郡三千人附属ノ「ロマノフ」スツ領地ヲ賜ハリ
タリト云フ「ドルゴル」キイ著書第二編三十三葉ニ見
ハタリ

十八紀中ニ於テ僥倖ヲ得采地ヲ賜ハリレ者ハ後其采
地ヲ官ニ没セラレタルヲ以テ為ニ屢々零落シ而メ其
采地ハ一方ヨリ他方ニ轉遷スル極リナキニ至レリ即
チ曾テ「メンシ」コフ氏ノ小魯西亜ニ賜ハリシ廣地ハ同
氏ヨリ「ミ」ニハ氏ノ手ニ移リ又同氏ヨリ「ラズウモフ
氏」ニ轉シタリ將官「ル」ミヤンツ「フ」氏ハ其領地ヲ官ニ没
セラレ之ニ代フルニ曾テ「スト」ロ「プ」ヒン氏ノ所有ニ
属セル「ウ」ア「ロ」ス「テ」領地ヲ賜ハラントテ歎願シタリ又大隊長「エ
ゴ」ル「ミ」リ「ユ」コ「フ」氏ノ有地「エ」ジ「エ」邑ヲ没シテ之ヲ大元
帥「ド」ル「ゴ」ル「キ」イ侯ニ賜ハレリ故ニ「ミ」リ「エ」コ「フ」氏ハ

賞勳局

之レニ代フルニ込衛騎兵長九等^官イワン、ブー、マ、チン、
ノ没收セラレタル領地ノ内、スウズダリス、ク郡ヲスト
シツ、オウ、オ、邑ヲ賜ハラン、トヲ出願シタリ、千七百二十
九年ニ於テ^{シフ、ワ、ル、ビ、イ、ボ、ド、オ、ル、コ、ウ、シ、ク}込衛副大隊^ササルテ、コフ、氏内閣正議院ニ出
願シテ、曰ク、臣曩ニ^パートル、トル、スト、イ、氏ノ有ニ属セ
シ領地ヲ賜ハリ、已ニ諸稅ヲ上納シタリ、レカ其後ニ至
リ談地ハ、^ロブ、セン、氏ノ賜ハル所トナレリ、依テ希ッハ
之ニ代フルニ^パレ、ヤ、ス、ラ、フ、ス、ク、郡^サボ、ロ、チ、イ、邑ヲ賜
ハラン、トヲト
十八紀中ニ於テ、殖民采地ヲ下賜セル一途アリ、故ヲ
以テ、遂ニ君^君ノ新地主ヲ成形スルニ至レリ、但シ此新
地主ハ、十六十七兩紀中ノ一世地主、及世襲地主トニ異
ナリ、更ニ之ト何等ノ連結ヲナサ、レ所^所ノモノナリ、而

賞
勳
勳

メ、魯西至一般地主ノ過半ハ其領地ヲ占有ス、レノ初メ
ハ概皆十八紀以内ニアレリ、千七百年中ニ於テ^{ス、ナ、イ、ト、ノ、イ}上等家
格^格ノ貴族^{貴族}三百三十名ヨリ上等官位ニ昇進セル者百三
十六名、并ニ一万四千七百十一名中ノ平等家格ノ貴族
二千八百四十九名、此兩家格貴族ノ合計一万五千零四
十一名アリ、其内二千九百八十名ハ皆共ニ殖民采地ヲ
占有セルモノニシテ、其第一^{カ、ラ、コ、リ、イ}類^類即チ^アブラ、ク、レ、ン、氏、^バレ
マ、コ、フ、氏、^ガル、カ、コ、フ、氏、^ガレ、コ、フ、氏、^コレ、イ、チ、エ、フ、等、以
下其他數名、又第二^アク、サ、コ、フ、氏、^アル、ハ、リ、イ、フ、
氏、^バフ、メ、チ、エ、フ、氏、^ボロ、ジ、ン、氏、^ワル、イ、フ、氏、^ワレ、コ、フ、氏、
ゴ、ロ、フ、ワ、ア、ス、ト、フ、氏、^ドフ、ド、ウ、ロ、フ、氏、^エフ、ア、ノ、フ、氏、^レヲ
ン、チ、イ、フ、氏、^ロフ、マ、エ、ー、ノ、フ、氏、等、以下其他數名ノ家系
ノ者ハ、現今ニ於テモ猶見レ可シ、然リ、而レテ其地主ハ

賞
勳
勳

大魯西亜内地ニアル者少ナキニアラザレドモ十八紀
内外ニ於テ小魯西亜ニ出タル新地主ヲ以テ最モ多シ
トナス而メ家格ノ貴賤ヲ問ハス貴族ノ其領地ヲ三四
世ニ傳讓セル者甚タ稀ナリ唯是ヨリ前千五百十一年
ニ於テ^ルニ^トナ氏ノ賜ハレル^リヤザレスク^ル縣^スパ^リ
ス^ク郡^ホゴ^ロド^スク^邑ノ如キハ之ヲ其子孫ニ傳有シ
テ三百四十五年間ノ久キヲ經千八百五十六年ニ至リ
轉シテ^ルニ^トナ氏ヨリ出タル女系ノ子孫^ボル^デン^ス
コイ氏之ヲ領有セリ此ノ如キノ特例アルハ甚タ稀ニ
メ其他ハ概テ皆テ其地ヲ以テ婚嫁ノ聘物トナレ或ハ
其一族ノ共ニ遺物ヲ受ク^コキ^者ノ間ニ分割配與スル
アルヲ以テ他姓ニ轉有スル^ト往^タ少^ナレトセス^ガク
ストガウゼン氏曰ク農夫僕ニ四百人或ハ五百人附屬

賞
惠
存

ノ地ヲ三十名或ハ四十名ノ地主ノ間ニ分割シテ之ヲ占
有スルモノヲ見タリト又曰ク八十三名ノ地主ノ有ニ
屬スル農夫二百六人附屬ノ一村落ヲ見タル^トアリト
云フ^ホソ^レコ^フ氏^世彼^得見^大帝^時ノ^時ニ於^テモ亦^タ之
レニ類スルモノアリ即チ^ノウ^ゴロ^ドス^ク郡^ウス^タリ
カ一邑ニ農夫二十人アリ而レテ之^レヲ占領スル所ノ
地主ハ七名アリト又他ノ村落ニ於テハ地主ノ之ヨリ
多キモノアレリト云フ
永ク領地ヲ貴族ノ家姓ニ保有シ得ルハ唯タ^マイ^ヲラ
ト^不動^産ヲ^長子^ニヲ以^テスルニ如クハナシ然レ^モ此
^レ讓^傳スル^ノ法^テイ^ヲラ^ト法^ハ魯^國ノ領地社會ニ行ハレ^スレ^テ在^官
奉職ノ社會ニノミ行ナハレ^レト見^ユ系^統貴^族ノ其有
地ヲ以テ子孫ニ傳讓スル^トニ心ヲ傾ク^ルモ千七百十

賞
勳
局

四年癸行ノ一子相統法廢止ノ後ニ至リ已ニ西歐羅巴
ノ系統貴族ノ順序ニ迭接スルヲ以テ漸ク行ハルニ
至ルモノナリ一世^ニ尼松羅伊帝ノ治世ニ方リテワシリ
チコフ氏ノ^マイヲラト法施行ノ^アヲ上申セシハ実行
セラレスレテ魯國ノ系統貴族ハ平等貴族ニ均シク各
家所有ノ土地ヲ更ニ重セサルカ如ク大判事ノ寡ヤ^ウ
ヤセムスカヤ侯如ハ外人縫裁師^シヲ^シンケルナル者ニ
自己ノ著名ナル采邑^ナヲ賣却シタリ其一例ノミナラス
即チ^キイフ^シ迭傍ニアル最初^ルカ^シユ^ウ井^チ氏ニ屬シ後
チ^ヤズボロ^ジコ氏ノ有トナリシ最良ノ^キレ^グル^シチ
領地ハ^クレ^ムス^ク戦争ノ時ニ於テ魯國ニ往來セシ^エ
ウ^レイ^人中ノ一名^キン^ツブ^ウガナル者ノ領スル所ト
ナレリ又^ワシ^リチコフ氏ノ語ニ曰レハ魯國ノ貴族佛

掌
惠
后

京巴里ノ集會上ニ於テハ喋々系統貴族ノ事ヲ論シ或
ハ有無ノ法則ヲ談スルト虽^レ其意ハ固ト風波ノ如ク
ニシテ魯國ニ在リテハ其一族ノ記臆トナス^ハキ^ハ寫^ハ像^ハ
或ハ記録ト共ニ摸斯格府迭傍ニアル其領邑ヲ賣却セ
シ^アアルヲ以テ摸斯格府或ハ聖彼得見有地方ニ於テ
ハ永ク子孫ニ傳讓セル領地ヲ見ル^ル纒^ニ指^テ屈^スル
ノ^ミ而^レテ摸斯格旧府ノ大家偉屋モ亦概子皆官有ト
ナリ彼得見新府ニ於テモ亦貴族ノ貴賤ヲ問ハス領地
邸宅ヲ其三四世ニ遺傳セシモノ恐クハ兩三戸ニ過サ
ル^レト云フ
斯クテ若レ余輩ハ曩ニ魯國貴族ノ占有スル外人ヲレ
テ驚怖セシムルカ如キ廣大采地ヲ得ルノ原由ヲ追攷
スルアラハ必ス其功勞ニ曰テ之ヲ受クルニ非ス唯タ

賞
勳
局

帝ノ恩惠ニ因テノミ拜賜セルモノニ過サルヲ知ルハ
ニ其領地ハ即チ廣大ナルモノニメ唯農夫數十人附屬
ノ地ノミニニアラス時トシテハ千百人附屬ノ領地アリ
メンレコフ氏ノ如キ是ナリ又「シユレメテ」氏有地附
屬ノ農夫ハ「ナツサウ」スダケツヨクノ所有人員ニ均シ又「サル
アコフ」氏「ゴリ」ツ「エシ」氏「ウオロン」ツ「アフ」氏「ホチヨム」キ
「ニ」氏「ラズ」ウ「モフ」氏「バスケウ」井「チ」氏等モ亦皆是ナリ其
他枚擧ニ違アテス今此ニ畧ス
十六紀中ニ於テハ大地ヲ占領セル者甚々少クメ最大
ノ領地ハ皆ナ往昔ノ同盟諸侯及メ其子孫ノ領スル所
トナレリ然リ而メ其諸侯ノ領地ハ後摸斯格存帝ノ所
領トナリ又世襲采地ハ往昔諸侯ノ私有地ヨリ成レル
モノニメ後ニ至リ類族ノ繁殖スルニ從テ之ヲ公有ス

掌
熈
曆

ル故ニ漸々減却シ又當時ノ風習ナルニ因リ帛祭セン
ル為ニ之ヲ寺院ニ寄附セル故ニ從テ減少セルモノナ
リト云フ「ソロウ」エ「エフ」氏著書第九編三百五十九葉ニ
見ユ同盟諸侯ヨリ生出セル系族ノ繁殖支分シタル
即チ下章ニ就テ見ルベレ曰ク「チ」ル「子」ゴ「フ」ス「ク」諸侯
ノ系統ヨリ出ツルモノ三十四類族ド「スタ」ロ「ドウ」ブ「ス」ク
諸侯ヨリ支分スル十五氏「ヤ」ロ「ス」ラ「フ」ス「ク」諸侯ヨリ支
分スル三十八氏「ロ」ス「ト」フ「ス」ク諸侯ヨリ十二家寺其他
此ニ畧ス而シテ其著名ナル土地ハ如何シテ貴顯貴族
ノ所領トナリタルヤ曰ク「史」上ニ因テ見レハ領地ノ事
ニ僅カニ意ヲ止メタル「フ」レ「バ」ニ「コ」フ「君」ノ「決」論「ト」虽「氏
巴」ニ其土地ハ極メテ多少ノ定限アリシトナシタリト
又博士「セル」ケ「ウ」井「ケ」氏ハ「フ」レ「ブ」ニ「コ」フ「氏」ノ「論」意「ト」趣「ヲ

賞
勳
局

異ニシテ甚々確固ナル意見ヲ論説シタリト云フ余輩
 ハ未タ其論意ヲ可否ヲ知ラスト虽氏「コトレセン氏」ノ
 下章ニ明説セシ所ヲ以テ觀レハ「フレゾニコフ君」ノ決
 論ハ其至當ヲ得ナルモノナリ即チ「司膳官」「スリニク官」「スリヤフ官」衣服「スリヤフ財」
御馬ノ「ドッロフ手」貴族「シヤク書記官」「シリウエ侍童」及「都會貴族」「シヤク韃靼族」及「シヤク韃靼
 人」「ドッロフ倍臣」「オニシチ司既者」「トレマナ通解者」「ドッロフ寡婦」「デクガフ原女」等其官位ト光榮ト
 ニ應シテ各々二人三人四人五人ヨリ七千人乃至一
 人一万五千人附屬ノ地アリ其他滿期免職ノ縉紳ハ
 殆ント一千七百人ニ近キ附屬ノ地ヲ賜ハレル者アリ
 又其他唯百人乃至二百人附屬ノ地ヲ賜ハレル者アリ
 十七紀中ニ於テ「ロマノア氏」ノ初代帝王ノ大度ニシテ
 惜ムナク下賜セシ「アル」ヲ以テ一万五千人ヨリ一
 七千人ニ至ル農夫附屬ノ土地ヲ占領セル地主ヲ生シ

タリ然レド余輩碩「フ」ニ貴族有地ノ大半ハ到テ十八紀
 中殊ニ女帝「悦」加「ケ」利「リ」那「ナ」二世及ヒ一世「バ」維「ウ」兒「エ」帝「テ」ノ治世
 中ニ下賜セシモノナラン然レド又貴族血統子孫ノ丹
 精ヲ尽シテ漸々求集セル農夫數千人附屬ノ廣地ハ之
 ト異ナルモノナリ
 千八百零一年ニ於テ第一世「アレキ」サ「ンド」ル「ル」帝「ハ」殖「民」
 采地ヲ下賜スルヲ全ク止メ一時一貴官ノ殖民有地ヲ
 并賜セン「フ」ヲ出願セル者アリ帝乃チ之ニ回答ノ一書
 ヲ下シテ曰ク魯國ノ農夫身クハ今地主ノ有ニ屬シ若
 役ヲ受ケ貧ニ困ミ且ツ汚耻ヲ蒙レヌモノナリ是故ニ
 朕今ヨリ後チ誓テ此不幸ナル者ノ負數ヲ減シテ加殖
 スル「フ」ナク且ツ何人ヲ問ハス農夫ヲ以テ其私有トナ
 サシメサレノ制法ヲ出サン「フ」切望スルナリト其後

ニ至リテハ殖民采地ヲ願フ者アレハ之ヲ下賜シ其私
 有トナサスニ止メ更ニ之ヲ貸附スルモノト定ム又千
 八百零三年ニオリ帝命ヲ以テ殖民ナキ新魯西亜地方
 上長官ニタフアヒツユル及上等士官フアルマヒツユルニ分與セシメテアリ即チ上長官
 ニ各々千デシヤチン上等士官ニ各五百デシヤチンノ
 土地ヲ以テセリ
 此ノ如ク殖民ナキノ土地ヲ分與セル後チ十九紀中ニ
 於テ其分與ノ法最モ公行セラレ相統テ殖民ナキノ土
 地ヲ賜給レ當今ニ至リ遂ニ魯國ノ四域ニ達セリ

第三章

余輩既ニ前章ニ於テ貴族ハ如何ナル勤務ヲ奉シ且ツ
 其勤務ノ為メニ如何ナル報賞ヲ得タルヤヲ論述シタ
 リ是ヨリ貴族負擔ノ修學義務ニ及ハントス曰ク貴族

ノ子弟ヲシテ修學セシメンカ為メニ海外ニ派遣シタ
 ルハ十八紀ノ終末ニ始マレリ而シテ其最初ニ於テハ
 内閣司膳官ヨリ伊太利國ニ二十八名英蘭ノ兩國ニ二
 十二名ヲ遣出シタリ然レ氏其過半ハ千六百九十七年
 ノ初メニアレリ同年八月ニ於テ彼得見大帝ノサアル
 ダムヨリウヰンニウス氏「ウヰンニウス氏ハ蘭人ニレ
 テ魯國ニ表仕スル者ナリ
 ニ寄送セル一書ニ曰ク我ニ先ツテ和蘭國ニ派遣セラ
 レシ司膳官ハ既ニ羅針盤「ロムパノ術ヲ修メテ海上ニ依ラヌ
 陸地ニ回テ摸斯格府ニ帰着センヲ一旦暮ニ是望メリ
 然レ氏我水師提督某ハ之レニ其止マルハキヲ命レテ
 其帰朝ノ念ヲ絶シメタリト云フ又學術修業ノ為メニ
 海外ニ遣ハサレタル諸子ニ其父母ヨリ巨額ノ金員ヲ
 贈リシカ故ニ諸子皆逸遊奢侈ニ流レ隨意怠惰ニレテ

學術ニ從事スル者甚々少シトス是ニ於テ彼得見大帝
千七百十年ニ於テ令テ下シ海軍省ヲ經ズレテ海外ニ
金員ヲ送致スルヲ嚴禁セリ然レハ海外留學ノ貴族ハ
學術ニ從事スル到底不勉強ヲ免レサリシト又千七百
十五年ニ於テ「^ゴノン、ゾ」トフ氏仏國ヨリ彼得見大帝
ニ送呈スル一書ニ曰ク若レ陛下「^リヤザン」スク縣^{アル}大教^イ
主^シラレテ中等ノ者貴頭ノ者ニアラスヨリ羅甸學生ヲ
撰擧セシメハ不可ナルナカレ「^レ」即チ是貴頭ナル者
ハ何處ニ於テモ勞苦ヲ賤惡スル故アルヲ以テナリト
パカルスキイ氏著書第一編百五十七葉然リト虽ハ彼
得見大帝ハ敢テ貴頭ナル者ヲ海外ニ遣出スルヲ停止
セサリキ千七百十六年ニ於テ彼得見大帝ノ自書セ
ル文ニ曰レハ「^ウエ子ツヤ國ニ於テハ我國人ヲ海兵ニ

賞勳局

徵募スルヲ好ミ佛國ニ於テモ亦々好テ之ニ入ル、
由ノ一報ヲ伊太里國ヨリ得タリ此ヲ以テ彼得見府ニ
於テ學生中ヨリ貴族子弟ノ最モ善キ者六十名ヲ擧擧
シテ「^レ」イウエリ地ニ遣リ夫ヨリ之レヲ乗船セシメテ
ウエ子ツヤ國佛國英國ノ三國ニ各々二十人ヲ分テ遣
出ス「^ハ」キヲ命シタリト見ユ然レハ西歐羅巴ニ在留セ
ル魯國ノ幼年貴族ハ大博士「^ノ」ロウ井イ氏ノ論述セレ
如ク恰モ東歐羅巴ノ山林曠漠ノ地ニ生長シタル者ノ
如キ擧動ヲナセルカ故ニ「^コ」ノンゾ「^ト」フ氏ハ常ニ此
情態ヲ帝ニ上奏シタリ即チ千七百十七年ニ於テ同氏
ノ帝ニ奏呈セル一啓ニ曰ク「^マ」ルジアルテ又トル君ハ
臣ヲ其家ニ招キ臣ニ告クルニ我魯國ノ海軍下士官寺
ノ「^ド」ウロシ「^ノ」地中海沿岸ニ於テ暴擧ヒタル暴行亡狀ノ

賞勳局

事ヲ以テセリ其言ニ曰ク彼輩ハ彼地ニ於テ互ニ惡口
シ又相毆鬪シテ止マズ故ニ其擄提ノ斂ヲ收集シタリ
ト而シテ其暴行亡狀ノ如キハ實ニ當地卑賤ノ者ト虽
ドモホタ曾テ如此暴舉ヲナサ、ル所ノ醜狀ナリト言
ヘリト又同年九月ノ新谷ニ曰ク海軍下士官「グレボフ」
ナレ者同官「バリヤチンスキ」氏ト相激鬪シ遂ニ劍ヲ
以テ之レヲ刺殺シタリ故ニ「グレボフ」ナル者ハ其罪科
ニ曰リ如今囚獄ニ下サル而シテ海軍少將「某氏」ハ之レ
ヲ處置スルノ如何ヲ知ラス何トナレハ唯互ニ爭論シ
或ハ相誹謗スル者ヲ屢スルノ例屢々アレリト虽氏未
ダ曾テ其刺殺ヲ公スルノ例ナケレハナリト言ヘリ
ト又貴族少年ハ學術修業ノ為メ海外ニ派遣セラレ
以テ甚々其困難不幸トナセリ曾テ「ワシ」イ、ワレリウ

井テ「ゴロウ」井「シ」氏海外ニ遣サレ時ニ於テ言ハルアリ
曰ク甚々困難不幸ナリト故ニ之レヲ免レシカ為メニ
時トシテ僧侶ニ入扶セントスル者アリ例ハ「ウ」ワロ
ゴトス「フ」縣ノ一地主「イ」ワン、モルコ「フ」ナル者曾テ航海
學修業ノ為メニ「ウ」ユ「マ」ツ「ヤ」國ニ遣サレレカ陰ニ彼地
ヲ脱シテ魯國ニ歸リ而シテ彼得兒府ノ一寺院「イ」ラサ
ニ入り髮ヲ削リ僧トナラントシタリ然レ氏魯教修道
ノ寺院ニ於テハ素ヨリ海外留學ノ逃レ來ル者ヲ救助
隠蔽スルノ法ナキヲ以テ大帝直ニ之レヲ其寺院ヨリ
出シ再ヒ派遣シテ航海學ヲ講習セシム「キ」ヲ命レタ
リト云フ「ソ」ロウ「井」イ「フ」氏著書第十七編三百零六葉
彼得兒大帝ハ貴族子弟ヲ外國ニ派遣シテ修學セシメ
又本國ニ在ル貴族ノ子弟ヲモ常ニ修學セシムル「フ」ニ

賞勳局

注意セリ然レハ「カニ」ロフ氏ノ説ニ因レハ居身ノ貴族子弟ハ當時ニ於テ文學ノ切要ナルヲ了知セリト虽モ讀書習字ヲ能クスル者ハ唯僅々タルノミト千七百十四年ニ於テ英學校中ヨリ各縣ニ其學生數名ツ、ヲ派遣シ大教主ノ第宅或ハ寺院ニ於テ學校ヲ開設レ十年以上十五年以下ノ貴族子弟ヲ入校セシメ數學及測量學ノ一ヲ修學セシムヘキヲ命シタリ而シテ其數員ハ授業ノ時ニ於テ其生徒ヨリ授業料ヲ收受スルヲ能ハスレテ唯卒業ノ免狀ヲ生徒ニ與ヘテ之ヨリ一圓ツ、ヲ領收スルモノトシタリ然リ而シテ其數學測量學ノ幾分カタ修業セサル貴族ニ婚娶スルヲ許サス故ニ學校卒業ノ免狀ヲ有スル者ニアラサレハ僧侶モ亦々檢要ノ式礼ヲ授クル能ハサルモノト定メリ又貴顯貴族

及縣令其他諸長官ハ其子弟ヲ^{齡十年}彼得兒府ノ學校ニ入學セシムヘキモノトシ若シ其父母ノ忘リテ之ヲ入學セシメサレアルハ其父母ヨリ罰金ヲ償納セシムヘキモノトナス又近衛隊附属ノ學校ヲ創設シ唯其隊中ニ編入セシ幼年輩ノミヲシテ修學セシメ其他ノ幼年輩ハ他ノ諸學校ニ入學セシムルモノトス而レテ彼得兒大帝ハ貴族少年ヨリ大學諸校ニ入學スベキ生徒ノ定員ヲ限レリ即チ彼得兒府大學校ニハ三百名模斯格府大學校ニハ五百名ゲラデシヤ校ニハ三十名ナリ又大帝ハ親レク注意ヲ加ヘ貴族少年ヲ分配レテ入校セシメタリ水師提督モルトウ^井チ氏ノ其記録ニ曰ク大帝ノ親レク貴族ノ試験ヲ終ルノ後チ余甫メテ十三ナリシ時測量學修業ノ為メニ^ノウゴロト學校ニ入學セ

賞勳局

シメラレ而後チ八十四名ノ貴族ト共ニ雷學ノ為ニナ
 ムオニ遣ハサレ其年ノ十月雷學生悉ク聖彼得見府ニ
 帰朝スバキノ勅命アリ又之ニ莫斯科格有航海學校ヨリ
 数名ノ生徒ヲ加入シテ共ニ大學校ニ入學セシメラレ
 リト彼得見大帝ハ一々ニ貴族ニ嚴令ヲ下レ其子弟ニ
 修業セシムヲ命ジテ之ヲ遵守セシメンコトニ注意
 シタリ又一令ヲ下レ貴族子弟ヲレ航海學ヲ講習セ
 シメンカ為メニ莫斯科格有航海學校ニ入學セシムベキ
 ヲ命セリ然レモ其父母等ノハ帝命ヲ奉セスレテ其諸
 子ヲ唯地方ノ小学校ニノミ入學セシメタルヲ以テ大
 帝大ニ憤怒ヲ發シ其貴族生徒ヲ該校ヨリ彼得見府ニ
 送致セシメモイカ^ル用水ヲ儲フニ於テ防堤ノ掘ヲ採
 シメナリ此時ニ當リテアブラクレン^侯ハ其所ニ到リ

最早大帝ノ「パンコウオイ」庫ニ逃ツク比セテ察知シ「ア
 ン」^紐牌ト大禮服トヲ脱シテ之ヲ竿上ニ掲ケ自ラ
 走リテ之ニ赴キ共ニ抵抗ノ動作ヲナセリ既ニシテ大
 帝此ニ逃ツキ親シク問テ曰ク「マドル、マトウエトウ井
 アブラクレン」氏ヨリ汝ハ水師提督ニシテ賞勳牌ヲ帶フ
 者ニ非スヤ汝ナ何ソ此働作ヲナスヤト「アブラクレ
 ン」氏大帝ニ對テ曰此ニ抵抗スル者ハ皆臣カ甥見孫子
 ノミ臣ハ如何ナル人ゾ又臣ハ生來何等ノ尊榮ヲ有ス
 者ナル乎ト云ヘリト
 余輩既ニ前文ニ於テ魯國ノ幼年貴族ハ留學ノ為ニ外
 國ニ遣出セラレ其學業ニ從事シタルノ如何ヲ論シタ
 リ内國ノ學校ニ入りテモ亦甚々其學術ニ迂ナルヲ論
 述セントス曾テ魯國幼年貴族ハ其田舎ニ在ルヤ遊情

驕奢ニノミ是レ泥ミ其齡十八年ニ至ルマテ無我無心
ノ幼稚ト同レク筭セラレ常ニ家僕傳婢ノ傍ラニ在リ
テ日ニ逸樂ヲ事トスル者ナレハ學校ニ入リ學術修業
ニ迂遠ニシテ且ツ艱難勞苦ヲ嘗ムル能ハサルモ亦タ
敢テ恠シムニ足ラレ所ナリ
彼得兒大帝ノ後嗣ニ至リテモ亦大帝ノ遺志ヲ続キ貴
族修學ノ事ニ注意シタリ然レモ唯タ恐クハ其寬嚴ノ
差等アラシムヲ余輩ハ女帝悦加^{ユエカ}埤利^{ヘリ}那一世ノ時ニ於
テ貴族ノ修學ニ関スル命令ヲ見ル^ミト屢々ナリト虽モ
其最モ之ニ注意スルノ嚴ナル女帝^{メカ}安那^ア沃諾^ウ乎^ハ那^ナノ治
世ニアリ是レ他ナシ帝ノ輔佐^ミニハ氏ナル大賢功
臣アル故ヲ以テナラン即チ其治世ニ於テハ益々諸縣
ニ學校ノ員數ヲ倍增シ貴族少年ヲシテ入学セシムル

ト益々隆シナラシメタリ而メ其學校ニ於テハ文學技
術ノ餘課ニ兵法ノ実地ヲ教授シ又生徒ノ貧困ナル者
アルハ兵卒ノ子弟ニ均シク之ニ學費ヲ給與シテ修學
セシメタリ而メ又陸軍^{スホア}貴族^{トノイリヤトスナトコル}學校ヲ設置シ定員ヲ限リ
テ貴族ノ子弟ヲ入学セシメ^ア大砲^ア學校^トヲ創立シ敎章局
長ヲシテ貴族ノ子弟七百名ヲ撰ビ之ヲシテ該校ニ入
學セシメリト云フ
余輩前章ニ論述シタル十七百三十七年發行ノ貴族少
年ニ試験ノ順序ヲ示スノ法令ニ因レハ貴族少年十二
年ニシテ讀書習字ヲ諳識シ第二試験ヲ受クバク又十
八年ニ至リテ算學測量學ヲ能シ加之魯教各ノ敎章ヲ
諳知シテ第三試験ヲ受ク^レ而メ若シ其父兄自家ニ
於テ其子弟ニ尚修學セシムル才法アリテ之ヲ請願ス

ル時ハ第三試験ヲ終ルノ後其子ヲ自家ニ受クルヲ得
ハシ而メ其他ノ貴族少年ハ大學校ニ入學シテ地理學
築城學、歴史學ヲ修學スヘキモノトナセリ然レモ第三
試験ヲ受クルノ期ニ至ルマテ定課ヲ學ビ得サル者ハ
服役無期ノ水夫タルハレ然リト虽モ其貴族少年ノ父
母ハ此法令ヲ遵奉シタルヤ否ヤ余輩未タ之ヲ知サル
ナリ千七百四十三年教部省ニ於テ元老院ニ上申シテ
曰ク魯國貴族又諸官員ハ其子弟ヲレテ^{カテヒ}罷教ヲ講習セ
シメスレテ唯々^{ナリク}聖堂^ク勤書、^{アサレ}聖詠^{テリ}經ノミヲ講習セシムル
カ故ニ其子弟ハ全ク魯教ノ本原ヲ知ルヲ能サルモノ
ナリト此ヲ以テ^テ設院ニ於テ法令ヲ出シ其父母ノ義務
トナシテ必ス^テ罷教ヲ講習セシムヘキヲ命ジタリ而
若シ此義務ヲ遂クザル者アルハ^ハ諸縣ニ於テハ其縣

令ニ命ジテ其父母ヨリ罰金ヲ徵收セシメ諸郡ニ於テ
ハ將校ヲシテ之レヲ徵收セシム但シ其罰金額ハ^ニ貴
族ヨリハ其人毎ニ各十圓ト定メ其餘ハ皆ニ圓ツト
定ム
模斯格府大學校ヲ創設シタルヲ以テ勤務ト修學トノ
兩義務ノ間ニ^ニ頓頑ノ事情ヲ生シタリシガ^イワ^ン、^イワ
ノウ^ナ、^シワ^ト、^ロフ^氏ノ之レニ參^兵シタルヲ以テ遂
ニ開明ノ利アルヲ決ス模斯格府大學校長^シワ^ト、^ロフ^氏
氏一時元老院ニ^ニ獻議シテ曰ク臣伏テ^ニ惟^ミルニ^ニ後[・]哲[・]學[・]
士ヲ輩出スル為メニ一大障礙トナスモノハ則チ貴族
子弟ノ官職ニ就カシカ^ニ為^メニ必スシモ文學ヲ勉ムヘ
キ年齡ニ於テ只時機ニ投シテ種々ノ方策ヲ回ラレ全
ク學業ヲ終ラスシテ其官職ニ就クノ弊ナリト^レワ^ト

ロフ氏ノ参典シタルヤ大ニ衆人ノ尊賞スル所トナル
即チ曩ニ兵卒トナリ隊中ニ編入セラレシ貴族少年輩
ハ其兵役ヲ免レテ文学講習ノ為メニ摸斯格府大學校
ニ入學セシメラルニ至レリ千七百五十四年ニ於テ
オレウキジン氏ハ甫メテ十年セメノフスク隊中ニ兵
卒ニ編入セラレシカ同年ニ於テ除隊セラレテ大學校
ニ入學セシメラル而シテ同氏ノ隊中ニ在ルヤ其熟練
ニ因テ士官ニ登用セラレ大學校ニ入りテハ^{ストデント}大學生徒
トセラレタリト云フ然リト虽ヒ曩ニ隊中ノ兵卒ニ
編入セラレ後ニ大學校ニ入り大學生徒トセラレシ貴
族少年ヲ職務ニ用アル所アレハ故章局長其少年ヲ大
學校ヨリ要求スルヲ得タリト云フ千七百五十六年摸
斯格府大學校ニ於テ元老院ニ上申シテ曰ク當校ノ貴

賞勳局

族生徒ハ大ニ心ヲ文学ニ傾ケ且ツ大ニ其上達進歩ヲ
顯ハスニ至レリト然レハ後チ其生徒ノ過半ハ未若年
ナルニ勤務ニ配置セラレ其殘餘ノ者モ亦々時ヲ追テ
漸々勤務ニ入ルヲ以テ悉ク大學校ヲ退出スルニ至リ
遂ニ縉紳及ヒ貴族中ニ博學ノ俊士ヲ輩出スル能ハサ
ルニ至ルヲナラ以テ摸斯格府大學校ニ於テ故章局ニ
上書シテ曰ク巴ニ大學校ニ入學セシメタル貴族生徒
ヲシテ元老院ニ於テ之レヲ修學セシムル幾年ニシテ
可ナリトスルニ至ルマテ退去スルヲナカラシメ。又一
タヒ大學校ニ入レテ修學セシムルキヲ決シタルモノ
ハ再ヒ之レヲ退クル能ハサルモノトシ又巴ニ職務ニ
在ル者ヲモ之レヲ退クル能ハサルモノトスルレト又
本務ニ在リテ且ツ大學校ニ入り修學センコトヲ願フ者

賞勳局

アル片ハ之レヲ許シテ可ナラシムカト元老院ニ於テ此
上書ノ主意ヲ深ク重シ大學校ニ一令ヲ下シテ曰ク貴
族少年七年ヨリ八年ニ至ル試験ヲ受ケシ者ノ入校ヲ
願フ片ハ之レヲ許シテ可ナリ又巴ニ入校シタル生徒
ノ人員ト新ニ入校スル人員トヲ敎章局ニ通知スル
レ而レテ之レヲ大學校ニ於テ十六年若クハ二十年ニ
至ルマテ必ラス修學セシムルニ然レバ又二十年以上
ニ至ルマテ修學スルヲ願フ者アレハ之レヲ元老院ニ
上申シテ其許可ヲ得ルニ又既ニ文武ノ兩務ニ編入セ
ラレレ在學ノ少年ヲレテ唯官位昇進ノ一ニノミ願念
シテ其學業ヲ怠慢スルヲナカラシムルニ是レ即チ
大學校及ヒ其他ノ上等學校ノ生徒ニ附與スル學級ノ
生シ來ル本原ナルモノナリ

貴族ノ文學ヲ講習スルハ其一大義務ナルニ拘ハラヌ
貴族ノ間ニ文學ノ擴充スルヲ却テ甚ク滯滞シタリ殊
ニ十八紀中ニ於テハ上等貴族ノ間ニ無學文盲ノ徒ヲ
輩出セシテ猶コトシセン氏時世ノ縉紳ノ間ニ於ケル
カ如クナリシト云フ此故ニ十八紀上半ニ於テハ魯國
ノ縉紳貴官ノ開明ニ進歩シタル何レノ域度ニ在リタ
ルヤハ女帝^{「アンナ」}率^{「イヴァ」}沃^{「ウ」}岳^{「ク」}諾^{「ナ」}乎^{「ナ」}那^{「ナ」}未^{「ナ」}世^{「ナ」}ノ一令ニ曰テ其結果
ノ如何ヲ觀ルニ足ルハレ千七百三十七年ニ於テハ議
長ヲ命シ一年ニ兩回其學生徒ノ全員ヲ試験セシメタ
リ又千七百四十年ニ於テハ其試験ヲナスノ期ニ至リ
元老院ニ於テ一名ノ議長ト^{「ガチラ」}陸軍中將^{「レエフ」}チエ^{「レ」}子^{「エ」}イ^{「ユ」}シ
ユ^{「ユ」}フ氏トニ命シテ之ヲ試験セシメタリ然リト雖氏陸軍
中將^{「チエ」}チエ^{「ユ」}子^{「イ」}イ^{「シ」}ユ^{「ユ」}フ氏ハ兵法實地ノミニシテ他ノ

學術ニ通曉セサルヲ以テ他ノ議長ニ均シク之レヲ試
驗スルニ於テハ更ニ其功ナク徒ニ無益ナルニ過サル
ノミ唯内閣議官ナレバシキニ此ハ元老院無ニノ委員
ニシテ能ク此事ニ巧達レタリト云フ此後ニ至リ元老
院ニ於テ女帝安那沃亞諾乎那ニ上奏シテ曰ク自今試
驗ノ事ニ任スルニハ最モ能ク其學業ニ明達ナル者ヲ
擧テ之レニ任スルニ如カサルヘレト是ニ於テ女帝英
斷ヲ以テ法ヲ定メ試験ヲ施行スルニ陸軍大元帥「ミ
ニハ氏ト海軍學校及ヒ築城學校教官ノ席上ニ於テス
ハク而シテ之レニ議長ヲ用ユ可ラサルモノトナセリ
テレバウ井シ氏魯國有名ノ證徴スル所ニ目レハ「
ロ子ツク縣裁判長某氏テレバウ井シ氏ノ知人ナリ「
イ氏ハ能ク文學ヲ了解セズト云フ又貴族ノ上等社會

ニ於テ婦女ノ開明ノ下域ニアルノ尚ホ之レヨリ甚シ
キモノアリテ十八紀中ニ於テハ豪富貴族ノ婦女ニレ
テ文字ヲ知レルノ漸ク纔ニ或ハ全ク無學文盲ノモノ
ヲ認知スルノ甚々難キニアラサリキ例「ハイインゲリ
ガムツド氏ノ祖母ハ農夫ヲ有スルノ一十余人ナリ而
シテ自國文字ヲ筆讀スルヲ知レル甚々僅カナリシト
云フインゲルガムツド氏ノ記録三葉「フランウ井ジン
氏ハ其幼年ノ時ニ於テ平等貴族ノ開化文明ニ不進歩
ナル意見ヲ顯ハシタリ然レバ其貴族ハ縱令汝々トシ
テ文化ニ勉ムルモ學校ノ甚々稀ニシテ憐ムヘレ教育
スルニ奇ナク遂ニ其意ヲ達スル能ハサルニ至ル之レ
甚々愁歎ニ堪ハル所ナリト又摸斯格有新設中學校内
ノ教員輩ハ生徒ノ致タトシテ文學ニ勉勵シ屢々讀書

賞勳局

子多シハ文盲貴族ナレヲ觀ル即チ摸斯格府貴族代議
人^トヲトル、イワシウ井チ、バニシ氏ノ名簿中ニハ文盲
ノ貴族ヲ見ル^トナク却テ其記名スルノ功美ナル魯國
貴族ノ萃ト云フ^トキナリヌ、ボロフスク郡ノ名簿中ニ
ハ記名スルニ文字ナクシテ他ノ代書ヲ請ヒシ者三名
コストムスク縣ノ名簿中ニ無學文盲九名アリテ、ボ
ホルナク官^名イワシ、アシトコフ氏之レニ代書セリ^トミ
ハイロフスク郡ニ於テハ代筆ヲ請フ者十八名アレリ
スウジスラフスク縣ニ於テ同ク代書ヲ請フ者十一名
メドイレスク郡ニ於テハ文盲無筆八名アレリ^トリエビ
ムスク郡ニ於テハ九名アレリト云ヒ又々其他^トセロス
ラフスク縣ニ於テモ四名アレリ其他^トハ此ニ畧ス
小魯西亞貴族ノ開明ハ何ノ域ニアルヤ唯概見ヲ以テ

學
薫
居

之レヲ論スルハ其甚々高尚ノ域ニアルモノト認ム
ルヲ得^トシ、キイヲブラトス^トク大學校迄辺ノ周圍ニ居
住スル并多ノ貴族ハ其開明ニ進歩スルヲ得タルハ畢
竟大學校ノ影響ニ因ラ然ル所ナリ^ト大將輔官^トマレウ井
チ氏ノ記録ニ因レハ同氏ハ其諸子ノ教育上ニ甚々注
意シタルヲ觀ル即チ千七百四十一年ニ於テ或人ニ諸
子ノ教育ヲ請ホレ之レニ謝スルニ年々金八圓ト靴三
足、足袋ニ足トヲ贈ルノ定約ヲナセリト又翌年ニ於テ
ハ外國人^トゴルバ氏ナル者ニ請ヒ独逸羅甸ノ國語ヲ諸
子ニ教授セラシ^トテ又其記録中ヲ觀ルニ同氏ハ書籍館
十圓^トヲ以テセリト又其記録中ヲ觀ルニ同氏ハ書籍館
ヲ設ケテ其内ニミリトシ各^トアリスト^トテリヤノ政事
各^トブジテリノ字各^トロル^トシ及ヒ佛國新聞ヲ蔵セリト

賞
勳
局

云フ又同氏ハ羅甸語法ノ一各ヲ著述シタリト又其子
テミトラーレシク氏ニ講讀セシメシカ為メニ「テレカク
ヲ求メタリト其他諸日誌等ヲ畜ヘタリト云フ又「ステ
パン、ブトウ井チ氏ハ千七百四十六年ニ於テ其子「ヤ
トルニ遺命シテ曰ク汝テ語音ヲ習練スルニ年ヲ・經ル
ニアラサレハ独語佛語ノ講學ニ就クヲナカレト又小
魯西亞貴族ハ其子弟ヲ教育センカ為メニ屢々海外ニ
留學セレメタル「アリキ即チ千七百四十五年ニ於テ
也^{ブシテコークオイ}田兵將「アレドレイドウニシ、ハセコフスキイ氏ノ諸
子ヲ修學ノ為メニ「ブルシヤ國ニ又^{ゲネラリイボトスカセビ}大將輔官「イワン、ス
コロパトスキイ氏ノ長子ヲ「バロスラウリニ留學セシ
メン「ア小魯西亞陸軍各記局ニ出願シタリ余輩又也
田兵將「ラウレンチイ、ボロズドシ氏ノ其歴史中ニ載ス

掌 燾 存

ル所ニ回リテ小魯西亞貴族ノ間ニ開明ノ擴充セシ
ニ関セル一奇說アルヲ見ル即チ同氏ハ常ニ甚々讀書
ヲ好ミ各籍各類ヲ貯蓄スル「頗ル多シ故ニ其妻千七
百五十四年ニ於テ言ハル「アリ曰ク滿家皆ナ各籍書
類ノミニシテ甚々煩雜スルニ至ルト又「チユル子ゴフ
スク縣貴族ハ其代議人「イワン、ミハイロウ井チスコロ
パードスキイ氏ニ請求各ヲ出セリ是貴族子弟教育上
ノ缺乏ト學校設立ノ切要トノ請求書ナリ即チ貴族學
校ヲ設置シ該校ニ於テ小魯西亞貴族ヲレテ悉ク・修學
セシム「ク但シ高等ノ學術ヲ修學センカ為メニハ別
ニ大學校ヲ設ケ又婦女ヲ教育スル為ニ特別ノ學問行
ヲ設ク「ブレト「ブルホフスク郡ノ貴族モ亦々同ク大學
校設立ノ「ヲ請願シタリ又「アレヤストラフスク縣貴族

賞 勳 局

ハ小魯西亜税関ノ收納金ヲ以テ大學校ヲ同縣ニ設立
 セン^トテ請願シタリ加之^テチユル子ゴフス^ク縣ノ例ニ
 倣^ヒ小魯西亜ニ貴族學校ト貴族女學校トヲ設立セン
 ン^トモ請願シタリト云フ
 又小魯西亜貴族ハ千八百零一年ニ於テ^ア亞登山^ト見一
 世ニ上申レテ曰ク^エ帝^リ悦加^ナ利^ナ陛下ハ千七百八十
 六年ニ於テ^チチユル子ゴフ^ノ縣ニ大學校ヲ創立スルノ遺
 約アリ伏テ願ク^ハ今之ヲ果サン^トテ而^シ其築營ノ
 經費ハ貴族中ヨリ上納ス^ルレト
 余輩既ニ前文ニ於テ魯國貴族ノ開明ハ十八紀中ニ於
 テ甚タ下等ノ域ニアリシヲ論述シタリ然レ^ハ十九紀
 ニ至ルニ及テ漸々進歩シテ高等ノ域ニ至リ帝^ア亞登山^ト
 堙^ト見^レ一世ノ治世ニ方リテ^ウ陸軍教育^ト校^ト塾^ト教育^ト隆^ニ

行ハレ貴族ハ争テ佛語ヲ習熟シ魯國ノ近衛隊ニ編入
 セシ^トテ昂メリ帝^ニ格^コ羅^イ一世ニ於テ陸軍教育及ヒ
 校塾教育ト大學校教育トノ間ニ競争ヲ生スルニ至レ
 リ貴頭豪富ノ兩貴族ハ大學校ニ入學レテ唯己ノ志ヲ想
 ン^トテ徒ニ種族ヲ區畫レ^ル大學ノ高尚ナル由縁ヲ明知
 セス^ト輒^ニ於テ大學生徒ノ社會ハ^ア貴頭^ト共和^ト兩黨ニ
 分裂スルニ至リレハ世人ノ能ク知ル所ナリ而シテ其
 貴頭黨ハ外飾ヲ以テ其社會ヲ辨別セン^トテモ昂メ^テ襟^カ
 色^ニ帽^ニ形^ヲ異^ニシ又佛語ヲ用ヒ文學ヲ輕視スル等ノ風
 ヲ以テ其社會ヲ別ニセリ而シテ千七百九十年ニ於テ
 大學校ニ入學セシ貴族子弟ヲ以テ開明ノ高度ニアル
 モノト称スルト^モ氏^ト貴族社會ノ一般ヲ概論スル片ハ
 未^ダ必^ズスレモ開明ノ高度ニアルト^モ諒言スルヲ得サル

モノナリ又「コノノフ」氏ノ一奇説アリ但シ同氏ハ「ド
ゴブウ」郡貴族ノ首長ナリレ「四十余年間」ナレヲ以
テ殊ニ「駐」貴族ノ情実ヲ察知セシ故ニ一時皇帝ニ上
奏セレ「ア」レリ曰ク貴族ノ誇謾自負スル「」猶ホ又佳
古ノ弊習ヲ脱セス而レテ其外面ヲ一瞥スレハ恰モ開
明ノ人ノ如シト虽モ其実意ニ至リテハ甚々開明ニア
ラズシテ其學セ得ル所ノ文學モ亦未ダ開明ヲ爲ルモ
ノト稱スルニ足ラサルナリ又或ハ「政」洲各國ノ言語ヲ
使用シ或ハ人権自由ヲ喋々主唱スルアリト虽モ其内
部ハ到底往昔ノ縉紳タルヲ免レサルモノナリト「ガ」
ストガウゼン」氏ノ説モ亦之レニ類スルモノアリシト
云フ

第四章

十六十七兩紀ニ於テ勤勞社會ヲ創成シテ義務ヲ負擔
セシメ之レニ報賜スルニ一世采地ト世襲采地トヲ以
テヤシカ故ニ其社會ハ分裂シテ就官ト領地トノ兩社
會トナリ互ニ方向ヲ異ニスルノ一大影響ヲ其間ニ生
セリ即チ勤勞ヲ主トスルノ社會ハ「模」斯格府ニ集マル
ニ至レリ何トナレハ帝官ハ同府ニアリ同府ニ於テ各
々光榮ト官位トヲ拜賜シテ後チ其任所ニ派遣セラレ
ラ以テナリ然レハ該社會ハ初メ采地ニ固著スルノ念
ナカリシカ遂ニ領地社會ノ如ク村里ノ自由ナル生活
ト戸主ノ安樂ナル作業トヲ欽慕シ皆争テ村里ニ赴キ
首府ノ第二トナラシヨリ寧ロ村里ノ第一トナルニ如
カスト言フニ至レリ故ニ大博士「グ」ラドフスキイ氏ノ
著ハヤシ地方行政ノ事ヲ記載スル一書ニ都郵相慕フ

ノ情状ヲ巧寫レテ曰ク十七紀ノ終末ニ於テ貴族ノ村
里歛慕ノ意盛ナルニ從テ首府ヨリ村里ニ赴ク者益々
倍スルニ至リ勤務ノ重難ナルニ從テ村落ノ生活ヲ慕
フ₁ホク益々甚タシクテ遂ニ勤務ノ人ヲレテ減少
スルニ至ラレム是故ニ刑罰_{答罪及ヒ所有ヲ嚴重ニス}
ルト虽ヒ更ニ之レヲ頑ニスレテ其怠慢退役脱走潜匿
スル者日ニ益々多キニ至リト即チ千六百八十七年
ニ於テ貴族及ヒ縉紳子弟ハ₁シク出征ノ最初ニ
方リ遁逃シ或ハ潜匿スル者一千三百余名アリ就中寂
モ怠惰無精ナルハ₁コストロムスク縣貴族ナリ該縣貴
族ノ其役ニ赴カスレテ潜匿スル者二百三十九名アレ
リト云フ
貴族ノ都鄙兩慕ノ情ハ十八紀ニ至リテモ猶止ム₁ナ

クシテ上等ナル者ハ首府ニ蟄集シ下等ナル者ハ退役
シテ村落ニ潜匿スルアルヲ以テ千七百三十年元老院
ニ於テ女帝安_{アン}那_ナ沃_ヲ更_ニ諾_ヲ予_ナ那_ナニ上奏シテ曰ク他ノ諸縣
ニ村落ヲ占領シ模斯格有内ニ居住スルノ貴族多キヲ
以テ同有ニ裁_{スウフノイラリカス}判_ヲ所_ヲ設ケナル可ラスト又上等貴族ハ
義務ヲ廢止セラレ後チニ至リテモ_{アレンテイシム}本_ヲ還_ル轉_{スル}ヲ止ム
₁ナクシテ之ヲ永續シタリ女帝悅_{ユエ}加_カ埜_ノ利_リ那_ナ二世ノ一
令中ニ地主ヲシテ村落ヲ離居セシメ且ツ家事生計ヲ
蔑和セシメ又家産司有ノ法規ヲ施行セ₁トヲ深ク注
意シタルヲ見ル
然リト虽ヒ若シ上等貴族ハ十七紀中ノ上等官員ノ例
ニ倣ヒ首府ヲ歛慕シテ此ニ集合スルアラハ十八紀中
ノ下等貴族ハ益々村落ノ生活ニ歛慕シテ愈々義務ヲ

困難ナリトスルニ至ルベキヲ信スルナリ而シテ貴族
 ハ義務ヲ嫌惡シテ避遁スル故ニ彼得兒大帝及ヒ其後
 帝ノ勅令ハ皆ナ懲戒ニアラサルハナシ耶ナ千七百零
 七年ニ於テハ同年八月一日ヨリ九月ニ至ルマテ軍務
 上ニ顯出セサル者ニ罰金百圓（ルブル）四分一ヲ課シ而シテ十
 月一日ニ至リ顯出セサル者ヨリ百圓ニ分一ヲ徵收ス
 ルモノトシ此期限ノ後ニ至リテ猶顯出セサル片ハ之
 レヲ鞭笞シテ（ア）速弗（ソ）ニ貶謫シ且ツ其所有ノ村落ヲ沒
 收スルモノト定ム又上等貴族ト下等貴族ト戒罰ノ差
 等ヲ生スルニ至リ上等貴族ニハ罰金ヲ課シ而シテ之
 レヲ入隊セシメ下等貴族ハ身体刑ニ処シ而シテ後ナ
 ニ（ボ）證人ヲ出サシメテ之レヲ入隊セシムルモノトナス
 又千七百十一年ニ於テハ何人ヲ論セス軍務ヲ避ケ遁

匿スル者搜索スレカ或ハ其所在ヲ通知スル者アレハ
 之レカ褒賞トシテ本人所有ノ村落ヲ下賜スルモノト
 ナス又同年ニ於テ地方ノ（コ）戍兵長ニ命シ怠惰ニシテ（ハ）
 ルゴードノ役ニ赴サル士官アレハ其家産ヲ官府ニ
 沒收シ番兵ヲ置キテ之ヲ固守セシメタリ然レハ猶
 士官ハ到底皆（ル）ゴードニ赴サル故ヲ以テ千七百
 十三年ニ於テハ其遁匿スル者ヲ捕ハ摸斯格府ニ於テ
 ハ元老院（カ）登記局ニ護送シ各都會ニ於テハ（コ）戍兵長ニ護
 送シテ囚獄ニ下ス（キ）テ命セリ而シテ又何人ヲ問ハ
 ス之レヲ捕ハテ護送スル者ニ賞金十圓ヲ下賜スルモ
 ノト定メリ若シ又聞檢ニ出ツハキ貴族少年ノ遁匿ス
 ル者アル片ハ其所有村落ヲ官ニ沒ス若レ或ハ其少年
 ヲ隱蔽スル者アル片ハ本人ト同シク其村落ヲ沒收ス

ルモノトナス千七百十四年ニ於テハ貴族少年ノ十年
以上十三年以下ナル者ヲ勤務ト學校トニ入ラシメシ
カ為メニ翌年三月ニ至ルマテ必ラス出府スヘキ令ヲ
下シタリ而シテ其潜匿スル者アリ若シ之レヲ官ニ報
通スル者ハ假セ本入ノ采地附屬ノ農夫タリト其本人
所有家産ノ全キヲ下賜スルモノトナス千七百十六年
ニ於テハ其頭出スル者ノ姓名ヲ記載調印セシメテ各
縣ニ配送シ之ヲ縣市若クハ著名ナル郷邑ニ掲示セシメ
遁逃潜匿スル者ノ姓名ヲ容易ニ知り而シテ其誰某ナ
ルヲ上申セシムル為メニセリ然リト虽比上申スル者
モ亦々甚タ少キヲ以テ彼得見大帝奏々言ヘルヲアリ
曰ク遁逃潜匿スル者ノ止マサルハ必竟郡縣管司ノ迂
濶ナルト遁逃潜匿スル者ノ上巧ナルトニ出ツルモノ

ト故ニ千七百二十一年ニ於テ法令ヲ出シ其潜匿スル
者アレハ之レニ罰金百圓ヲ課シ而シテ貴族少年ノ潜
匿シテ遂ニ搜索セラレシ郡縣ノ管司ヲモ亦々同ク百
圓ノ罰金ヲ償納スヘキヲ命シ而シテ其償納セシムル
所ノ金員ハ軍病院ノ資本ニ供スルモノトナス然レハ
此法令モ亦々其效驗ヲ顕ハサ、ル故ニ千七百二十二
年ニ於テ更ニ法令ヲ出シ一ノ期限ヲ定メ之レヲ貴族
及ビ貴族少年ノ頭出スヘキ最後ノ期限トナシ嚴ニ此
令ヲ遵守セシメシカ為メニ若シ此期限ニ頭出セサル
者アルハ之レヲ除族ニ處シ其光榮ヲ削剥ス且ツ何
事ニ拘ラス自今衆人ト共ニ其列ニ加入スルヲ許サス
加之其所有ノ動産不動産ヲモ皆共ニ官府ニ没收シ而
シテ其本人ノ姓名ヲ記載捺印シテ之レヲ廣場ノ熾臺

上ニ掲ケ刑獄管理ノ者ニ命シ太鼓ヲ鳴サシメ其帝命
ヲ犯シタルヲ以テ国賊ト相同シキヲ世人ニ公示スル
モノトナス千七百二十五年ニオリ彼得見大帝ノ疾病
ニ罹リシ際ニ於テハ大帝ノ壽ヲ祈ランカ為イニ大赦
ヲ施行シテ此遁逃潛匿スル者ヲ悉ク皆赦免シタリ彼
得見大帝殂落シ其政嗣ノ治世ニ至リテモ亦々大帝ノ
遺志ヲ續キ假セ其法度ノ寬嚴ノ左アリト虽此遁逃潛
匿スル者ヲ搜索監察シテ怠ラス即チ女帝安那沃垂諾
乎那ノ治世千七百三十四年ニ於テ凡テ貴族ノ軍役ニ
堪ユハキ者ヲ調査シテ之レヲ海陸兩軍ト大砲隊トニ配
當スハキヲ命シタリ又千七百三十六年ニ於テ再ヒ大
帝ノ嚴法ヲ興シ翌年一月一日ヲ以テ其頭出スハキ期
限ト定メ又其遁匿スル者アリテ若ヒ之レヲ女帝ニ上

奏スル者アルハ何人ヲ論ヤス本人所有ノ村落ヲ賞賜
スルモノトシ而シテ若シ本人ヲ隱蔽スル者アルハ
脱走ノ農夫ヲ隱匿スル者ニ均シク罰金百圓ヲ徵收シ
而シテ其半額ハ上奏スル者ニ賞與スルモノトナセリ
斯ノ如キ嚴法ヲ施行セリト虽此更ニ功驗ナクシテ貴
族ノ政章局長ニ出謁スル者甚々稀ナレヲ以テ新ニ嚴
令ヲ下シタリ女帝安那、列屋、撲利、土子、那、モ亦々千七百
四十一年ニ於テ此勅令ヲ下セリ女帝悦利、撒味、多、彼得、
兒、子、那、ハ人口第二調査ヲ舉行センカ為メニ派出スル
委員ニ命シ非職貴族及ヒ其子弟ヲ調査スルニ其證鑑
ノ記丈ヲ以テ證徴トナスベシ而シテ若シ貴族及ヒ其
子弟ノ政章局ノ證鑑ヲ有セスレテ其村落ニ居住スル
者アルハ確然タル契約ヲ取り之レヲ其局ニ出タス

ヲ要ス若シ契約ノ期限ニ出テサレハ其家産ヲ官府
ニ没收シ自ラ本人ヲ護送スハキモノトナセリ又千七
百四十二年ノ勅令ニ因レハ貴族少年ノ閲檢ニ出サレ
者或ハ學術ヲ講習セサレ者ハ服役無期ノ水夫或ハ兵
卒トナシ老衰ナル者ハ殖民ノ為メニ「ラレンブール」
ニ配謫スハキヲ命ジタルヲ見ル千七百四十七年ニ於
テハ唯貴族ノ其年内ニ顯出スル者ノミ之レヲ赦シ若
シ否ラサル時ニ於テハ千七百四十二年ノ勅令ニ依
リ全ク其嚴罰ヲ免ル能ハサルモノトナセリ千七百五
十四年ニ於テハ其召令ニ應セサル者ヲ以テ再セ
嚴令ヲ下シ貴族少年ノ召令ニ應セサル者ハ水夫若シ
クハ兵卒トシ老衰ナル者ハ殖民ノ為メ「ラレンブール」
ニ配謫スハキヲ定メテ其徵戒トナセリ然リト雖

賞勳局

千七百六十一年義務ヲ廢止スル前一日ニ於テ敍章局
長「クワシニ」サマリ「氏」帝ニ上奏シテ曰ク貴族少
年ノ召令ニ應セサル者到底減少セサルヲ以テ其少年
ヲ服役一年間ノ兵卒トナシ又壯年ニ至ルマテ閲檢ニ
顯出セサル者ヲ官位ニ登用スルニ他ノ勤功アル者ト
共ニ不可ラス而シテ少年ヲ隱蔽スル者ハ前文ノ勅令
ニ依テ之ヲ處スベシト
斯ノ如ク嚴法ヲ設ケテ勤務ヲ避ケ怠惰スル者或ハ潛
匿スル者ヲ懲戒セリト雖モ敢テ之レヲ願ミル者少ナ
ク依然トシテ其數ヲ減少セサルカ故ニ貴族ノ勤務ヲ
嫌惡シテ自己ノ村里ニ安居スル者モ亦多ク從テ去レト
不彼得見大帝時世ノ一農人「ポソ」コフナル者アリ人
ニ告テ曰ク往昔ノ法則ニ因レハ第三召令ノ下ルニ及

賞勳局

ンテハ必スレモ之レヲ免ル能ハサルモノナルニ貴族子弟ノ招呼ノ令彙々諸縣ニ下リ或ハ指名ノ召令アリト虽モ猶遲滞スルモノアリ或ハ不順不服或ハ皇帝ノ勅令ヲモ奉セス一步モ進出セサルモノアリ往時ノ命令ハ貴族ヲ寛治スルヲ概子此ノ如シト又曰ク曾テウストリツク驛ニ一貴族ヲドルマケイフノ一子プストシキント称スル者アレリ其人タルヤ勤務上ニ一步モ進入セスレテ如何ナル嚴令アリト虽モ之レニ應セス未タ嘗テ之レヲ捕ヘシ者アラサルナリ而シテ其地ニ在リ獨リ安慰ヲ貪リ或ハ途ニ徵捕者ヲ目撃スルアレハ奔逃シテ免レ或ハ自テ偽リ重病ト称シ或ハ偽リ狂乱トナリ身ヲ湖中ニ投シテ遁シ其狡黠詐偽擧テ數フ可ラス而シテ其近隣ノ人モ亦タ能ク彼レヲ恐怖セ

掌 薫 居

サルモノナレ其子四人アリ季子ハ年已ニ十七ナリシ時其二人ヲ徵召セラレタリ餘ノ二人ハ自家ニ居住セリ然レ共其生活ヲナスノ情状ニ至テハ未タ余之ヲ知サルナリト
ボノシコフ氏曰ク帝命ヲ奉セス共勤務ノ召令ニ應セサル者ハ嘗ニ「プストシキ」氏ノミニ「アラス」他ニ貴族ノ年月ヲ徒消シ老ニ至ル者モ亦以テ少シトセス曰ク曾テ「アレクシ」ンスク郡ニ「イワシ」ワシリイフ氏ノ一子「ゾロト」レ「フナル」者アリ里人皆ナ被レテ恐ル、
「フ」恰モ獅々ヲ怖ル、カ如シ又彼レノ勤務出役ヲ恐ル、
綿羊ノ震慄スルヨリモ甚タシトス然ルニ「クレム」スク
出征ノ役アルニ方リ其役ヲ免レント欲シテ殆ント能
サルニ至リ此ニ於テ貧困ナル一貴族「チミ」リヤゼフナ

賞 助 局

ル者ニ馬一頭、家僕兩名トテ、兵一互ニ其姓名ヲ換称
シ之ヲ代身トナシ、其役ニ赴カシメタリ而メ、ゾロトレ
一フ氏ハ其家ニ住レ、或ハ擅マ、ニ馬ニ鞭チ四隣ノ村
落ヲ暴乱シタリ是レ余カ実地目撃シテ以テ、具ニ其状
ヲ知レル所ナリト蓋シ、勤務ヲ嫌悪シ、遁匿スル者ハ唯
郡邑貴族ノミニ非ス、諸^{ツドワレツ}臣ト虽モ亦如斯ニシテ、兵役
ノ事アル時ニ臨テハ、殊ニ他ノ勤務ニ入ラン、ト是レ
望イリ而メ、貧困貴族ハ、豪富貴族ニ於テヨリ、其役務ヲ
免ル、ト最モ難シトス、ホソシコフ氏ハ其然ル理由ヲ明
説シテ曰ク、総テ貴族官職ノ事ヲ管理スル者ハ、徒ラニ
権柄ヲ擅ニシ、豪富貴族ニ應遇スルニ倣、諛ヲ用ヒ、其困
窮貴族ニ對スルニ甚タ嚴酷ヲ以テセリ、而メ、貴頭貴族
ニハ必ス禁戒ノ言ヲ要スル、トナシ、故ニ豪富貴族ハ容

勇ニ其首長ニ賄賂ヲ行フヲ得タリト、マニローフ氏ノ
記録ニ回テ觀レハ、將校及大隊長等ノ如キハ甚タ貪欲
ニシテ、猥リニ賄賂ヲ受ケリト云ヒ、又同氏ノ婿^{アスタ}
セイフ氏ハ、好マシテ軍務ニ入りシカ、當時軍務ヲ免
ル、ト甚タ難キカ、故ニ一時隊屬ノ各記官某氏ニ聊カ村
産ノ幣物ヲ贈リ、役ヲ免ル、ト得タリト、虽モ其他些少ノ
村産幣物ヲ以テ、免役ヲ買フ、ト甚タ難シトセリ、是故ニ
貴族ハ皆各々軍務ヲ免レンカ、為ニ方向ヲ一變シテ、頻
リニ學校ニ入ラン、ト望ミ、十七百十五年ニ於テハ、此
目的ヲ達センカ、為ニ一時ニ羅旬學校ニ入學スル者百
八十人余アリタリト云フ
余輩既ニ前文ニ於テ、貴族ハ其義務ヲ以テ、困難勞苦ト
ナセシヤ、否ト又其軍務ニ入ルニ從テ、漸々地主ヲ繁殖

スルニ至リレヤ否ノ実跡ハ既ニ論述ヲ尽セリトスル
所ナリ十七世紀中ニ創成セシ勤勞社會タルモノハ嘗ニ
勤勞制限ノ事ヲ詠フル能サルノミナラス又之ヲ免カ
レシテテ想フモ亦能サル所ナリレカ貴族ノ思慮ハ恒
ニ義務ヲ安クセンテ是願フニアルヲ以テ時機ニ應
ジ唯ク之ヲ論談スルヲ許セレハ取テ怪シムニ足ラス
然レハ彼得見大帝ノ治世ニ至リテハ貴族ノ之ヲ論ス
ルホタ常テ其一言ヲ發スルニ至ラサルハ彼得見大帝
カ毎時ニ貴族ニ諭示スルニ國家ノ為ニ尽スハ貴族本
分ノ最大義務ナリト固信セシメタル故ヲ以テナリヤ
帝「安那沃亞諾」ノ位ニ即クニ及シテ先ツ貴族ハ喋
々義務ノ事ヲ論談シ朝廷ニ上申シテ曰ク貴族服役ノ
期限ハ二十年ト定メサル可ラスト貴族ノ此事ヲ請求

賞勳局

シタルヲ以テ「ウオレイ」スキイ氏ノ一奇説アリ是レ
即チ同氏ノ「カサシ」郡ヨリ「サルトコフ」氏ニ寄送セシ一畝
ナリ曰ク予既ニ聞ク將ニ貴族ヲシテ勤勞ヲ隨意ナラ
シメントスト曰テ予此ニ一言セシ曰ク全ク貴族ヲ羈
束スルハ其甚々難ニスル所ニシテ之レヲ勤ムルモ亦
甚々適セサルバシ然レハ之ヲシテ全ク隨意自由ヲ
得セシメハ魯國人民ハ悉ク皆名譽ヲ好スレテ懶惰ニ
流レ心カラ勞スルヲ欲セサレニ至ルテ君ノ能ク知レ
ル所ニシテ余輩ノ贅言ヲ待サルバレ是故ニ若シ之ヲ
シテ全ク隨意ニシテ即カ其之ヲ抑制スル所ナキニ至
ラシメハ貴族ハ皆ナ自己ノ家ニ在リテ唯麥餅ノミヲ
食セ其家ニ寢食スルヲ是レ好ミ心カラ勞シテ光榮ヲ
求ムルト元分ノ飲食ヲ得ルトハ取テ之ヲ欲スルモノ

賞勳局

ナキニ至リ唯々拮制使役ヲ受クルノ愚民ノミヲ我魯
 國ニ遺雷スルニ過キサルハシ加之貴族ニ附給スヘキ
 相當ノ官位ヲモ受クル者ナカリセハ從テ軍則モ皆ナ
 共ニ消滅スルニ至ルハシ若シ卑賤貴族ノ軍役ヲ放免
 スルニ至ラハ必ス其自ラ農事ニ力ヲ勞シテ身ヲ養フ
 ニ習ハサルヲ以テ其耕シテ得ル所ノ穀物モ亦從テ些
 少ナルニ過ザルヤシ而メ其他或ハ梟子追奪強盜ヲ事
 トシ甘シテ其益ヲ利トシ各々其家ニ盜賊兇徒ノ巢屈
 ヲ成スニ至ルベシ故ニ今後ハ依令之ヲ放免スルトモ
 幼年輩ヲシテ隨意ニ泥ニ空シク年月ヲ徒消スルナカ
 ラシメシカ為メニ之ヲ戒メ又其服役多年ナル者ニハ
 幾人附屬ノ土地ヲ附給スルモノトセハ可ナラン乎ト
 又「ウオレイ」ンスキイ氏ノ説ニ曰レハ貴族ハ義務ヲ免

止セラレ後ニ皆懶惰ニ流レ勤勞ヲ好マスシテ唯各自
 ノ家ニ安居スルニ至リ又地主ハ奴隸使役ノ法ヲ廢止
 セラレテ後耕耘ニ勞カシテ自活スレヲ知ラサル者ア
 ルニ至ルベシト云フ然リト虽ハ貴族ハ其義務ト固著
 シテ粘クモ離ル可ラサルモノト見ユ例ハハカシンス
 ク郡貴族ハ義務ヲ廢免セラル後ニ至リ猶千七百六十
 七年ノ會議ニ於テ其代議人ニ請求各ヲ出シテ曰ク當
 郡ノ貴族皆國家ニ十年間ノ奉職ヲ望メリ然レハ若シ
 其免役ヲ願フ時ニ於テハ速ニ之ヲ免スハレト然リ而
 メ貴族義務ノ期限ハ「ウ」帝「安」那「沃」亞諾「子」那ノ治世ニ至
 リテ貴族ノ制定セシ所トナル即チ其帝位ニ即クニ及
 テ「キ」ラシムス「ク」新隊ヲ補充スルノ良策ヲ得サレ可ラ
 サルニ曰テ更ニ軍事會議ヲ設ケ「ミ」ニ「ハ」氏ヲ以テ其

會議長ト定ム而メ「キラシル」スク隊ヲ補充スルノ問題
ハ義務ノ期限ヲ制定スルノ問題ト連結ヲナスニ至リ
千七百三十一年會議ヲ以テ次章ノ條款ヲ元老院ニ上
申セリ曰ク幼年貴族ハ唯期限ノ年期ノミ勤仕セサル
可ラス而メ其満期免役スルニオリテハ官位一等ヲ進
メラ之ヲ免スバシ然レモ若シ其父兄ハ幼年貴族ヲ以
テ家事生計ヲ司ラシメニカ為ニ其家ニ留メンコトヲ願
フ時ハ服役六年トナシ其他ハ皆二十五年トナス而メ
此定則外ニ免役ヲ願フ者ハ「キラシル」スク隊中ニ代役
人ト馬トヲ出サバシラシラス但シ服役六年ノ者ハ「キラ
シル」スク隊ニ其家僕一名ト鞍馬一匹トヲ出スハク若
シ其家僕及鞍馬ヲ出スラ欲セサル者ハ「キラシル」スク
隊附属ノ會計局ニ一百五十圓ノ金額ヲ償納セサル可

ラス而メ服役二十五年ナル者ハ全ク何等ノ償納ナク
若シ十二年ニシテ免役ヲ願フ者ハ唯家僕一名ヲ出ス
ヲ定ムベシト前文ニ載ヌル所ノ計算ハ唯農夫千人以
下ヲ有スル者ニノミ限り千人或ハ千人以上ヲ有スル
者ハ之ニ一倍スルモノトナス而メ若シ數男アリテ唯
其一人ヲ二十五年ノ服役ニ出シ餘ハ皆六年ノ服役ニ
出サシコトヲ願請スル父ハ其子一人毎ニ各々其家僕一
人ト馬一匹トヲ「キラシル」スク隊中ニ出スハレ然レモ
若シ其子服役六年ニメ満期ノ後又二十五年ノ役ニ入
シコトヲ願フ時ハ前ニ徴收シタル家僕ヲ放テ其家ニ歸
ラシム是レ其地主ヲシテ自ラ永期ノ役ニ入ラシメン
カ為ニスルモノナリ又若シ其貴族ハ諸子ヲシテ定則ノ
年期及ヒ全ク免役セシメント欲スル片ハ本人ニ代フ

實効

ルニ各々家僕三名ツ、ヲ出シ馬モ亦其人數ニ準ス、
シトセリ故ニ元老院ニ於テ令ヲ下シ貴顯貴族ニシテ
其村落ニ田地家産ヲ元分ニ有シ恒ニ随意自由ニシテ
役ニ出テス好シテ家僕ト馬トヲ償納シ免レテ其家ニ
外食ニ悉ク怠惰無精ニノミ是レ泥ニ無學無行ナル者
ノ為ニ定限ノ年期ヲ定ムルハ不可ナリ又定額ノ人馬
ヲ償納スル能ハスシテ六ヶ年期ノ服役ニ決定セラレ
氏後怠惰ニ流レ無精ニ走ル者ハ縱令其村落ヲ賣却セ
シムル氏キラシスノ隊ニ百五十圓金ヲ徴收スベシ
然レ氏唯赤貧ニシテ金ク償物ヲ納ムル能サル者ノミ
定限ノ年期ニ至ルマテ其役ニ在ラシムヤレ而メ又其
軍役放免ノ後検査ヲ經テ其任ニ堪ユベキ者ハ文務ニ
就クモノト定ムヤレ若レ前章ノ償ヲ出シテ放免ヲ得

賞
勳
局

ル片ハ文務ニ定ムル能サルヤキヲ定メリ斯ノ如クニ
シテ服役年期ノ問題ハ漸々行レテ永續シタリ千七百
三十六年十二月三十一日ノ詔各ニ曰テ觀ルニ千七百三
十年貴族ノ請求セシ條款ト千七百三十一年軍事會議
ヲ以テ申上セシ事件トニ復帰シ服役年期ハ貴族ノ請
求セシ二十年ヲ以テ定メヌメ軍事會議ノ申上セシニ
十五年ヲ以テ定メラレ又他ノ條款ヲモ採用セラレ數
男アル者ハ其中一人ヲ家ニ留メテ生計ヲ管シムルヲ
定メラルマシシ氏ノ言行録ニ曰レハ千七百三十
六年十二月三十一日ノ詔書ハ則チ「ミ」ニハ氏ノ獻議
セシ所ナリト云フ又余輩前文ニ開陳セシ如ク「ミ」ニ
ハ氏ハ千七百三十一年ノ軍事會議長トナレルモノナ
リ而メ此詔書ハ世上ニ公行シ得タル丁漸クニシテ「ウ

賞
勳
局

オレシスキイ氏ノ豫言ト元老院ノ記録トハ偶然應當
セルカ如クニメ士官ハ概テ皆テ退役スルニ至リ三十
年左右ノ壯士ト十年或ハ十二年ヨリ隊中ニ編入セラ
レシ幼年貴族モ皆共ニ退役ヲノミ是レ侍望スルニ至
レリ故ニミ^ミニハ氏ハ議事輔院ノ異議ヲ蒙リ服・役ノ
定期ハ一般ニ廢止セラレ為ニ千七百四十年癸行ノ八
千零二十一号ノ詔各及女帝悦加埜利那彼得兒乎那ノ
治世八千六百八十三号ノ詔書ハ遂ニ其勢ヲ回復スル
ヲ得サルニ至リメリ是蓋シ貴族ノ義務ヲ免レテ自由
ニ進入スルノ第一初歩ニメ三世彼得兒帝ニ至リ第二
歩以下ノ道ニ進涉スルニ至ル既ニ「イワシ、イワノウ井チ
シワロフ氏ハ千七百五十年ニ於テ同一社會ノ人ヲシ
テ義務ノ苦域ヲ安易ナラシメシ」トテ願念シ數款ノ確

法ヲ設立セン「ト」圖リシカ同氏ノ諸友及「ウオルゴフ
氏ノ社友英ニ「ウオロンツ」フ氏兄弟及「メグノフ氏等此
意圖ヲ主唱シ女帝悦加埜利那彼得兒乎那治世ノ末時
ヨリ大侯^後ナ帝位ニ即キ^世ニ親近シタリ蓋シ「シテリ
ニ氏ノ説ニ曰レハ大侯ハ帝位ニ即シ數年前ニシテ屢
々貴族ヲシテ義務ノ自由ト外國ニ旅航スルノ權利ト
ヲ得セシムルヲ怠ル可ラスト言ハリト云フ彼得兒三
世ノ帝位ニ即クヤ否ヤ其初日ヲ以テ服役ノ貴族ヲ放
免シタル「其數頗ル多シト」即チ十二月二十五日ヨ
リ三十一日ニ至ルマテ僅ニ近衛四小隊中ヨリ赦免セ
ラル者百七十余人ニ至レリト又「ロマノ」ラリアノウ井
チ「ウオロンツ」フ侯ハ貴族ニ自由ヲ附與セン「ト」主唱シ
タリト云フ千七百六十二年二月十八日ヲ以テ詔書ヲ

賞勲局

魯西重全國ニ公布シ悉皆其自由ヲ得セシメタリト又
シテエムバトフ侯ノ誹評録ニ曰レハ永世ニ効驗ヲ
遺スヘキ詔詔書ハ次章ニ開陳セシ如クニ大ニ魯國
ノ風儀ヲ損害セリト曰ク昔テ彼得見三世ハウオロシツ
ラウナ侯女ニ配セリト虽氏容貌醜惡ニイ且ツ頑情ナル
ヲ以テ帝常ニ之ヲ愛セス直ニ他ノ美女ヲ聘セント欲
ス即チナレシキン氏ヲレテ一夜ステパノウナクラシ
キナ侯女ヲ聘シ来ラシメ之ト娛樂ヲ極メンカ為ニ各
記官ウオレコフ氏ヲシテ偽テウオロンツラウナ侯女ニ
告ケシメテ曰ク帝ハ此夜衆ト共ニ一大事件ヲ決議セ
ントスト巴ニシテ夜ニ入り時ニ帝書記官ウオレコフ
氏ニ命ジテ曰ク汝テ明朝ニ至ルマテ一ノ成法ヲ書記
スヘシト而メ帝韃韃犬ヲ牽キ空室ニ入り直ニ戸ヲ鎖

シテ其女ト共ニ娛樂ヲナレタリ然ルニウオレコフ氏
ハ其各記スル所ヲ知ラスト虽氏帝命アルヲ以テ各記
セサルヲ得サルナリ此ニ於テ同氏ハ回顧推量シテ以
為ク「ロマン」ヲリヲノウ井チウオロンツラ侯曾テ貴族ニ
自由ヲ得セシムバキヲ屢々帝ニ上奏シタルヲアリ然
レハ則チ必ス是ナラント臆断シテ以テ詔書ヲ作り翌
朝帝ノ室ヲ出ツルヲ待テ之ヲ帝ニ捧ケテ帝乃チ之
ヲ取リテ直ニ公行セシメタルモノナリト是書記官ウ
オレコフ氏ノ「シテエムバトフ侯ニ告クニ所ナリト云
フ此ニ於テ余輩ハ初テ貴族ノ自由ヲ得ル何意ニ出ツ
ルヤヲ知ル是ニ曰テ之ヲ觀レハ「シテエムバトフ侯ノ
貌ハ其至當ヲ得タルモノト信スルナリ然レ氏セメフ
スキイ氏ノ説ニ曰レハ「シテエムバトフ侯ノ證徴スル

實効

所ハ又疑ノ起ル所アリ即千七百六十二年二月十八日
 発行ノ詔書ノ趣意ハ既ニ一月十七日ニ於テ元老院ニ
 其兆ヲ顯シタリト云ヒ又該詔書ヲ記スル者ハ各記官
 ウオルク^ルコフ氏ニ非スレテ大判事^ルアイグレボフ氏ナリ
 ト又此詔書ハ即チ親シク帝ノ漸次ニ制定シタル、モノ
 ナリト云フ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading.]

